

Contents

- Reading Ichiyu Higuchi's marriage stories
MIZUNO, Akiko...1
- Contrastive Study of the Apologetic Expressions on the Occasion of Gratitude
in Japanese and Chinese -From the Perspective of Politeness-
LI, Huayong...14
- Structural Characteristics of Saigoku Pilgrimage from the Standpoint of
Comparative Pilgrimage Studies
Sighinas Mihaela Lacramioara...29
- Rarely Recognized Traits of Adjectives: A factor that causes "cause" in the
interpretation of the "-te" form juncture in Japanese adjectives
TAKEDA, Motoko...40
- A study of intercultural awareness of high school students participating in a
short-term study program in Japan: an analysis with AUC-GS learning
model and acculturation
FONGSATAPORN, Kavita...54
- Taijun Takeda's story of Shisanmei
CHEN, Yining...74
- Topics written in Japanese letters of introduction for job application: A
contrastive analysis between Thai learners and Japanese students
KOYAMA, Koki...98
- The Corpus Based Study of Japanese Idioms; In case of Idiom starting with
"Me"
BUAYOI, Ittiphol...118

April 2014

Chulalongkorn University - Osaka University

目次

- 樋口一葉の作品を読む —明治の結婚をめぐる—
水野亜紀子...1
- 感謝場面における謝罪表現の日中対照研究 —ポライトネスの観点から—
李華勇...14
- 比較巡礼研究の視点からみた西国三十三ヶ所巡礼の構造的特徴
シギナシ・ミハエラ...29
- 気づきにくい形容詞の特性 —形容詞テ形接続に〈理由〉の読みが生まれる要因—
武田素子...40
- 日本短期交流に参加したタイ人高校生の異文化認知 —AUC-GS 学習モデルに基づく分類
と異文化受容の5つのステージ—
カウィター・フオンサターポー...54
- 武田泰淳の十三妹小説
陳怡寧...74
- タイ人学習者は日本語就職用自己PR文で“何をPRしているのか” —PRの対象に関する
日本人との比較—
香山恆毅...98
- 日本語慣用語の研究 —「目」が句頭に位置する慣用語を中心に—
イティボン・ブアヨイ...118

2014年4月

チュラーロンコーン大学・大阪大学



この報告書はタイ国トヨタ自動車株式会社の出版援助によるものです。

The Japanese Studies Journal is published under the auspices of Toyota Motor Thailand, Co., Ltd.

巻頭言

2013年8月27日、チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科において、「第12回大阪大学・チューラーロンコーン大学院生国際シンポジウム」が開催された。このシンポジウムは、2005年から、両大学の研究交流の場としてほぼ年1回のペースで開催されてきたものである。はじめは20名程度の小さな交流会であったが、年々規模が大きくなり、今回は70名を超える大会となった。

今回は両大学院生だけでなく、タマサート大学院生を含む7名の発表者が研究発表を行った。当日の発表は、言語・教育・文学・文化と分野も多岐にわたり、いずれの発表も高度な専門性を持つものであった。さらに、発表に対する質疑応答においても活発な議論と討論が行われた。おそらく発表者にとっても、参加者にとっても非常に有意義な発表会になったのではないだろうか。

個人的なことになって恐縮だが、私は2007年からチューラーロンコーン大学で教鞭をとらせていただいていたこともあり、赴任以降、何らかの形でこの発表会に関わってきた。したがって、この発表会の意義だけではなく、主催者側の大変さについてもよく理解しているつもりである。

大阪大学からの参加となった今回を機に、これまで両校の交流における様々な局面で大変なご尽力とご協力をいただいたこと、そして今回も実りある研究発表会を主催してくださったことに対し、大阪大学を代表してチューラーロンコーン大学東洋言語学科日本語講座の皆様へ改めて感謝の意を表したい。

最後に、本論集が多くの日本研究者にとって刺激的なものとなることを願ってやまない。

2014年3月吉日

大阪大学日本語日本文化教育センター
岩井 茂樹

目次

| | |
|---|-----------------------|
| 樋口一葉の作品を読む—明治の結婚をめぐる— | 水野亜紀子... 1 |
| 感謝場面における謝罪表現の日中対照研究 —ポライトネスの観点から— | 李華勇 ... 14 |
| 比較巡礼研究の視点からみた西国三十三ヶ所巡礼の構造的特徴 | シギナシ・ミハエラ ... 29 |
| 気づきにくい形容詞の特性 —形容詞テ形接続に〈理由〉の読みが生まれる要因— | 武田素子 ... 40 |
| 日本短期交流に参加したタイ人高校生の異文化認知 —AUC-GS 学習モデルに基づく分類と異文化受容の5つのステージ— | カウイター・フォーンサターポー... 54 |
| 武田泰淳の十三妹小説 | 陳怡寧 ... 74 |
| タイ人学習者は日本語就職用自己PR文で“何をPRしているのか” —PRの対象に関する日本人との比較— | 香山恆毅... 98 |
| 日本語慣用句の研究 —「目」が句頭に位置する慣用句を中心に— | イティボン・ブアヨイ ... 118 |

Contents

| | |
|---|-------------------------------------|
| Reading Ichiyo Higuchi's marriage stories | MIZUNO, Akiko... 1 |
| Contrastive Study of the Apologetic Expressions on the Occasion of Gratitude in Japanese and Chinese -From the Perspective of Politeness- | LI, Huayong ... 14 |
| Structural Characteristics of Saigoku Pilgrimage from the Standpoint of Comparative Pilgrimage Studies | Sighinas Mihaela Lacramioara ... 29 |
| Rarely Recognized Traits of Adjectives: A factor that causes “cause” in the interpretation of the “-te” form juncture in Japanese adjectives | TAKEDA, Motoko 武田素子 ... 40 |
| A study of intercultural awareness of high school students participating in a short-term study program in Japan: an analysis with AUC-GS learning model and acculturation | FONGSATAPORN, Kavita ... 54 |
| Taijun Takeda's story of Shisanmei | CHEN, Yining ... 74 |
| Topics written in Japanese letters of introduction for job application: A contrastive analysis between Thai learners and Japanese students | KOYAMA, Koki ... 98 |
| The Corpus Based Study of Japanese Idioms;In case of Idiom starting with “Me” | BUAYOI, Ittiphol ... 118 |

樋口一葉の作品を読む —明治の結婚をめぐる— Reading Ichiyo Higuchi's marriage stories

水野 亜紀子

大阪大学日本語日本文化教育センター 講師

要旨

本稿は明治の女性作家、樋口一葉とその作品について話したことを文章にしたものである。いま日本で一葉はどのくらい読まれているか、一葉はどのような作品を書いたかという二点について概説したのち『この子』の分析を示した。語り手が子に対して用いる「可愛い」という言葉が一般的な意味とは異なることに着目すると、従来いわれているような、母性の称揚とは異なる主題が浮かび上がる。この作品には辛いとしか思えなかった境遇を生きるに値するものとして捉え直すことができた喜びを語るという側面があり、その意味で時代をこえた普遍的なテーマを内包している。

キーワード：日本近代文学、樋口一葉、家父長制度

Abstract

This article is based upon a speech on a writer of Meiji period, Ichiyo Higuchi, and her works, given at the conference held at Chulalongkorn University on August 27, 2013. First, this article gives a brief review on how popular her works in Japan and what styles she used. After that, this paper gives an analysis of the work *Konoko* especially focusing on the word 'kawaii' ('cute') used by the narrator to mention her own child. In this work, the word 'kawaii' has a different meaning from what is meant by this word in general. This sheds light on another theme of the work, which is different from the well-known theme "praise of motherhood." That is, this work has the universal theme of the delight when we found the meaning of life from hardships.

Keywords: Japanese modern literature, Ichiyo Higuchi, patriarchy society

これは2013年8月27日にチューラーロンコーン大学において開催された大学院生研究交流会において「樋口一葉の作品を読む—明治の結婚をめぐる—」という題目で、明治生まれの女性作家・樋口一葉とその作品について取り上げた講演の記録である。文字化するにあたり、適宜加筆修正した箇所がある。一葉の日記と作品の引用は『樋口一葉全集』（筑摩書房、1991）に拠る。ただし漢字は適宜通行の字体に改めた。傍線は筆者の付したものである。

今日は明治時代に活躍した女性作家、樋口一葉と、彼女の作品についてお話しします。内容としましては、大きく三つの項目を立てました。一つ目は「いま日本で樋口一葉とその作品はどのように受け取られているか」ということ、二つ目は「一葉はどのような作品を書いたか」ということです。そして三つ目の項目では、作品を取り上げて内容を具体的にみていきたいと思います。その作品を詳細に読み解いていったときに、どのようなことがわかるかといったことにも言及したいと思います。よろしくお願ひいたします。

まずは日本で一葉がどのような存在なのかという話ですが、いま日本銀行が発行している5千円紙幣には、一葉の肖像が使われています。5千円はいまのレートで換算すると、約1700パーツに相当するお金です。その約1700パーツにあたる5千円紙幣に一葉の肖像が使われていることは、実はたいへん皮肉な事態といえます。なぜでしょうか。それは、一葉がお金にとっても苦労した人だからです。一葉が記した日記には、お金に関する悩みが頻繁に書かれています。一葉の日記は文学性が高いと評判で、いまでも多くの人に読まれています。その中の一節を参照しましょう。

昨日より家のうちに金といふもの一銭もなし 母君これを苦しめて姉君
のもとより二十銭かり来る（「よもきふ日記」明治26年（1893）3月15日）

ここからうかがえるように、一葉の家はお金に困っていました。借金を重ねて過ごしていたといえます。

日本で有名な作家の一人、夏目漱石もお金で嫌な思いをした人として有名ですが、彼もまたお金になっています^①。1千円札に肖像が用いられていました。ちなみに、1千円は約333パーツに相当します。漱石は子どものころ、両親の都合で他の家へ養子に出されました。漱石に兄はいましたが、20歳の頃、家督の相続にかかわる事情で夏目の家に戻されることとなります。そのとき、育ての親はこれまで養育してきたという名目でお金を要求したといえます。漱石はあたかも商品のように扱われたのです。その金額は当時の240円でした。パーツになおすといくらになるのでしょうか。昔の1円の価値が現在のどれほどなのかをまずは考えなければなりません。当時のお給料を例にとりて考えたとき、明治の後半において1円が現在の2万円ほどの価値であったことを参考にすると、ざっと160万パーツくらいでしょうか。あくまで大雑把な計算になります。いずれにしても、この出来事は、漱石の心に重く響いたようです。育ての親は、漱石が新聞社で働いているときにもお金を無心したといえます。こうしてみると、漱石の本名が「金」の字が入った「金之助」だということもまた、まことに皮肉なものです^②。

一葉の話に戻りましょう。一葉がお金のデザインになっていることが皮肉だというのは、別の理由もあります。お金のデザインなので、いまでは子どもでも一葉の存在を知っているといえるでしょう。しかし、作家として本当に広く知られているのでしょうか。一葉の小説を読んだことがある子どもは、ほとんどいないといってもよいのではないのでしょうか。それはなぜでしょう。一つには内容の問題が考えられますが、文体の問題も大きく関与しているのではないのでしょうか。現代日本語と比較すると異なった部分が多く、読みにくく感じられます。『たけくらべ』の冒頭をみてみましょう。

① 石原千秋『漱石の記号学』（講談社、1999）、小森陽一『漱石を読みなおす』（筑摩書房、2006）を参照した。

② 「金之助」という名付けには、「庚申」の日に生まれた子は「大泥棒」になるので「金」の字を付けるとよい、という俗信に由来するという。（小森、前掲書）

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は広くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き（『たけくらべ』）

これをみると、まず切れ目のない文章に圧倒されて、書かれていることの意味を理解するのが難しいと感じるに違いありません。一葉は昔ながらの書き言葉と会話で用いる言葉の両方を用いながら小説を書きます。現代の日本語に慣れている人からすると、慣れないスタイルです。声に出して読むと、目で追っているよりは自然に内容を理解しやすくなるといわれていますが、みなさんは文章を眺めてみて、どのように感じられたでしょうか。

一葉はお札の柄に採用されて、顔は広く知られたのに、その仕事内容はほとんど知られておらず、作品を読まれていないというのが現状です。しかし、読まれないから「大切ではなくなった」といえるでしょうか。また、「古びた」のだといえるでしょうか。文体や、書かれている風俗、物の考え方は過去のものになっても、作品の持つ力がそれに伴って失われていったとは決していえません。お札に採用されているところからもわかるように、一葉の作品には価値があります。いまはそのことがみえにくくなっているだけなのです。文学研究には、作品の価値について論じ、再評価し続けていくという使命があると思います。一葉にそのような研究の目が向けられると、今後も多くのことが明らかになると思います。

さて次の項目に移りましょう。一葉がどのような作品を書いたかということです。まずは簡単にその特徴を紹介しましょう。スライドには「貧しい人、弱い立場の人に焦点をあてる」と書きました。それから「それらの人々をとりまく現実、悲哀を描く」と書きました。一葉は世の中の哀しみを、じっとみつめるような小説を書きます。ただ、同時に、作中の登場人物たちに、とても優しいまなざしを向けているともいえます。スライドには鍋木清方の絵を一緒に載せましたが、絵のモチーフとなっている『たけくらべ』は一葉の代表作といわ

れています。

これは個人的な思いではありますが、文学研究をするとき、あまり世に知られていない作品を取り上げてそれを丹念に検討していくことは、代表作について研究することと同じくらい大切ではないでしょうか。それらがもっと面白く読めるような可能性を示していくことで、作品の価値を考え直していきたいと常々思っています。そこで、今日は『たけくらべ』ではなく、その他の作品についてお話しさせていただきたいと思います。

一葉は結婚を題材とした作品を6編書いています。次の通りです。

『雪の日』（『文学界』明治26年（1893）3月）

『軒もる月』（『毎日新聞』明治28年（1895）4月）

『十三夜』（『文芸倶楽部』明治28年（1896）12月）

『この子』（『日本乃家庭』明治29年（1896）1月）

『裏紫』（『新文壇』明治29年（1896）2月）

『われから』（『文芸倶楽部』明治29年（1896）5月）

今日はその中でも『この子』を取り上げ、少しだけ分析の結果を示します。なぜ『この子』を取り上げるのかというと、これは口語体で書かれているので、一葉の作品の中でもとりわけ私たちにとっては読みやすいからです。また、決して有名な作品ではありませんが、そこにはある意味で一葉の結婚小説の特徴がよく出ているからです。

『この子』は明治時代の結婚を題材として扱っており、封建的な社会を背景にしています。簡単にいえば、そこには「家」が何より大事だという価値観があります。当時、女性は「家」の代表者である自分の親を頼ってしか生きられません。そのため、親が結婚のことについて取り決めると、それに従わざるを得ませんでした。もちろん、嫁げば「家」の代表者である夫を頼ってしか生きられません。嫁いだ後には、何があっても夫に従うことが美德だといった考え方がありました。『この子』を読んでいくと、親や親代わりの人の取り決めに従わなければならないことの辛さや夫の横暴に堪え忍ぶことの辛さが多くの言葉を費やして書かれているので、そこからは結婚制度への批判、嫌悪感が

読み取れるといえるでしょう。ゆえに、多分に時代に対する抗議の意味合いを帯びた作品であるといえます。

しかし、この作品には当時の結婚制度への抗議が表現されているだけなのだろうかという問題意識をあえて持つことで、さらに考察を深めたいと思います。文学研究をするとき、詳細に本文を検討していくことは、とても面白い作業であり、かつ大切なことだと思っています。なぜならそこには発見があるからです。本文と向き合うことは研究にとり、とても大事なことだと思っていますので、少しだけ『この子』という作品を例にとり、本文と向き合ってみたいと思います^③。

まずは『この子』の内容を紹介します。これは、ある女性が結婚生活を振り返って語るものです。この小説は「我が子が可愛い」という発言から始まります。語り手は作中において、自分のことを「私」と呼びますので、それにならって話を進めましょう。「私」は3年前に裁判官と結婚しました。「私」の勝気な性格と、「私」に対する夫の冷たい態度が災いして、夫婦の仲がこじれたといいます。この小説は、簡単にいうと、夫婦の仲が悪かったときの苦痛を切々と語るものとなっています。夫婦の関係は、離婚を考えるほど悪くなったといいます。離婚をしたら、女性はその後、経済的に一人では生きていけない時代のことです。そのような折、子どもが生まれてきたことによって、夫婦の関係が好転したといいます。現在の「私」は、夫婦の仲を取りもつことになった子どもが可愛くて、ありがたくて、「宝」だと思っているといいます。

内容は以上です。では、これまで本作はどのように読まれてきたのでしょうか。この作品は一言でいうと、離婚の危機にあった女性が子どもを産んだことで、母性によって、離婚の危機から救われる話です。難しい本ではなく、一般的な女性が買う雑誌に載せられたので、「母性のすばらしさ」というわかりやすい通俗的な内容の小説だと思われてきました。その一方で、先行研究においては、あくまで昔の感想として語られる「結婚は嫌だった」「辛かった」という「私」

^③ 以下『この子』の分析は拙稿「樋口一葉『この子』—ありふれたことを話題とする「私」—」（『語文』第90輯、2008）に基づく。

の告白の部分こそが「本当に伝えたいこと」ではないかと捉えられています。つまり「昔のことだから、いまならもういってもいいよね」という意味で語られる、「嫌だった」「辛かった」という思いこそが、本当に伝えたいことだというのです。確かに作中には、「私」の辛い胸のうちの長々と語られていました。

今日は、これらとは別の読みを提示したいと思います。従来の読みに対して疑問を投げかけるという、素朴な問題提起をしながら話を進めましょう。

まずは「我が子が可愛い」という言葉が、本当に母性から発せられる言葉なのかという問いを投げかけようと思います。【引用1】は冒頭です。傍線部をみてください。語り手の「私」は、「我が子が可愛い」といいます。

【引用1】口に出して私が我が子が可愛いといふ事を申したら、嘸みな様
は大笑ひを遊ばませう、夫れは誰様だからとて我が子の憎くいは有りませぬもの

確かに、他の箇所にも「可愛い、いとしい、と言ふ事は産声をあげた時から何故となく身にしみて」とあるので、出産とともに母性愛という意味で子を可愛く思っていることは間違いありません。しかし、「私」が語る「可愛い」という言葉は、母性からくる「可愛い」という感情を表現するだけでしょうか。

もう一度【引用1】をご覧ください。そこに「嘸みな様は大笑ひを遊ばませう」とあることからうかがえるように、語り手は、母親が子を「可愛い」と発言することが、笑いを誘うほど、当たりまえで、ありふれたことだと認識しています。しかし、ありふれたことをあえて語ろうとするのは何故でしょう。ありふれたこととは別の意味が、そこには含まれているのではないのでしょうか。「私」が「我が子が可愛い」というとき、母性から感じる可愛さのことだけをいっているのではないのだとすると、では、この語りはいったい何なのでしょう。

そこで、「我が子が可愛い」というときの「可愛さ」とは何なのか、本文に即して考えていこうと思います。「私」は子が生まれたとき、母性から、いとしい

とは思っても、その一方で初めのうちは、その子が死ねばいいのと思っていた事実を語ります。【引用2】ですが、子が生まれたことで、仲の悪かった夫と離婚しにくくなったので、当時は子どもの死を願ったのだと語っています。

【引用2】あゝ何故丈夫で産れて呉れたらう、お前さへ死なつて呉れたな
ひだち
ら私は肥立次第実家へ帰つて仕舞ふのに

子どもの存在によって夫婦の仲が良くなりましたよ、という話であるはずなのに、その語りの中には、【引用2】のような言葉が含まれています。ここからは、実は、子が生まれたという事実だけでは夫婦の仲は修復しないものであったことがわかります。では、結局、どうやって夫婦の仲は修復したのでしょうか。それは、「子が生まれたから」自然にそうなったのではなく、「私」の意識に変化があったから、夫婦の仲が修復したのです。実は、語り手はそのことを主張したくて仕方がないのです。

「私」の意識に変化があった、といました。そのことについては【引用3】をみましょう。

【引用3】今このやうに好い女中ばかり集まつて、此方の奥様位人づかひ
よ
の宜い方は無いと嘘にも喜んだ口を聞かれるは、彼の人達の不奉公を私の
あ
心の反射だと悟つたからの事

これは、自分の心の持ち方、振る舞い方によって、周囲の人々の態度が良い方へと変わったのだと説明する箇所です。また次のようにもあります。

【引用4】私は此子が可愛いのですもの、何うして旦那様を憎くみ通せませう、私が宜くすれば旦那さまも宜くして下さります

これは、自分の心の持ち方、振る舞い方によって、夫の態度が良い方へと変わ

ったことを喜ぶ言葉です。子どもの存在があったからこそ、「私」は、自分の意識いかんで結婚生活の状況がただ辛いものからそうではないものへ変わること
に気付くのです。語り手は次のようにいいます。「此無心の笑顔が私に教へて呉
れました事の大層なは、残りなく口には言ひ尽くされませぬ」。また、次のよう
にもいいます。「私の身の一生を教へたのはまだ物を言はない赤ん坊でした」。
語り手にとって子どもは、「教える存在」であるといえます。何を教えたのかと
いうと、先ほども述べましたように、自分の意識の持ち方によって、辛い状況
がそうではないものへと変わる、ということです。他に【引用 5】のようにも
語ります。

【引用 5】此子の笑顔のやうに直接に、^{じき}眼前^{まのあたり}、かけ出す足を止めたり、
狂ふ心を静めたは有りませぬ

「かけ出す足」「狂ふ心」とあるように、昔はすてばちな態度で結婚生活を送
っていて、発作的に、家出を考えていました。しかし、子どもは、その衝動を
おさえたといえます。すてばちになることの愚かさを教える存在となっていた
のです。

だから、この語りは一見すると通俗的な、「母性」からくる「子が可愛い」話
をしているように思えますが、決してそうではないといえます。「私」は子が教
える存在なのだ気付いたから、子を可愛く思うようになったというのが本当
のところ、実は、語り手が強調する「子の可愛さ」とは、本能や、または後
天的に身に付いた母性のことをいいたいのではなくて、自分に生き方の指針を
示してくれたと感じとれる、子への感謝の気持ちからくる言葉なのです。

それでは次の問いに移りましょう。結婚に関する恨み言をいうところに本作
の主眼があるのか、という問いかけです。これについて考えるためには、過去
を語る語り手が、わざと自分の醜さを大げさにさらけ出す語りとなっているとこ
ろに注目してみましょう。例えば次の箇所です。

【引用 6】お出むかへこそ規則通り致しまするけれど、さし向つては一言の打とけたお話しも申上ず、怒るならお怒りなされ、何も御随意と木でごずい鼻をくゝるやうな素振をして居ますにそぶり

夫に対して、怒りたければ怒ればいいでしょう、と、思つて、無愛想にしていたというのです。これは、語り手である「私」の過去の行動です。なかなかひどいものですが、そういったところを積極的に語っていくという特徴があります。さらに次のような点にも気付きます。否定的な自己規定を繰り返すという事です。

【引用 7】私のやうに身の廻りはまは 悉く心得ちがひばかりで出来上つて、ことごと一つとして取柄の無い困り者

【引用 7】はほんの一例で、ハンドアウトにはのせていませんが「生意気」や「蓮葉な私」（「蓮葉」は軽はずみで落ち着きがない態度を意味していますが）、そのようにいう箇所もあります。また、かつての自己中心的な面を熱心に積極的に語る所にも注目しましょう。

【引用 8】すべての衝突を旦那さまのお心一つから起る事と為て仕舞つて、し
しやにむに 遮二無二旦那さまを恨みました、又斯ういふ旦那さまを態と見たてゝ私の
か 一生を苦しませて下さるかと思ふと実家の親、まあ親です、夫れは恩のあ
わざ そ
る伯父さまですけれども其人の事も恨めしいと思ひまするし

このように、かつての自分は、いつも悪いのは相手であり自分ではないという考えを持っていたことを、長々と説明しています。いまみてきたような、大袈裟に過去の自分の欠点や過ちを語る事、否定的な自己規定を繰り返すことなどは、普通はしないことでしょう。少々わざとらしくさえ思えるかもしれませんが、こうしてみていくと、「私」の語りは結婚生活への恨み言ばかりではなく、

過去の醜い自分から目をそらさない語りとなっていることがわかります。積極的に自分の醜さを語っていて、これは、単なる反省のレベルをこえています。過去の自分と対峙できる現在の「私」という存在は、もはや恨み言を述べることしかできない存在ではなく、今後その人生を生きていくための力を獲得していると捉えることができます。

じつは、語り手を取り巻く環境は何も変わっていません。語り手の心持ちが変わっただけなのです。次のような箇所もあります。

【引用9】(注・夫は) 現に今でも隠していらつしやる事は 夥^{おびた} だしく有り
ます、夫^それは承知で、たしかに左様^{さう}と知つて居りますけれど今は少しも
恨む事をいたしません

このように、自分の心の持ちようだけで、夫との関係を改善できたということ語っています。「私」は、自分の力で、逃げ出したい結婚生活を、生きていくに値するものへと意識的に転換させました。こうした点を考慮すると、この作品は、子どもの存在から、わが身を改めて考える契機を得た喜びを語るものであることがわかります。それを「子が教えた」といいあrawし、子が「可愛い」といいあrawしているのです。

この作品が、通俗的な「子どもは、いるだけで可愛い」という内容ではなく、また、「子どもがいるから離婚を我慢しよう」という内容でもないことがわかります。

そろそろまとめに入ります。結婚をめぐる若い女性の苦悩は、女性作家の間で大流行した話題でした。文学の世界では同じ話題が繰り返して書かれていったものです。例として、スライドには明治23年(1890)に発表された、みさを「断腸」(『女学雑誌』)を挙げました。これは結婚への恨み言に満ちた内容になっています。大正4年(1915)には、奈々子、これは「ななこ」ではなく「ななし」と読ませるペンネームで、じつは長谷川時雨のことですが、「自伝 薄ずみいろ」(『青鞥』)があります。ここにもまた「断腸」と同じく、結婚にともなう苦し

みが訴えられています。

結婚制度にまつわる恨みや哀しみは変わらず描き続けられてきたものです。その中で、一葉はそれらと同じ題材をとりながらも、『この子』という作品において、恨みの感情にとどまらないものを表現しています。しかも説明的な文ではなく、文学的な表現をとっています。ここに表現されているものは、時代をこえて理解できるものであるといえるでしょう。

はなはだ簡単ではありますが、先入観を排除した作品解釈の面白さが少しでも伝わればと思い、具体例をみてきました。

一葉の作品はいま漫画化されています⁽⁴⁾。現代語訳も出ています⁽⁵⁾。読みやすいか読みにくいかはともかく、鉤括弧によって科白と地の文が分けられています。原文と訳を掲げましょう。

【原文】お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことくと羽目を敲く音のするに、誰れだえ、最う寐て仕舞つたから明日来てお呉れと嘘を言へば(『わかれ道』)

【現代語訳】「お京さん」

窓蓋の外からことことと羽目板を敲く音がする。

「誰？ もう寝たの、だから明日にしてほしい」

これは嘘。(『わかれ道』)

『わかれ道』には英訳もあります⁽⁶⁾。

There was someone outside, tapping at her window.

⁽⁴⁾ 例えば、山田せいこ『たけくらべ』（ホーム社、2010）などがある。

⁽⁵⁾ 例えば、松浦理英子ほか『たけくらべ現代語訳・樋口一葉』（河出書房新社、2004）などがある。

⁽⁶⁾ *Separate Ways*, tr. by Robert Danly, in *The Oxford Book of Japanese Short Stories*, ed. by Theodore W. Goossen, Oxford U.P., 1997

‘Okyo? Are you home?’

‘Who is it? I’m already in bed,’ she lied. ‘Come back in the morning.’

残念ながらタイ語訳の一葉作品は確認できませんでしたが、英語訳は他に『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』などが出ています。それらは一葉を知る入口になると思います。機会があればぜひ読んでみてください。一番大事なのは、実際に読んで自分で考えることだと思います。ご清聴ありがとうございました。

付記 院生交流会の準備と本稿の執筆に際し、チューラーロンコーン大学および大阪大学の大学院生には大変お世話になった。記して謝意をあらわしたい。

感謝場面における謝罪表現の日中対照研究
—ポライトネスの観点から—

Contrastive Study of the Apologetic Expressions on the Occasion of
Gratitude in Japanese and Chinese -From the Perspective of Politeness-

李 華勇

大阪大学大学院 言語文化研究科 言語社会専攻 D3

要 旨

感謝の場面で「すみません」などの謝罪表現が頻繁に使用される言語現象は、日本語における感謝場面の特徴の一つとして、従来の研究で位置づけられてきた。それに対して、中国語における感謝場面では謝罪表現の使用はないと指摘されている。本稿は日中両言語のテレビドラマを研究対象にして、感謝の意を含む発話を抽出し、分類することで、日中両言語の感謝場面での謝罪表現の使用を分析し考察する。結果としては、中国語では、感謝場面において謝罪表現が単独で使用されることがないが、謝罪表現を含む「混在型表現」が見られ、それは日本語と同程度にあった。さらに、ポライトネスの観点からその背後にある文化的な要因を分析すると、「混在型表現」の使用は、自分のポジティブ・フェイスを満たすと同時に相手のネガティブ・フェイスにも配慮する言語行動であることが分かった。
キーワード：謝罪型表現、混在型表現、ネガティブ・フェイス

Abstract

The language phenomenon in which apologetic expressions such as “I am sorry” is frequently used on the occasion of gratitude has been positioned. Conventional research defines apologetic expressions as one of the features of gratitude in Japanese. Contrastively, apologetic expressions are not used on the occasion of gratitude in Chinese. Japanese and Chinese teleplays were used as research objects for this paper. We extracted and classified the

utterance of expressing gratitude, as well as analyzed and conducted research on the use of apologetic expressions on the occasion of gratitude in both languages. The drawn conclusion is that although apologetic expressions are not always independently used on the occasion of gratitude in Chinese, “intermingled expressions”, including apologetic expressions, are seen to be used to the same extent as in Japanese. Furthermore, the background cultural factors are analyzed from the perspective of politeness. The use of “intermingled expressions” is a speech act in which the addresser’s positive face is saved and the addressee’s negative face is taken into consideration.

Keywords: apologetic expressions, intermingled expressions, negative face

はじめに

実生活において、他人に恩恵を施したり、受けたりする行為は頻繁に行われる。恩恵に対する感謝は人と人との関係を円滑にし、または円滑な状態を維持、強化するために行う社会的・儀礼的な言語行動の一つである。他人から何らかの恩恵や好意を受けた際に、適切な言葉で相手に感謝の意を表すのは当然だろう。しかし、異なる言語社会において、それぞれの言語習慣と社会規範が一致しないことが多いため、同じ状況であっても感謝の言語行動を行うか否か、どのような感謝の言葉を用いるかは、それぞれの文化や社会によって異なっている。

本稿ではポライトネスの観点から日中両言語における感謝表現を考察し、相違点の要因を明らかにしたい。

1. 研究の背景と目的

言語行動の研究分野では、ポライトネスが重要なキーワードの一つとなっている。ポライトネスに関する理論について、もっとも注目を集めているのが、Brown&Levinson(1987)が提出しているポライトネス理論である。その理論的概念のひとつであるFTA（フェイスを脅かす行為）は、さまざまな言語行動の

領域の分析において活用されているが、特に相手のフェイスを脅かすリスクが高い言語行動の研究が多い。例えば、不満表明、不同意、依頼などである。

Brown&Levinson(1987)によると、感謝の表明は、話し手が恩を受け入れ、自らのフェイスを低めることで、話し手のネガティブ・フェイスを脅かす行為である。それに対して、謝罪は話し手がすでに行った FTA について悔いを示し、そうすることで部分的に自分自身のフェイスを損ねる。また、ネガティブ・フェイスは、相手に負担をかけまいとするポライトネスを派生させる。しかし、あらゆる言語行動が FTA を生むわけではないが、福田(2013)は、感謝や褒めなどの発話行為においても、それを言うか言わないか、ほめかして言うか、ぞんざいに言うか、これ以上ないほど丁寧と言うかどうか、といったことはやはり聞き手のフェイスに関わってくると指摘している。

また、大谷(2003)は、謝罪・感謝とポライトネスについて、聞き手から「恩恵」を受けるということは、聞き手が話し手のポジティブ・フェイスを満たそうとする行為であり、一方、聞き手に「迷惑」をかけるということは、聞き手のネガティブ・フェイスを脅かす行為であると指摘している。

滝浦(2008)は、日本語の謝罪表現の多様な用法について、謝罪だけでなく、感謝や呼びかけにも用いたりするのは、相手の領域を侵犯せずにすまされたいということに対する詫びであると述べている。「こないだはどうもありがとう。いつも気を使ってもらっちゃって、ほんと申し訳ないね」という発話において、謝罪が感謝の表現として用いられており、この用法がネガティブ・ポライトネスのストラテジーの一つであると指摘している。

本稿の目的は、感謝場面における日中の言語表現の用いられ方、特に「感謝場面での謝罪表現」を考察しながら、ポライトネスの観点から日中両言語の感謝の言語行動における相違点の要因を明らかにすることである。

2. 先行研究と研究課題

従来の研究では、「感謝場面での謝罪表現」が大いに研究されてきた。一方、日本語と他言語との対照研究においても、「感謝場面での謝罪表現」が日本語の

感謝表現の特徴の一つと見なされている。

「感謝場面での謝罪表現」についての先行研究には、佐久間(1983)、金田一(1987)、西原(1994)、熊取谷(1992)、彭(2005)などがある。その中で、佐久間(1983)は、自己の「喜び」の「ありがとう」に対して、「すみません」が相手(他人)に対する「恐縮の念」の表現であると指摘している。金田一(1987)は、相手の不利益と話し手の利益が同時に存在している場合に、「すみません」が感謝として使われると指摘している。一方、「すみません」がすべての感謝場面で使用されるわけではなく、熊取谷(1992)は用例を挙げ、「共感型の発話行為」と「社会的役割に対する行動期待の一部」ではない時、「話し手にとっての快適状況」から「聞き手にとっての不快適状況」に転換する場合に可能であると主張している。

さらに、西原(1994)は、「聞き手至上主義」で「感謝」「陳謝」の並存現象を説明し、聞き手の負を小さくさせるために、感謝の場合の「すみません」が用いられると指摘している。また、彭(2005)は、謝罪表現が相手の不利益に対する事態表明という点でやはり謝罪発話行為の一つとして捉え、謝罪表現と感謝表現が同じコンテキストで発話される場合でも観点はそれぞれ異なると指摘している。

一方、感謝の対照研究において、崔(2000)は、中国語と韓国語では謝罪表現が感謝を表す表現として定着していないため、感謝を表す表現の仕方は違っているが、日中韓とも感謝の気持ちと詫びの気持ちを持っていると指摘している。また、安(2005)は、相手から何らかの恩恵を受けた際、中国の漢族と朝鮮族は日本人より謝罪の言語表現の使用が顕著に低いと指摘した。しかし、中国語において謝罪表現はどのような形式を用いるのか、そしてどのような条件が整った場合に謝罪表現が感謝の場面で用いられるのか、相違点が生じる要因は何かについては言及していない。

以上の先行研究を踏まえ、次のような研究課題を取り上げる。

課題1：日中両言語において、どのような感謝表現が用いられているか、感謝表明の仕方にはどのような特徴があるか、「感謝場面での謝罪」の共通点と相違点は何かを明らかにする。

課題2：ポライトネスの観点から両者の相違点を生み出す文化的な要因は何かを明らかにする。

3. 研究方法とデータ概要

本稿の研究データはテレビドラマの中から、感謝の言語行動に関する表現を採取している。テレビドラマのデータは、シナリオの作者によって書かれたものではあるが、場面の論理性・言葉の選択・人物関係が多数の観衆の理解や行動意識の範疇と一致するように作られている。もちろん、題材によって、人物や物事も変わり得るが、感謝表現の研究に無意識的な話し手の発話が研究データとして利用できる。

データを採取する際、日中両言語のテレビドラマに対して共通の分類法を用いた。データ採取は、出演した人物が何らかの恩恵や好意を受けた際の、聞き手に対する発話表現が対象となっている。感謝の意味と判断できる発話であれば、表現形式自体が感謝表現・謝罪表現であるかは問わない。

謝罪表現に関して、先行研究では主に感謝場面での使用について議論されてきた。本調査はこれらの先行研究に基づき、出現した謝罪表現の前後の文脈を考慮しながら、謝罪場面であるか、感謝場面であるかを確認した上で、有効なデータであるかどうかを識別する。また、対象となる表現そのものだけでなく、感謝表現に関わる周辺部分の会話も採取して文字化し、感謝場面の特徴を分析する。

表1 テレビドラマ資料：

| | 本数 | 時間(分) | 場面数 | データ数 |
|-----|----|-------|-----|------|
| 日本語 | 5 | 2.387 | 166 | 190 |
| 中国語 | 6 | 2.063 | 161 | 182 |

感謝の言語行動における表現を対照しやすくするため、両言語のデータ分類は共通の分類法で行う。収集したデータの分類について、本稿ではまず、「あ

「ありがとう」や「谢谢」などの典型的な感謝表現を「感謝型表現」と呼ぶ。そして、「すみません」、「ごめん」など、典型的な謝罪表現を「謝罪型表現」と呼ぶ。最後に、「感謝型表現」、「謝罪型表現」以外の表現を「その他」のカテゴリーに入れることにする。また、「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他」が組み合わさった表現を「混在型表現」と位置づける。これら「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「混在型表現」、「その他」の分類を通して、日中両言語の感謝の言語行動における表現のバリエーションとその特徴を考察する。

データの分析方法として、まず、「感謝型表現」「謝罪型表現」「混在型表現」「その他」の出現回数を調べ、それが全体の中でどれくらいの割合を占めるかを調べ、表 2 に示す。次は、本稿で主に扱う「謝罪型表現」及び「混在型表現」の中から具体例を挙げ、ポライトネスの観点から分析し考察する。

表 2 各表現の出現回数と割合

| | 日本語 | | | 中国語 | | |
|-----------|---------|-----|-------|-------------|-----|-------|
| 感謝型 表現 | ありがとう類 | 106 | 55.8% | 谢谢 | 76 | 41.8% |
| | 感謝します | 7 | 3.7% | 谢谢你 | 39 | 21.4% |
| | サンキュー | 7 | 3.7% | 谢谢您 | 6 | 3.3% |
| | どうも | 5 | 2.6% | “谢谢”の繰返し | 24 | 13.2% |
| | おおきに | 2 | 1.0% | 谢了 | 3 | 1.6% |
| | | | | 感谢 | 5 | 2.7% |
| | 小計 | 127 | 66.8% | 小計 | 153 | 84.1% |
| 謝罪型 表現 | すみません | 6 | 3.1% | | | |
| | 悪い | 3 | 1.5% | | | |
| | ごめん | 1 | 0.5% | | | |
| | 小計 | 10 | 5.3% | 小計 | 0 | 0.0% |
| 混在型 表現 | 感謝型+その他 | 8 | 4.2% | 感謝型+その他 | 6 | 3.3% |
| | 謝罪型+感謝型 | 2 | 1.0% | 謝罪型+感謝型 | 3 | 1.6% |
| | 謝罪型+その他 | 1 | 0.5% | 感謝型+謝罪型+その他 | 2 | 1.1% |
| | | | | 謝罪型+その他 | 1 | 0.5% |

| | | | | | | |
|-----|-----------|-----|-------|--------|-----|------|
| | 小計 | 11 | 5.8% | 小計 | 12 | 6.6% |
| その他 | ご馳走様 | 9 | 5.8% | 労煩 | 8 | 4.4% |
| | お世話になる | 8 | 4.2% | 多亏 | 3 | 1.6% |
| | お陰で | 7 | 3.7% | 評価・気持ち | 3 | 1.6% |
| | 助かる | 7 | 3.7% | 問責 | 2 | 1.1% |
| | ご苦勞様、お疲れ様 | 5 | 2.6% | 破費 | 1 | 0.5% |
| | 気持ち類 | 5 | 2.6% | | | |
| | 迷惑をかけた | 1 | 0.5% | | | |
| | 小計 | 42 | 22.1% | 小計 | 17 | 9.3% |
| | 合計 | 190 | | 合計 | 182 | |

注：下線の部分は謝罪型を含む表現であり、本稿の主な考察対象である。

表2が示すように、日中両言語のデータの中で、いずれも「感謝型表現」が最も多く、日本語は66.8%、中国語は84.1%を占めている。「謝罪型表現」に関しては、日本語は5.3%であるのに対して、中国語の「謝罪型表現」は皆無である。「混在型表現」はそれぞれ5.8%と6.6%であり、日本語にも中国語にも存在している。「その他」はそれぞれ日本語が22.1%と中国語が9.3%である。

上の集計データから、以下の3点が見てとれる。

- ① 「感謝型表現」について、日本語よりも中国語のほうが使用率は高い。
- ② 「謝罪型表現」が中国語にはない。
- ③ 「その他」については、日本語のほうが使用率は高いが、定型表現の使用も目立つ。

従って、日中における「感謝場面での謝罪表現」について、以下の点が指摘できる。

- | |
|---|
| <p>I 日本語と異なり、中国語では、感謝場面において謝罪型表現が単独で使用されることがない。</p> <p>II 中国語でも日本語と同じく謝罪型表現を含む混在型の表現が同程度見られる。</p> |
|---|

この「感謝場面での謝罪表現」に関する日中の共通点と相違点を分析するために、次節でポライトネス理論の枠組みの下で分析をおこない、相違をもたらす要因を解明していく。

4. 用例分析

上述したⅠとⅡを解明するためにポライトネス理論を援用し、採取したデータを挙げながら考察していく。

謝罪型表現(日本語のみ)

例1 【倒れた女性を助け起こす場面】

杉田：(手を伸ばして) どうぞ。

梶川：すみません。

(『秘密』第2話)

例2 【協力してもらおう場面】

刑事：最近の顧客名簿を見せてもらえるとありがたいんですが

ホテル職員：はい。

刑事：ああ、すみません。

(『白夜行』第1話)

例1の助け起こしてもらった場面と例2の捜査に協力してもらった場面では、謝罪型表現「すみません」が使用されている。このように、何らかの利益を受けた際に、相手の負担に配慮して謝罪することによって感謝を表すことができる。この種の謝罪型表現の使用は、Brown&Levinson(1987)のいうネガティブ・フェイスから派生される「相手に負担をかけまいとするポライトネス」の一種にあたる。この意味で、例1、2のような「謝罪」はネガティブ・ポライトネスの範疇に入れるべきである。

日本語の「謝罪型表現」が全体に占める割合(5.3%)から見ると、「謝罪型

表現」の使用は主要な感謝表現とならない。全体の大半を占める「感謝型表現」(66.8%)に比べれば、やはり使用率が低い。しかし、例 1、2 のように謝罪表現が単独で感謝場面で用いられる例が中国語のデータにはない。その点では謝罪型は日本語の特徴であろう。中国語における感謝場面では、謝罪表現が単独で使用されることがない、といった事実から、中国語では、例 1、2 のようなネガティブ・ポライトネスが使用されないと見られる。

混在型表現

①謝罪型+感謝型

日本語の用例：

例 3 【観光客が藻奈美に写真を撮ってもらうよう頼んだ場面】

藻奈美：撮りますよ。

観光客：あつ、すみません。ありがとうございます。

藻奈美：はい、チーズ！

(『秘密』第6話)

例 4 【柏木先生はものを落とした。学生さんがそれを拾ってくれる場面】

柏木先生：あ、ごめん、ごめん、ありがとう。

(『大切なことはすべてあなたが教えてくれた』第7話)

中国語の用例：

例 5 【清掃員が杜拉拉(人名)に道を譲ってもらう場面】

清掃員：小姐，麻烦你，请让一下好吗？（お姉さん、悪いんですが、ちょっと譲ってくれませんか？）

杜拉拉：好的好的。（はい。）

清掃員：不好意思啊。好了，谢谢啊。（すみません。よし、ありがとう。）

(《杜拉拉升职记》第7話)

例6 【ラーメン店で余味(人名)は毛豆豆(人名)に席を取ってもらおう場面】

余味：那您替我看位子～～，真是不好意思，谢谢啊！（席を取ってくれて～～、本当にすみません。ありがとう）

（《媳妇的美好时代》第1話）

まず、中国語の“不好意思”について言及しておかなければならない。例5と例6の中で、“不好意思”の表現が用いられていた。“不好意思”はもともと「恥ずかしい」と「厚かましく～することはできない」との意味で捉えられてきたが、現在、日常のコミュニケーションで、謝罪表現として“不好意思”の使用が頻繁に行われてきており、謝罪表現の一つとなっている。また、森山(2003)は、“不好意思”という言葉は軽く感謝の気持ちを表すような場合にも使われ、居心地の悪さを言う点は日本語の「すみません」と似ていると指摘している。さらに筆者の内省の限りではあるが、“不好意思”は現在中国で多く使用されていると認識している。これについては、今後実際の使用実態を調査する必要があるが、本稿では“不好意思”が慣用的に謝罪表現として使用されている現状と森山(2003)の指摘を踏まえ、「謝罪型表現」と位置づけ考察を進めることとする。

例3と例5はどちらも相手になにか依頼した際の会話であり、例4と例6は、他人に何かをしてもらった際の発話である。例3と例5のように、自分の目的を達成するために、相手に依頼すれば、自分が利益を受けると同時に、相手に不利益を与えることになる。また、例4と例6のように、依頼ではないが、他人の実際の行動によって自分が利益を受けた。これらの例では、利益の不均衡が生じる。利益の不均衡が生じた際に、この不均衡を補うために、適切な言葉を述べる必要があるとされている。例3～6は、いずれも「謝罪型表現」と「感謝型表現」の組み合わせの形式がとられている。

②感謝型+謝罪型+その他

中国語の用例：

例7 【取引先との相談】

杜拉拉：真的啊，太谢谢你了。真的不好意思啊，给你们添麻烦了。（本当ですか。たいへん感謝いたします。本当にすみません。ご迷惑をおかけしました。）

（《杜拉拉升职记》第5話）

③謝罪型+その他

日本語の用例：

例8 【贈り物の場面】

吉本：藻奈美ちゃん、これおばちゃんが作ったんだけど、食べて。お母さんいないで、大変でしょう。ご飯の支度。

藻奈美：どうもすみません。ご馳走様です。

（『秘密』第2話）

中国語の用例：

例9 【電話を使う際、友達に頼む場面】

建斌：文惠，电话在那儿呢。来。（文惠、電話はそこにあります。どうぞ。）

何文惠：不好意思啊，建斌。给你添麻烦了。没事吧。

（すみません、建斌。ご迷惑をおかけしました。大丈夫でしょうか。）

建斌：没事。（大丈夫です。）

（《家常菜》第1話）

例7～9のように、「感謝型」+「謝罪型」+「その他」/「謝罪型」+「その他」の感謝表現は、「混在型」を形成している。話し手は利益を受けたと同時に、相手に負担をかけたことを考慮し、「その他」の表現を通して感謝の気持ちを補強することができる。基本的には「その他」の表現を使って事実を述べることで、感謝内容に具体性を与えていると考えられる。

感謝の気持ちであろうと、謝罪の気持ちであろうと、「その他」の表現を加えることで、自分の気持ちを補強することができる。先行研究と結びつけて考えると、あくまでも感謝場面における謝罪表現の使用は、日本語の典型的な配慮

言語行動の一つであると言える。さらに、日中両言語における感謝場面の「混在型表現」の配慮言語行動は、日本語母語話者にも中国語母語話者にも、人間関係をよりよく保つための方策として使用されている。

採取したデータから、中国語の「感謝型」と「謝罪型」を含む表現の用例から、中国語においても、感謝の場合に「謝罪型表現」を使用して、相手のネガティブ・フェイスにも配慮することが明らかとなった。この点は日本語の混在型表現と同様である。感謝型表現であれ、謝罪型表現であれ、いずれも他人との関係を調整する機能を果たしている。感謝や謝罪のみでは感謝の意が不足していると感じる場合に「恩恵」をもらう側が「混在型表現」で謝意をいっそう強調するのである。

しかしながら、謝意を強調する戦略として、「混在型表現」を使用している場合、日中では着眼点が異なっている。日本語では、例3、4のように、「謝罪型表現」と「感謝型表現」が同時に用いられる場合で、謝罪がまず重要となり、その次が感謝の表出である。それに対して、中国語でも、例5、7のように、「謝罪型表現」と「感謝型表現」が同時に用いられているが、どちらかを優先させなければならないという意識はあまりない。中国文化と比べ、日本文化のほうがネガティブ・ポライトネスを優先して重要視していると言える。また、日本文化では他人に自分のネガティブ・フェイスを侵害されたくない気持ち強い。それゆえ、他人から恩恵をもらう際に、自然と他人のネガティブ・フェイスに配慮し、「感謝型表現」より「謝罪型表現」の選択をするようになる。当然、中国の文化でも、自分のネガティブ・フェイスを侵害されたくない気持ちも存在するが、日本ほど強くないと思われる。したがって、日本文化はネガティブ・ポライトネス重視の文化、一方、中国文化はポジティブ・ポライトネス重視の文化であると言える。

まとめ

本稿では日中両言語の感謝の言語行動における表現のバリエーション、特に感謝場面で使用される謝罪表現にどのような特徴があるかを考察し、具体例を

通じて日中における感謝の言語行動の特徴を明らかにした。感謝場面で謝罪するという言語行動は、日本語のみでなく、中国語にも存在している。ただし、その場合、謝罪型の単独使用は見られず、「混在型表現」が使用される。この言語現象の要因の一つは、言語の背後にある「相手に負担をかけまいとするポライトネス」を意識する文化である。今回の調査では、人間関係や、謝罪内容の負担度の違いなどの「謝罪型表現」の選択にける重要な要素は、十分に扱えなかった。これは、今後の課題としたい。

また、テレビドラマの台詞を考察する研究方法には、テレビドラマの選択や本数などの要素が研究結果に一定の影響を与えるという「弱点」が予想される。今後の調査ではより多くの台詞を収集し、日中被験者へのインタビュー等も同時に行い、日常生活での用例の採取を取り込んで、自然な会話で使われる特徴も研究していきたい。さらに、言葉は時代と共に変化するものである（例えば、「不好意思」が元々の意味を超え、謝罪表現として広く使用されてきているということ）から通時的な研究も必要であろう。

<参考文献>

- ・安美蘭「日本語、中国語、朝鮮語における感謝表現の対照研究」『日本語教育と異文化理解』4、2005、pp.1-9
- ・大橋純「感謝の下位概念としてのお礼の談話：互酬性、ポライトネスからの一考察」『日本語・日本学研究』1、2011、pp.109-122
- ・小川治子「「すみません」の社会言語学的考察」『言語文化と日本語教育』6、1993、pp.36-46
- ・金田一秀穂「お礼とお詫びのことば」『月刊言語』16（4）、1987、pp.75-83
- ・熊取谷哲夫「日本語の「感謝」における表現交替現象とその社会言語学的モデル」『表現研究』52、1990、pp.36-44
- ・崔信淑「感謝を表す表現と心理に関する日中韓対照研究」『大阪大学言語文化学』9、2000、pp.3-18
- ・滝浦真人『ポライトネス入門』研究社、2008年

- ・谷口龍子「中国語における陳謝/感謝の表現、対象と機能の関わり」『社会科学ジャーナル』61COE 特別号、2007、pp.189-201
- ・中田智子「発話行為としての陳謝と感謝—日英比較」『日本語教育』68、1989、pp.191-203
- ・西原玲子「感謝に関する一考察」『日本語学』13 (7)、1994、pp.4-9
- ・福田一雄「対人関係の言語学—ポライトネスからの眺め」開拓社、2013
- ・彭国躍「現代日語の謝罪発話行為の類型と機能」『日本語学』24 (4)、2005、pp.78-90
- ・三宅和子「感謝の対照研究—日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動」『日本語学』13 (7)、1994、pp.10-18
- ・森山卓郎『コミュニケーション力をみがく—日本語表現の戦略』日本放送出版協会、2003
- ・山本もと子「感謝の謝罪表現「すみません」—「すみません」が感謝と謝罪の両方の意味を持つわけ」『信州大学留学生センター紀要』4、2003、pp.1-13
- ・Leech, Geoffrey N. Principles of Pragmatics, Longman, London, 1983
[池上嘉・河上誓作『語用論』紀伊国屋書店、1987]
- ・Penelope Brown and Stephen C. Levinson (田中典子監訳)『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』研究社、2011

<資料タイトル一覧>

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 日本語：『白夜行』 | (1～11 話、558 分、2006 年放送) |
| 『秘密』 | (1～9 話、441 分、2010 年放送) |
| 『流れ星』 | (1～10 話、475 分、2010 年放送) |
| 『同窓会～ラブアゲイン症候群』 | (1～9 話、438 分、2010 年放送) |
| 『大切なことはすべてあなたが教えてくれた』 | (1～10 話、475 分、2011 年放送) |
| 中国語：《幸福像花儿一样》 | (1 話、45 分、2005 年放送) |
| 《蜗居》 | (1～10 話、450 分、2009 年放送) |

| | |
|-----------|-------------------------|
| 《媳妇的美好时代》 | (1~10 話、400 分、2010 年放送) |
| 《杜拉拉升职记》 | (1~10 話、426 分、2010 年放送) |
| 《奋斗》 | (1~10 話、472 分、2011 年放送) |
| 《家常菜》 | (1~6 話、270 分、2011 年放送) |

比較巡礼研究の視点からみた西国三十三ヶ所巡礼の構造的特徴

Structural Characteristics of Saigoku Pilgrimage from the Standpoint of Comparative Pilgrimage Studies

シギナシ ミハエラ

大阪大学大学院 言語文化研究科 日本語・日本文化専攻 D2

要旨

中国でも古くから天台山や五台山への巡拝が発達し、その伝統は日本にも影響を与え、特に修行の場としての霊山への巡礼を中心に受け継がれていったが、中世以降になると「四国八十八ヶ所遍路」並びに「西国三十三ヶ所観音巡礼」が庶民の間で盛んとなる。前者は、完全な円周型をとり、キリスト教圏等の直線型の巡礼と対比され、早くから国内外の研究者によって着目されてきたが、後者は、例えば長谷寺参りや熊野詣などの直線型の巡礼を取り込み発展したものであり、空間的・地理的構造としては曲線となるため、比較巡礼研究の場では十分な考察が行われてこなかったきらいがある。更に、江戸時代に入ると西国巡礼はツーリズム的な色彩を強め、その様態も複雑になっていく。こういった西国巡礼について、本稿では比較巡礼研究の視点より再度検討を加えることで、その構造的・文化的な特徴の一端を明らかにした。

キーワード：直線型、円周型、結願、巡礼の十徳、ツーリズム

Abstract

From old times worship to the sacred mountains Tiantai and Wutai developed in China, and this tradition was imported to Japan and carried on by mountain ascetics. However, from the medieval period onward, the Shikoku Pilgrimage of the 88 Holy Places (Shikoku Henro) and the Saigoku Pilgrimage of the 33 Holy Locales began to attract large numbers of lay participants. While the former has drawn attention due to its circular form

that stands opposite to the linear form taken by the Christian pilgrimage, the latter has not been fully considered in the field of comparative pilgrimage studies as its spatial and geographical structure takes the form of a curve, that contains linear type of pilgrimages such as the pilgrimage to Hase Temple or to Kumano. Moreover, during the Edo period Saigoku pilgrimage is tainted with strong entertainment features, and its condition becomes complicated. In this study I reconsidered Saigoku pilgrimage from the point of view of comparative pilgrimage studies, aiming to shade light on its structural and cultural characteristics.

Keywords: linear type of pilgrimage, circular type of pilgrimage, making and completing one's worship, ten merits of pilgrimage, tourism

1. 先行研究と問題の所在

巡礼とは、世界各地で行われている「日常的な生活空間を一時的に離れ、宗教の聖地・聖域に参詣し、聖なるものにより近接しようとする宗教行動」⁽¹⁾のことであり、これを、歴史文化的に多様な文脈において相互に比較検討し、その類似性と差異性に着目しながら、巡礼一般の特性を明らかにしようとするのが、比較巡礼研究の立場である。

その中で現れてきた円周型と直線型の巡礼類型論はよく知られており、青木保は、円周型は日本や東南アジアで見られ、特に仏教文化圏に特徴的なものだとし、直線型はヨーロッパや中近東等での代表的な巡礼の型であるとする。また、山折哲雄はキリスト教徒やイスラム教徒にとっての聖地巡礼は世界の中心に向かったの「往復運動」を意味し、一神教にふさわしい行動類型であるのに対して、多神教的な文化風土では、一般には「円運動」をとると主張する⁽²⁾。

また、宗教学者ミルチャ・エリアーデは、巡礼で「円運動」する場合は右回

(1) 星野英紀『巡礼一聖と俗の現象学』1981、p3

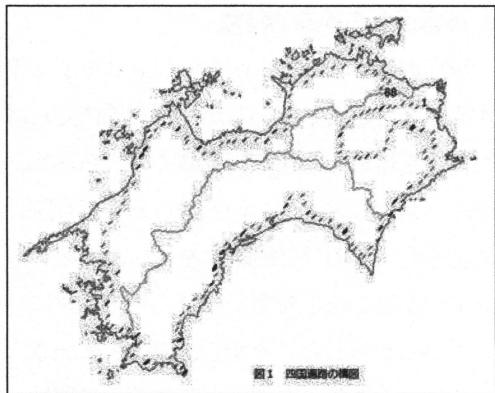
(2) 山折哲雄「巡礼」『平凡社大百科事典』7、1995、p317

りに動く「右繞」に着目し、それは「中心に向かって進む」^③という意味があると言う。〈中心〉にいたる過程に、さまざまな困難があるというモチーフは、世界中の宗教儀礼に頻繁にみられ、右繞や円周もそうしたもののバリエーションであり、それらは「俗から聖への、束の間のもの、幻影的なものから実在への永遠への、死から生への、人から神への」^④通過儀礼的役割を果たしているとするのである。

右繞について付言すれば、これは日本仏教の儀式でもしばしば用いられる礼拝方式であるが、インドにその端を発する。特にヒンドゥー教ではそれは、聖火壇、祭柱、塔などを巡る際の「天体における太陽の運行に準ずるものとして、聖、清浄、吉祥なるもの等に対する儀礼的行為」^⑤であり、これに対して左繞、即ち左回りは「汚れ、忌み、邪悪、病、死、凶なるものと結びつく」^⑥ものとされる。

日本仏教で右繞が端的に現れるのは、「三匝行道」という法界の中で読経しながら本尊を中心に巡る儀礼においてであると言われている。また、僧侶が行なうものだけでなく、一般人も参加する仏教儀礼の中にも右繞や巡りの習俗が見られ、例えば、葬式のあと墓地に埋葬する直前、菩提寺の境内で遺族が棺や遺骨の回りを真言や念仏を唱えながらめぐり歩く儀礼は、いまでも日本各地で行なわれているのである^⑦。

さて、上述の類型論に言及される場合、日本での巡礼の代表例として必ず取り上げられるの



③ ミルチャ・エリアーデ『ヨーガ—②』1975、p41

④ ミルチャ・エリアーデ(1974)『聖なる空間と時間』1974、p77

⑤ 杉本卓洲(1984)『インド仏塔の研究—仏塔崇拝の生成と基盤』1984、p88

⑥ 同上、p88

⑦ 五来重『遊行と巡礼』1989、pp.31-32

が、「四国八十八ヶ所遍路」(以下「四国遍路」)である。これは、起点が終点となる典型的な円周型であり、早くから国内外の研究者によって着目されてきたが、四国という閉じられた環境の中で発展した特殊な巡礼形態であることを忘れてはならない。(図1参照)

一方、中世以降、庶民の間でも広がっていく「西国三十三ヶ所(観音)巡礼」(以下、「西国巡礼」)は、衆生を救済するために三十三種に変化すると言われる観音菩薩が示現する寺院を巡拝するものであるが、例えば長谷寺参りや熊野詣等の直線型の巡礼を取り込み発展したものであり、空間的・地理的構造としては曲線的であり円周とはならない。(図2参照)

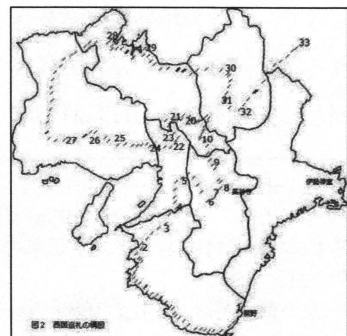
また、江戸時代に入ると西国巡礼はツーリズム的な色彩を強めることで、その様態も複雑になっていく。

こういった西国巡礼について、比較巡礼研究の視点から再度考察を加えることで、その構造的・文化的特徴の一端を明らかにしようとするのが、本稿の目的である。

2. 西国巡礼の構造的特徴

現在の日本では、3カ所から108カ所まで複数の目的地を組み合わせて参詣する巡礼が定着しているが、歴史的に見れば、南都の七大寺巡礼が最も古く、京都の百塔巡礼、比叡山延暦寺の三塔巡礼、更には、京都の清水寺、六波羅蜜寺や六角堂などへの、いわゆる七観音寺院の巡礼がこれに次ぐ。聖地(札所)に番号を付する「札所番付」を行い、「右繞」していくところに特徴があり、その番付にしたがって巡るところから、順礼と表記される場合もある。ただし、それぞれの聖地は距離的に近接しており、たとえば、七観音寺院の巡礼は1日で行われるのが通例であった。

これを畿内に拡大したものが、西国巡礼



である。『法華経』卷第八の觀世音菩薩普門品第二十五（『觀音經』）では、觀音菩薩が三十三身に化身してあらゆる衆生を苦難から救い、人々に無畏（安心）を与える慈悲の菩薩であるとされ、この菩薩が示現する三十三の寺に巡礼することで、その救済を確実なものとしようとするのがその目的である。札所番付がおこなわれてはいるが、江戸時代にそれが定着するまでにはかなり変動があり、また、実際、一番から順に廻られているわけでもない。

11世紀末頃に三井寺の僧行尊は長谷寺から始めて、岡寺、壺坂寺へと南下し、那智山まで行き、再び北上し、三室戸寺で終わっている。12世紀後半の同じ三井寺の僧覚忠の巡拝は『寺門高僧記』（1090年）や『壺囊鈔』（1446年）によれば那智から始めており、途中は大幅に変更されている^⑧。

行尊が長谷寺を起点にするのは、ここが平安初期から靈験をもった觀音靈場として、貴族から崇敬を受けてきたからであるが、平安末期の熊野詣の盛行により、覚忠の巡拝に見られるように、熊野那智山が一番札所になっていくのである。つまり、直線型の巡礼を取り込んでいく形で経路が形成されてくることになる。

そして、『壺囊鈔』には、

此の次第に就いて異説多き。或は長谷を初と為し、或は御室戸を初と為し。

長谷を終と為す或る説に云只便路を本と為す。前後を論ぜずと云云^⑨。（下線部筆者）

とあるように、廻る順番については利便性による変更を認めている。

江戸時代に入り東国の巡礼者が多くなると伊勢参宮後、熊野那智に入るのが最も利便性が高いため、そこを一番にし、最後に谷汲山まで行き、東国への帰路につく経路が確立されていく。また、途中、十三番石山寺から三十二番觀音

^⑧ 『寺門高僧記』（『続群書類従』第28輯上）、pp.72-74、『壺囊鈔』（『日本古典全集』）pp.445-448

^⑨ 『壺囊鈔』（『日本古典全集』）p448

正寺、三十一番長命寺、十四番三井寺と廻る変則的なコースもあらわれてくる。これは 18 世紀後半の明和・安永以降に定着するが、その理由は長谷寺から竹生島に渡る航路に危険性があったからだと言われる⁽¹⁰⁾。

それ以外にも畿内の山城の人々は南廻りとして那智山に向かうが、淀川を下がって大阪に出て、近い所から巡拝することもある⁽¹¹⁾。

したがって、江戸時代に東国の巡礼者が残した道中記などに見られる経路とは別に、実際は、それぞれの出発地により廻り方は様々であったと言える。こういったことが起こるのは、もちろん、経路の長さ起因する。

寛政年間（1789-1801）に版行された案内記『西国巡礼細見記』によれば、西国巡礼の第一番札所から第三十三番までの全行程は二百三十余里（約 1 千 km）であり⁽¹²⁾、修行者は別として、在俗信者が十一か国三十三所を一度の旅で廻りきることは非常に難しく、巡礼者にとっては利便性の高い経路が重要視されるのは当然の結果であったと言えよう。

また、実際の巡礼者の空間認識については、四国遍路を取り上げながら田中博は次のように興味深い指摘をおこなっている。

私はさきに「遍路という終わりのない円運動」と記しました。円という一つの閉じたシステムがあり、円上の一点から出発して四国を一巡し、再び出発点へ戻るといふ巡拝者の動きを鳥瞰すると、そう言えましょう。しかし認識面を考えると必ずしもそう片付けられません。円運動をしているという認識をもった人は一体どれ程いるのでしょうか。遍路道を歩いて一周したときの途中での私の関心は、常に前へ、次の札所はどこかということでした。そして全体としての運動は、円をまわったというより、曲がりくねった道、集約すれば直線を歩いたという感じがしなかったわけではありません⁽¹³⁾。

(10) 佐藤久光『遍路と巡礼の民族』2006、p67

(11) 同上、p.27

(12) 『西国巡禮細見記』国立公文書館蔵（刊本）

典型的な円周構造をもつ四国遍路でさえ、巡礼者にとっての関心事は「次の札所はどこか」というところにあり、点と点をむすぶ直線的な空間認識のほうが強くなるのである。空間的に完全な円周構造をとらない西国巡礼では、その傾向はさらに顕著になるのは当然であり、利便性にしがって一国巡礼や区間巡礼も行われていくことになる。

ただし、だからと言って、西国巡礼は円運動という枠組みの中で捉えられないものであるとはいえない。そこには「結願」という考え方があからである。

3. 西国巡礼の文化的特徴

「結願」は日数を決めて催す法会・立願・修法などを終えることを表し、例えば法会の初日を開白、最終日を「結願」と称する。西国巡礼の場合は三十三カ所すべてを廻りきれば結願成就となるが、観音菩薩が三十三身に変化し、それぞれの場所にあられるなら、三十三カ所の霊場には上下差はなく、すべてが起点であり、かつ帰着点となり、札所番付は目安にしかならなくなる。「結願」は西国巡礼においては空間的ではないが、観念的な円運動を実現させていると言えるのではないだろうか。

さて、こういった「結願」によって在家信者は具体的には何を得られるのであろうか。享保 11 (1726) 年に版行された厚誉春鶯の『西国三十三所観音霊場記』には、以下のような記述がみられる。

西国順礼したる人には、十ヶの徳あり。また詠歌をきくときは、その十分一の利益を蒙ぶるとなれば、常々しんじんあつて、詠歌をとなふべきなり。
一には 火難、水難、横死の難、盜賊の難をのがる。
二には 悪畜どく虫、すべて獣ものにあひ死する事なし。

⁽¹³⁾ 田中博『巡礼地の世界』1983、p83

- 三には 毒薬、無実のなんをまぬがる。
四には 雷電、洛馬の死をせず。
五には 厄難、ねつ病、すべて流行病をうけず。
六には 海川、船に乗って風波の難をまぬがる。
七には 寿命長久、子孫はんじゃうを守り玉ふ。
八には 諸神諸仏、応護し玉ふ。
九には 所願成就せずといふことなし。
十には もろ々の罪障めつして極楽浄土へむかふべしとのお誓いとなり。
右十ケの徳、現当二世のお助けある事、うたがひ玉ふべからず⁽¹⁴⁾。

巡礼は聖地、霊場を廻る宗教的行為であり、西国巡礼は観世音菩薩を祀る寺院を巡拝する本尊巡礼である。当初は僧侶の修行の一形態であり、巡礼の意義、及び巡礼の起源、巡拝する寺院・霊場の由来縁起、本尊の縁起などに関する著述が行われる。いわば「縁起」、「霊場記」などが最も基本的な出版物であった。それに加えて、宣教のため、観世音菩薩の霊験による救済・済度に関する霊験記、功德談も作られていく。さらには、各札所の本尊や霊験談、御詠歌などを解説する著作も出てくる。その代表が厚誉春鶯によって著された『西国三十三所観音霊場記』（全10巻）である。

次に、巡礼を実践するための手引き書が出版され始める。江戸時代には農民層も豊かになり、遠隔地への参詣も盛んになり、特に東国からの西国巡礼者が増加していく。そこで、巡礼者への便宜のために道程や宿泊、旅行心得や注意、必要な医薬品などを記した「道中案内記」、体験した折りの備忘録「道中日記」や紀行文が版行される。その中で多いのは「道中案内記」である。例えば「道中記」「旅すぢめ」や「細見記」「案内」「手引草」「手鑑」などを表題とするものが出回ることになる。

寛政3（1791）年の版行された西川某『西国巡礼細見記』には、

(14) 『西国坂東観音霊場記』 p205

順礼十種の徳

- 一ツニハ三あくどうにまよはず
- 二ツニハリんじう ^{しやうねん}正念なるべし
- 三ツニハ順礼する人の家にハ ^{いへ}佛 ^{ほとけ} ゑうがうあるべし
- 四ツニハ六くはんをんのぼん ^じ字ひたいにすはるべし
- 五ツニハふくちゑんまんなるべし
- 六ツニハ ^{しそん}子孫はんじやうすべし
- 七ツニハ一 ^{いつしやう}生の ^{そう}間僧くようにあたるなり
- 八ツニハふだらく ^{しやう}せかいに生ず
- 九ツニハかならずじやうどにわうじやうす
- 十ツニハ ^{じやうじゆ}しよぐはん成就する也⁽¹⁵⁾

とあり、慶安2(1649)年の中山寺文書『西国縁起』にも、また、安永4(1775)年の『西国順礼手引草』、文政7(1824)年の朝暉房渴子の『秩父坂東西国順礼行程記』にもほとんど同様に巡礼の功德が記されている⁽¹⁶⁾。

上記の二つの「十徳」を比較すると、靈験記に記載されたものは、一から九までは現世での利益であり、最後の十で来世での利益が語られるのに対して、案内記に見られる十徳はほとんどが来世での利益を説く⁽¹⁷⁾。

前者は各寺院の功德談からできており、巡礼の普及にも宣教にも必要な現世利益が中心となる。一方、後者は死という大きな問題を扱っており、救済的な側面を強調する来世主義をとる。つまり、西国巡礼には、現世利益主義と来世主義の「並存」が見られるといえよう。

江戸時代に入ると農民層も経済的に豊かになり、治安の改善や宿泊設置の整

⁽¹⁵⁾ 『西国巡禮細見記』国立公文書館蔵(刊本)

⁽¹⁶⁾ 『西国順礼手引草』(刊本)『秩父坂東西国順礼行程記』(刊本)

⁽¹⁷⁾ 第六は子孫の繁栄を成就するものであるが、この場合も子孫を追善供養を行う主体と捉えれば、来世における利益と間接的に結びつくと考えられよう。

備で遠隔地へ参詣する人々が増加する。特に東国からの伊勢参宮や西国巡礼に出かける人が多くなる。そこには単に宗教的な行為としての社寺への参詣にとどまらず、異国の見聞や旅の楽しみなどの行楽の要素が加わってくる。西国巡礼では京・大阪における祭りや芝居見物が含まれ、これを「中入り」と称していた⁽¹⁸⁾。こうして江戸時代には、ツーリズムと結びついた西国巡礼の現世利益的な性格が前面に出てくるが、先に見た『西国巡礼細見記』の十徳に見られるような来世での救済が忘れられたわけではないのである。

ちなみに、室町時代末期の、天文 11 (1542) 年壬寅 3 月 7 日の日付が入る『西国霊場縁起』では、長谷寺の徳道が養老年中に閻魔庁に行き、閻魔王と讃談あって俱生神から娑婆世界の大日本国に正身の観音三十三所まします彼の観世音に一度結縁の衆生は地獄に落とすべからずと十王は御誓願されて、「一度順礼仕給ふ人を地こくにおとす事あらハ十王共ニ地獄に墮へしとの意趣を書つけて同順礼の縁起道上人に渡し給ふ、其よりいまに至まで津の国中山寺太子の御影堂に被納けり」⁽¹⁹⁾ と記述されている。ここでは極楽往生より、滅罪による地獄の回避が第一とされており、時代による西国巡礼の捉え方の変遷を示す一例と言えよう。

4. 終わりに

ツーリズム的な様相はヨーロッパの巡礼には見られないため、欧米における比較巡礼研究においては、日本の特徴としてその点に焦点が当てられ、両者の差違性が強調される。しかし、西国巡礼は空間的には曲線的であり、観念的な円周型をとるものであり、ツーリズム的世界と並列した形で、来世への救済、あるいは地獄の回避を担保する宗教的な世界が変わらず存在するのである。

⁽¹⁸⁾ 佐藤久光『遍路と巡礼の民族』2006、p27

⁽¹⁹⁾ 浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』1990、p211

<参考文献>

(一次文献)

- ・『西國順禮手引草』安永 4 (1775) 年刊、(関西大学図書館 刊本)
- ・不河辺拾水子『西国順禮細見記』寛政 3 (1792) 年刊、(国立公文書館蔵 刊本)
- ・朝暉房渴子『秩父坂東西國順禮行程記』文政 7 (1824) 年刊、(関西大学図書館 刊本)
- ・金指正三校注『西国坂東観音霊場記』青蛙房、2007
- ・塙保一編「寺門高僧記」『続群書類従』第 28 輯上、続群書類従完成会、1926
- ・日本古典全集刊行会「搯囊鈔」『日本古典全集』、1936 年

(二次文献)

- ・浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版、1990
- ・五来重「巡る宗教」『遊行と巡礼』角川選書、1989
- ・佐藤久光『遍路と巡礼の民族』人文書院、2006
- ・新城常三『新稿社時参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982
- ・杉本卓洲『インド仏塔の研究－仏塔崇拜の生成と基盤』平楽寺書店、1984
- ・田中智彦『聖地を巡る人と道』岩田書院、2004
- ・田中博『巡礼地の世界』古今書院、1983
- ・星野英紀『巡礼－聖と俗の現象学』講談社現代新書、1981
- ・ミルチャ・エリアーデ『ヨーガ―①』『ヨーガ―②』セリカ書房、1975
- ・ミルチャ・エリアーデ『聖なる空間と時間』セリカ書房、1974

気づきにくい形容詞の特性
—形容詞テ形接続に〈理由〉の読みが生まれる要因—

Rarely Recognized Traits of Adjectives:

A factor that causes “cause” in the interpretation of the “-te” form
juncture in Japanese adjectives

武田 素子

大阪大学大学院 言語文化研究科 言語社会専攻 M2

要旨

動詞テ形においては、前件と後件の間の時間的な前後関係を基盤として、〈理由〉という意味が読み取れる。一方、形容詞テ形において、前件と後件は同一主語に対して同時共存する性質であり、時間的な前後関係は読み込めない。本稿では、動詞と形容詞ではテ形接続において〈理由〉関係が読み込めるメカニズムがことなることを明らかにし、前件と後件の間に時間的な前後関係を持たない形容詞テ形に〈理由〉関係が読み込めるメカニズムについて考察を行った。その結果、前件に対象面、後件に判断作用面が卓越する形容詞を置くことによって、「前件のあり方を前提・土台にして、後件の価値判断がなされる」という読みがなされ、〈理由〉という読みが生まれることが明らかとなった。

キーワード：形容詞、テ形接続、語順

Abstract

One potential interpretation of Japanese verbs in the “-te” form is as indicating “cause,” based on the temporal relationship between the antecedent and the consequent. In contrast, in “-te”-form adjectives, the antecedent and the consequent co-exist simultaneously in a given context with a given (identical) subject. That is, there can be no temporal relationship between the two. In this paper, I clarify how “te” verbs and

adjectives employ separate mechanisms that yield causal meanings. Then, I analyze the mechanism that allows a “causal” interpretation of “-te” adjectives, despite the lack of temporal relationship between the antecedent and the consequent. The analysis in this paper elucidates how a causal interpretation occurs, namely, by placing an adjective distinguishing the objective aspect in the antecedent from distinguishing the judgmental aspect in the consequent, which allows an interpretation where “the value of the consequent is determined based on the presupposition in the antecedent.”

Keywords: Adjective, “-te” form juncture, word order

1. はじめに

- (1) 雨が降って、水たまりができた。
- (2) タイ料理は辛くて、おいしい。

(1)は動詞のテ形、(2)は形容詞^①のテ形を用いて前件と後件を接続した文であるが、どちらも前件が後件の〈理由〉を表している文である。両者において、テ形が〈理由〉という表現効果を持つメカニズムについて考えてみたい。

まず、動詞の場合であるが、(1)では「大雨が降ること」と「水たまりができること」との間には時間差があり、前件と後件は別々の二つの時間、異なった時間において生起しているということができる。生成文法ふうには、言え、雨降ると水たまりができるには、それぞれ別々にテンスが与えられており、それに伴い二文にはそれぞれ別々の主語が与えられている、と言える。別の主語、別のテンスを有しているということは、前件と後件の間に時間的前後関係があるというにほかならない。即ち「雨が降った」後に「水たまりができる」ことをいう文となっている。このように、動詞テ形においては、前件と後件の

^①本研究における「形容詞」では、ナ形容詞（いわゆる「形容動詞」）も含む。

間の時間的な前後関係を基盤として、〈理由〉という意味が読み取れるのである。

一方、形容詞の場合を見てみると、(2)の「辛い」と「おいしい」は、共に「タイ料理」という同一主語が有する特徴であり、両者の間に時間的な差は認められない。つまり、「辛い」という性質が生起した後に、「おいしい」という性質が生起したとは絶対に言えず、二つの性質は同じ空間、同じ時間に同時共存していると考えるのが妥当である。即ち、形容詞テ形接続の場合には、テンスは一つしか与えられておらず、もちろん前件と後件の主語も同一主語に限るのである。このように、形容詞テ形接続においては動詞の場合と異なり、前件と後件は同時共存しており、そうであるならば、〈理由〉の読みがなされる根拠を時間的前後関係に求めることは不可能ということになる。つまり、動詞テ形接続も形容詞テ形接続も、結果として〈理由〉の読みが可能な点では共通だが、時間的前後関係を基盤にして〈理由〉の読みが生まれる動詞の場合と同一のメカニズムを形容詞に適用することはできず、形容詞テ形接続においては動詞とは全く異なるメカニズムで〈理由〉の読みが生まれる理由を探らなければならないのである。

2. テ形に関する先行研究

まず、動詞と形容詞におけるテ形に関する先行研究を概観しておく。

2.1 動詞のテ形接続に関する研究

『要解国語・国文法辞典』(1962)によると、「て」は「完了の助動詞「つ」の連用形が、完了の意味を失って、前後を結ぶ接続助詞となったもの」とされており、その意味として「①推移・経過を表す〈順接〉」、「②相反する前後の事柄を接続する〈逆接〉」、「③対等の語句を並べる〈並列〉」、「④原因・理由を表す〈順接〉」の4つが挙げられ、以下の実例が挙げられている。

- ① 春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山 (『万葉集』)
- ② 明け暮れの空に雪の光見えて、おぼつかなし。(『源氏物語』)

- ③ 髪はつややかにて、いと美しげにて、丈ばかりなり。(『堤中納言物語』)
- ④ 身ヨリ煙ノ立ケレバ、女怖クテ物モ不言ザリケレバ、(『今昔物語』)

テ形の先行研究には意味用法に関するものが多く、吉田(2012)は更に細分化した「a.並列」「b.対比」、「c.付帯状況」、「d.先行」、「e.手段」、「f.原因・理由」、「g.逆説」、「h.結果」の8つをテ形の基本的な用法として挙げている。

上記のように、意味用法に関するテ形の研究が多い中で、南(1974)は、テ形節の統語構造に関する代表的な研究であると言える。南は接続助詞の作る従属節の独立度について考察を行い、テ形節に関しては、独立度の低い順にA類「付帯状況」、B類「先行・並列」と「原因・理由」、C類に単なる文の中止を表す「ラベルなしのテ」を挙げている。尾上(1999a)は、南の分類の検討を行い、テ形節に関して以下のようにまとめている。

A類：①情態修飾

B類：②継起・理由

C類：③並列

即ち、A類に関して「形容詞や情態副詞とは違ってそれ自身があり様を語るものではない動詞を用いて情態修飾成分を形成するという特別な場合」であるとし、「これは主文の表す同じ動作を別の面から描写して、それを重ねるという方法採ることになる」述べている。言い換えると、「二つの事態の同時共存」であり、「一つの動作の二様描写として語ることによって、結果的に片方を他方の状態修飾成分としている」のである。この用法においては、「一つの動作」について語られていることから二つの事態の主語は一致していなければならないとされている。

また、川端(1958b)は、テ形で結ばれた二つの事態と時間的な関係について、「①情態修飾」は時間性を考慮することのない並列(非時間的並列)、「②継起・

理由」を時間的な前後であると述べている。

即ち、動詞のテ形用法は、二つの事態が時間性を考慮することのない同一の空間に共存する場合には「情態修飾」として解釈され、二つの事態が時間的に前後関係を成して並んでいる場合には「継起・理由」として解釈されるのである。

2.2 形容詞のテ形接続に関する研究

述定用法における形容詞のテ形接続についての研究は、森田(1994)、小池(2000)などがある。森田(1994)は接続された二つの形容詞に関して、寺村(1982)の形容詞の分類に「評価^②の形容詞」というカテゴリーを新たに加え、形容詞を6つのカテゴリーに分類した上で、二つの形容詞の意味と語順の関連を調査し、形容詞の意味により一定の傾向が認められる場合として、以下の語順の規則を導き出している。

| | A 感情形容詞 | B 感情的性状規定の形容詞 | C 評価の形容詞 | 性状規定の形容詞 | | |
|---|------------|---------------|-------------|------------|-----------|----------|
| | | | | D 何かに対する性状 | E 相対的性状 | F 絶対的性状 |
| 例 | 楽しい 嬉しい | 喜ばしい 辛い | 面白い おいしい | 厳しい 甘い | 長い 危ない | 赤い 丸い |

即ち、二つの形容詞の意味に「主観・客観」、「抽象・具象」の点で差がある場合は、「客観的→主観的」、「具象的→抽象的」の順になるとし、主観的な意味を表すB（感情・感覺的性状規定の形容詞）、C（評価の形容詞）などは後置語になりやすいと指摘している。

また、小池(2000)は、形容詞の語順の一般則について考察し、①「ク活用形容詞＋シク活用形容詞」、②「複雑な構造の表現＋単純な構造の表現」、③

^② 森田(1994)では、「評価の形容詞」の基準として、「発話者のプラスあるいはマイナスの価値判断が文脈の助けなしに、その形容詞だけで表され得る」こととしている。

「原則として心的生起の順序に支配され、文法的支配を受けない」という3つの規則を明らかにしている。

一方で、装定用法における形容詞のテ形接続についての研究には、吉田(2012)や尾谷(2012)がある。その中でも、尾谷(2012)は、装定用法における形容詞のテ形接続の意味構造について、テ形を用いて形容詞をつなげる場合にも、動詞の持つテ形の用法が関係しているとして、形容詞のテ形接続には、大きく「継起」と「共起」の用法があると指摘している。

(3) 甘くておいしい苺 〈継起〉

(4) 小さくて赤い苺 〈共起〉

尾谷は、「2つの形容詞がテ形によって統語的にむすばれているということは、意味的にも両者の間に何らかの関連性がある」として、この関連性の一つががテ形の〈継起〉であり、前項と後項の形容詞が因果関係で結ばれているのだと述べる^③。また、もう一つの用法として〈共起〉があると主張している。この用法では、被修飾名詞が二つの特徴を同時に満たしていることを表現する用法であり、「同じ方向性で解釈できる形容詞を並置することが好ましい」としている。

2.3 動詞テ形の〈理由〉と形容詞テ形の〈理由〉の違い

動詞と形容詞のテ形接続が帯びる意味に関する先行研究を見てきたが、動詞の場合にはテ形を用いて事態を接続する場合に二つの事態が〈非時間的並列〉で並べられているのか、〈時間的並列〉で並べられているのかによって、事態の共存の在り方が〈同時共存〉か〈継起的共存〉に分けられ、前者の場合「情態

^③寺村(1991)の動詞をテ形で連結させた場合には「並んだ順にそのことが生起する(した)意味を伴うのがふつうである」という主張を細分化させたのが仁田(1995)で挙げられている「①様態」「②手段・方法」「③継起」「④起因」「⑤並列」の5つのテ形の用法であるとし、尾谷(2012)は②③④を「継起」、①⑤を「共起」としている。

修飾)、後者の場合「継起・理由」の意味を帯びることが明らかとなっている。

一方で、形容詞ではテ形を用いて接続される二つの事態は常に〈非時間的並列〉で並べられており、事態の共存の在り方は〈同時共存〉に限られる。それにも関わらず、尾谷(2012)で挙げられているように形容詞テ形においても〈共起(小さくて赤い苺)〉と〈継起(甘くておいしい苺)〉の二つの用法が認められている。尾谷が指摘するように「テ形を用いて形容詞をつなげる場合にも、動的動詞の持つテ形の用法が関係している」と考えるのが妥当であり、〈共起〉については動詞テ形においても二つの事態が〈同時共存〉することから成立する用法であるため、時間性を持たない形容詞においても、動詞の議論を持ち込むことに問題はないと思われる。しかしながら、尾谷が「前項と後項の関係が因果関係で結ばれている」とする〈継起〉については、動詞においては二つの事態が〈継起的共存〉をすることで成立する用法であり、動詞と形容詞においてはテ形で結ばれる二つの事態の在り方が異なることが指摘できる。尾谷は動詞の議論を形容詞に持ち込んで、形容詞の〈理由〉を説明するのに〈継起〉という用語を用いているが、〈継起〉とは「時間的に前後の順を追って現れること」であり、あくまでも時間的な概念を基盤にした考えである。形容詞のテ形接続文では、前件と後件の間に時間的な前後関係は認められないため、〈継起〉というキーワードで形容詞テ形接続が〈理由〉を表すメカニズムを説明することは受け入れ難く、形容詞テ形接続において〈理由〉の意味が生まれるメカニズムの再検討を要すると考えられる。

3. 形容詞テ形の〈理由〉のメカニズム

(5) タイ料理は辛くて、おいしい。(=(2))

(5)では、「タイ料理」について「辛い」「おいしい」という性質が並べられている。「辛いこと」と「おいしいこと」は、「タイ料理」という料理、即ち同一対象について述べられた性質であり、二つの性質は同時共存している。それにも関わらず、前件と後件の間には「辛いからおいしい」というように〈理由〉

関係が読み込める。時間的な前後関係を持たない形容詞が、なぜ〈理由〉という意味を表せるのだろうか。

3.1 形容詞テ形接続が〈理由〉の読みを帯びる文の特徴

形容詞のテ形接続⁴⁾がどのような場合に〈理由〉の意味を帯びるのか、まずは前件と後件の間に〈理由〉の意味が読み取れる実例から、このタイプの文に見られる特徴を見てみたい。

(6) 椎名東海林さんのタイカレーが一番辛くておいしい。(『太っ腹対談』
2009年)

(7) 寄り添っている奥さんは小さくて可愛い。(『家庭のジジョー』2003年)

(8) EXILEのsomedayを踊りたいんですけど、速くて難しいです。(Yahoo!
知恵袋 2009年)

上記の文において、前件(辛い、小さい、速い)と後件(おいしい、可愛い、難しい)の形容詞は、各文において同一対象について述べられた性質であり、二つの性質は同時共存していると言える。各文における形容詞の性質に注目してみると、(6)では前件の「辛い」という性質は、唐辛子の数で数えられるものであり、唐辛子の数に比例して辛くなるため、「辛い」と判断する基準を他者と共有することができる概念である。一方で、後件の「おいしい」という性質は、カレーに対する評価として極めて個人的にしか認められず、発話者のカレーに対する見立て、解釈として判断される。(7)(8)も同様に、前件の形容詞「小さい、

⁴⁾橋本・青山(1992)、仁田(1998)、八亀(2008)などで形容詞の述定用法と装定用法における振る舞いの違いについて、①形容詞の種類によって各用法の使用頻度が異なる、②形容詞を用いるテキストタイプによって各用法の使用頻度が異なる、③装定用法の方が述定用法より使用される幅が広いという違いが指摘されている。また、形容詞のテ形接続の中には、述定用法で用いた場合には不自然なテ形接続(??タイ料理はおいしくて辛いです)でも、装定用法で用いた場合には許容度が上がるもの(A: 今晩何食べたい?—B: 何かおいしくて辛い料理食べたいなあ。)もある。上記のような形容詞の述定用法と装定用法における違いを認めた上で、本稿では述定用法のみを研究の対象とする。

速い」は、測ることができるため「小さい、速い」と判断する基準を数値として他者と共有することができる。一方で、後件の形容詞「可愛い、難しい」は、対象のモノに対する評価であり、何を「可愛い、難しい」と捉えるのかは、人によって異なるため、そのように判断する基準を他者と共有することができない。このように、前件にはそのように判断する基準を他者と共有できる形容詞、後件には対象に対する個人的な解釈であり、基準を他者と共有することができない形容詞が置かれた場合に、前件と後件の間に〈理由〉という読みがなされるということが分かる。

3.2 形容詞テ形接続が〈理由〉の意味を帯びるメカニズム

一般に、形容詞には対象面と判断作用面の二面性があり、本質的には二重判断を行うという性質を持つ。「りんごは赤い」という文を例に説明すると、「赤い」という性質は、一面では、リンゴの性質、モノの側に貼りついた性質として捉えられる。これが、形容詞の対象面である。しかし、別の一面から捉えると、リンゴを見て、その色を「赤い」と認識して判断するのはあくまで知覚者である人間である。知覚者が「リンゴ」という対象を見て「赤い」と判断する、これが、形容詞の判断作用の面である。このように全ての形容詞にはこの二面性があり、あらゆる形容詞がこのような二重判断という性質を持つ⁶⁾。とはいえ、対象面と判断の面のどちらの面が卓越するのかは形容詞によって異なる。「色・形」など視覚でとらえられる性質は、すべての人間に共通の認識がなされるという信憑性が高く（いわば共同主観的に捉えられたため）、モノの側に貼り付いている属性として捉えられやすい一方で、目に見えず他者と判断基準を共有しにくい性質は、共同主観的に捉えられにくく、話者の判断・解釈として捉えられやすい。

ここで、「タイ料理は辛くて、おいしい」という冒頭の例文に戻って、考え

⁶⁾川端(1958a)の議論を糸口にして、筆者が展開した考察である。

てみたい。「辛い」というのはモノに貼りついた属性、タイ料理が生まれながらに持っている性質として捉えられやすく、対象面が卓越する形容詞である。一方、「おいしい」というのは、モノに対する見立てであり、人によって何を「おいしい」と判断するのか、価値判断が異なる概念であるため、判断作用面が卓越する形容詞である。即ち、「辛い」と「おいしい」の二つの形容詞を相対的に見て「辛い」ことがモノの属性として、「おいしい」ことが発話者の判断・解釈として捉えられやすく、前件に対象面が卓越する形容詞を、後件に判断作用面が卓越する形容詞を置くことによって、「タイ料理」が持つ「辛い」というあり方を前提・土台として、「おいしい」という価値判断がなされていることを述べる文となる。その結果、「辛いこと」と「おいしいこと」の間には時間的な差は認められないにも関わらず、形容詞テ形接続にも〈理由〉関係が読み込めるのである。

しかし、ここで、「前件のあり方を前提・土台にして、後件の価値判断がなされる」という議論は、時間的前後関係の一種の読み替えに過ぎないのではないかという意見もあろう。しかしながら、「前件のあり方を前提・土台にした価値判断」いう概念はあくまで同時共存的な概念であり、時間的な前後関係では決してないことをあらためて強調しておきたい。形容詞テ形接続は、冒頭で確認した通り、あくまでも同一対象に対する同時共存的な二側面からの形容であり、川端(1956a)で「二重判断」という用語で説明されているものである。同時共存する二側面からの形容と、生じた時間が異なる時間的な前後関係とが異なることは言うまでもない。形容詞のテ形接続構文とは、同一主語に対して同時共存的な二側面を、モノの側の対象面から描写するのが前件であり、判断作用面から描写するのが後件、という関係の構文なのである。

3.3 形容詞テ形接続の語順制約

形容詞テ形接続に〈理由〉の読みがなされるメカニズムを論じてきたが、結果として、前件に対象面、後件に判断作用面が卓越する形容詞を置かなければ

ならないという語順制約があることがわかった。

(9) a. タイ料理は辛くて、おいしい。(=(2)(5))

b. タイ料理はおいしくて、辛い。

即ち、(9)a は「辛い」という対象面が卓越する形容詞が前件に、「おいしい」という判断作用面が卓越する形容詞が後件に置かれているので自然であるが、(9)b はその逆になっているので、安定感を欠くのである。

とはいえ、対象面が卓越するのか、判断作用面が卓越するのかは、あらかじめ形容詞ごとに語彙範疇として決定されているものではない。以下の例を見てみよう。

(10) EXILE の someday を踊りたいんですけど、速くて難しいです。

(Yahoo!知恵袋 2009 年)

(11) ギターを始めたのですが、なかなかコードも難しくて大変です。

(Yahoo!知恵袋 2010 年)

上記の例において、(10)では「速いから難しい」、(11)では「難しいから大変」というように、前件と後件の間には〈理由〉の意味が読み込める。同じ「難しい」という形容詞が、(9)では判断作用面が卓越する形容詞として、(10)では対象面が卓越する形容詞として捉えられているのである。即ち、ある形容詞に関して、対称面が卓越するのか、判断作用面が卓越するのかは、あらかじめ二分してカテゴリー分けされるようなものではなく、実際の表現としてあるモノに対して二つの形容詞がテ形で接続された場合に相対的に捉えられるものなのである。形容詞テ形接続における語順制約とは、二つの形容詞のうち、相対的に対象面が卓越する形容詞を前件に、相対的に判断作用面が卓越する形容詞を後件に置かなければならない、という次元での語順制約というのが妥当であると言える。

4. 解釈コスト

形容詞テ形接続における〈理由〉の意味は「前件のあり方を前提・土台にして、後件の価値判断がなされる」というメカニズムから生まれることが明らかとなった。

(12) タイ料理は辛くて、おいしい。(=(2)(5)(9)a)

(12)においては、「辛い」というタイ料理のあり方を前提・土台として、「おいしい」という価値判断を行っているということであるが、ここで重要なのはこの文において〈理由〉関係を読み込むためには、「辛いこと=おいしいこと」であるという話し手の持つタイ料理に対する価値観を受け入れなければならないということである。そのため、この文の聞き手、特に辛い料理が苦手だという人には(12)に〈理由〉関係を読み込むことは受け入れがたいという人もいるのではないだろうか。

一般に、現に「Nは形容詞+て+形容詞」という発話がなされた以上、聞き手側としては、それを意味ある日本語として解釈する義務が発生する。その際、世界に関する一般的知識（いわゆる「百科事典的知識」）に基づき、前件と後件の間に〈理由〉関係が読み込める文は「解釈コスト」が低く、容易には読み込めない場合は「解釈コスト」が高い場合と言える。具体例に即して説明しよう。

(13) この旅行鞆は黒くて、便利だ。

(14) この旅行鞆は大きくて、便利だ。

我々の、世界に関する一般的知識に基づけば、「黒い」ことが「便利だ」と感じる理由だとは通常考えにくい。よって、(13)では前件と後件の間に〈理由〉関係が読み込みにくく、安定さを欠く。それが(13)の不自然さの要因である。一方、(14)では、「大きい」ことは荷物がたくさん入るなど「便利だ」と感じる

理由が容易に想像されるため、自然な文となる。

このように、現実に発せられた文である以上、聞き手側は、それを意味のある日本語として、発話者が持つ世界観を想像し、解釈する義務を負わなければならないのである。その際に基準となるのが一般的知識であり、一般的知識により容易に想像される場合は「解釈コスト」の低い文、想像が困難な場合には「解釈コスト」の高い文となるのである。

5. おわりに

動詞テ形接続の場合は、前件と後件が時間的前後関係を持つか否かによって、テ形の帯びる意味が異なり、文法的に語順が決められている。一方、形容詞テ形接続の場合は、前件と後件の間に時間的な前後関係はなく、前件と後件の語順は文法的には自由であると言える。そのため、形容詞テ形接続は日本語の教科書において、その主目的は形容詞の「テ形」の形を教えることに置かれているように見受けられる。しかしながら、文法的に語順は自由であっても、常に前件と後件を自由に入れ替えられるわけではなく、不自然な場合も存在する。本稿では、形容詞テ形接続の〈理由〉の読みがなされる場合に注目し、前件と後件の間に時間的な前後関係はないが、「前件のあり方を前提・土台にして、後件の価値判断を行う」という認識において〈理由〉の解釈が生まれ、二つの形容詞のうち、相対的に対象面が卓越する形容詞を前件に、相対的に判断作用面が卓越する形容詞を後件に置かなければならない、という次元での語順制約が存在することを明らかにした。

<参考文献>

- ・尾谷昌則「装定用法における形容詞並置構文に関する一考察—総合的認知と離散的認知の観点から—」『認知言語学論考』10、2012、pp.105-141
- ・尾上圭介「南モデルの内部構造（南モデルの意味を考える）」『言語』28（11）号、1999a、pp.95-102
- ・尾上圭介「南モデルの学史的意義」『言語』28（12）、1999b、pp.78-83

- ・川端善明「形容詞文」『国語国文』27 (12)、1958a、pp.1061-1071
- ・川端善明「接続と修飾-「連用」についての序説」『国語国文』27 巻5号、1958b、pp.297-322
- ・小池清治「形容詞の語順-「安くておいしい店」と「おいしくて安い店」-」『言語』29 (9)、2000、pp.28-34
- ・高橋太郎「動詞からみた形容詞」『言語』27 (3)、1998、pp.36-43
- ・陳志文「形容詞の語順-接続助詞「て」による接続を中心に-」『台灣日語教育學報』16号、2011
- ・寺瀬光男『要解国語・国文法辞典』東京堂、1962
- ・寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版、1982
- ・仁田義雄「日本語文法における形容詞」『月刊言語』27 (3)、1998、pp.26-35
- ・橋本三奈子・青山文啓「形容詞の三つの用法：終止，連体，連用」『計量国語学』18 (5)、1992、pp.201-214
- ・村木新次郎「日本語の形容詞-その機能と範囲-」『国文学 解釈と鑑賞』74 (7)、2009、pp.6-19
- ・南不二男『現代日本語の構造』大修館書店、1974
- ・森田富美子「接続された2形容詞の語順-調査報告-」『東海大学紀要 留学生教育センター』14、1994、pp.31-48
- ・八亀裕美『日本語形容詞の記述的研究～類型論的視点から』明治書院、2008
- ・八亀裕美「形容詞述語文をとらえるために 分析に必要な視点」『国文学 解釈と鑑賞』74 (7)、2009、pp.20-29
- ・吉田妙子『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房、2012

<用例出典>

実例データは『KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言』及び、『NINJAL-LAP for BCCWJ』から抽出した。

日本短期交流に参加したタイ人高校生の異文化認知
—AUC-GS 学習モデルに基づく分類と異文化受容の 5 つのステージ—
A study of intercultural awareness of high school students participating in
a short-term study program in Japan:
an analysis with AUC-GS learning model and acculturation

カウイター・フーンサターポーン
チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科
外国語としての日本語修士課程 修了生

要旨

本研究は、日本短期交流プログラムに参加したタイ人高校生 15 名の帰国後の異文化認知と異文化受容に関する分析と考察である。調査はアンケートにより行った。分析は AUC-GS 学習モデルを用いて、まず異文化認知の段階とタイプを分類し、次に異文化受容について 5 段階で検討した。調査対象者の異文化に対する気づきは、主に日本社会のルールについてであった。こうした違いは、社会や子育てや教育の違いによるものと考えられる傾向が示された。日本滞在中に落ち込んだ原因は、異文化に対する問題ではなく、友達や言語の問題であった。帰国後の本調査対象者の異文化受容は、全体の 80%が「文化を相対的に見る段階」にいることがわかった。

キーワード：異文化認知、異文化受容、日本短期交流、タイ人高校生、AUC-GS 学習モデル

Abstract

This research focuses on intercultural awareness and acculturation of 15 Thai high school students who participated in a short-term Japanese study program in Japan. This study used a questionnaire on their feedback of their stay in Japan, and analyzed data by applying AUC-GS learning model and the concept of 5 stages of acculturation. The result shows that these Thai students tended to have intercultural awareness of following rules and disciplines of the country. They also tended to understand that such awareness is affected by different social and educational background. However, the result shows that during their stay, most of Thai students did not have cross-cultural problems. On the other hand, they had problems with Thai fellow students and the Japanese language. As the result, 80% of Thai students tended to be in the “cultural relative stage” – the 3rd stage of acculturation.

Keywords: intercultural awareness, acculturation, a short-term Japanese exchange program, Thai high school students, AUC-GS learning model

1. はじめに

本研究は、日本短期交流プログラムに参加したタイ人高校生 15 名の帰国後の異文化認知と異文化受容に関する分析と考察である。本稿では、タイ人高校生が、日本短期交流を通して、日本とタイの文化のどのような違いに気づき、理解し、どう問題を対処したのかという〈異文化認知〉について、AUC-GS 学習モデルを用いて分類し、短期交流後の高校生たちの〈異文化受容〉のステージを検討する。異文化受容とは、「異文化をもつ人々が、継続的、直接的に

接触した結果、一方あるいは双方の本来の文化の型に変化が起こる」(原沢 2013:144) という意味である。

筆者が勤務しているチュラーロンコーン大学付属高等学校では、2006 年度より日本短期交流プログラムを始動した。このプログラムの目的は、日本での様々な活動を通じて日本社会・日本文化・日本語を学ぶことにある。すなわち、文化的・社会的能力の育成を視野に入れた体験型の学びである。例えば、2013 年度の短期交流で、本校の生徒たちは、日本とタイの挨拶の違いを学んだ。それは、日本人高校生は挨拶をする時に声を出して挨拶をしていたのに対し、本校の生徒たちは声を出さずに黙って挨拶をしていたため、最初の数日間、日本人の友達が全くできないという体験をしたことであった。

高田(2002)は、常識だという行動の仕方や物の考え方には文化差があることを指摘しており、こうした文化的な背景や社会的な背景の違いが、その国の国民の態度や行動の違いにつながり、異文化交流の際の摩擦や誤解の要因になると述べている。しかし、タイで日本語を勉強しているタイ人高校生には、日本人と接する機会ほとんどない。そのため、前述したような挨拶の仕方の違いが日本人との交流の障害の一因になることに気づくことは、こうした経験でもしない限り難しいというのが現状である。

筆者の勤務校では、日本での生活体験が高校生にとって貴重な学びになるという見地から、短期交流プログラムを行い、今回が7回目である。今回のプログラムの日程は、2013年5月8日から25日まで(17日間)で、参加者は15名であった。しかし、これまで本プログラムで日本短期交流に参加した生徒の異文化体験に関する調査は一度も行われていない。そのため筆者は、日本短期交流に参加した15名のタイ人高校生の目から見た異文化体験を調査することで、今後の指導や交流プログラム改善に役立てたいと考えている。

2. 先行研究

Hofstede (1997) は、「文化」を 2 つに分け定義している。1 つは、狭義の文化で、教育や美術や文学などといった洗練されたものを指す。もう 1 つは、広義の文化で、洗練されたもののみならず、日常的なレベルのものも含まれる。例えば、挨拶、食事、感情の表し方なども文化と捉える。本研究は、日本短期交流における高校生の目からみた日本文化を対象とするため、Hofstede (1997) の 2 つ目の広義の文化、すなわち日常レベルの文化の違いに着目し分析する。

田中・中島 (2006 : 29) は、「異文化との接触では、文化に関する『気づき』・A (awareness)、文化の『理解』・U (understanding)、文化差への『対処』・C (coping) の 3 次元の学習が必要と考えられる」と述べている。本研究では田中・中島 (2006) のこの 3 つの次元を「異文化認知」と捉える。

本稿では先行研究を 3 つ取り上げる。1 つ目は同じ年代の高校生を扱っている小池 (2001)、2 つ目は同じ母語話者のタイ人大学生を扱っている吉川・菊池・山田 (2011)、3 つ目は本研究で用いる異文化学習モデルで分析している奥西・田中 (2010) である。表 1 は、この 3 つの研究の目的・調査方法・結果をまとめたものである。

まず、1 つ目に挙げた小池 (2001) は、5 つの地域 (ドイツ、オーストラリア、中国、韓国、エジプト) に短期派遣された日本人高校生の異文化接触に関する調査を行い、高校生たちは、交通、食事、ローカルの人々の生活、自然に対する気づきが見られたと報告している。また、高校生たちがプログラム中に最も落ち込んだ原因が英語能力であったことも報告している。

吉川・菊池・山田 (2011) は、九州大学との 3 年間の短期交流プログラムでの事例を基に、プログラム前の準備段階・日本滞在時の体験段階・体験の振り返りの段階に関する調査を行い、短期交流参加前の準備活動の有効性を報告

表1 先行研究のまとめ

| 先行研究 (年) | 対象者 (人数) | 目的 | 調査方法 | 結果 |
|----------------------------|--|---|-----------------------------------|---|
| 小池 (2001) | 日本人 高校生 (29人) | 日本人高校生の短期国際 交流における異文化接触 に関する認知調査 | アンケート 自由記述式 | 気づき：交通、食事、ローカル人々の 生活、自然 落ち込んだこと：英語能力 |
| 吉川・ 菊池・ 山田 (2011) | タイ人 大学生 (8人) | 九州大学との3年間の短 期交流プログラムでの事 例を基に行った日本語受 業の実施方法に関する 実践報告 | アンケート 自由記述式 | 準備段階：知識を得る・調べる・ロー ルプレイによる表現練習等により準備 した 体験段階：日常生活・見学・日本人へ のインタビュー等を行い、体験学習は 成功した 振り返りの段階：グループ活動として 発表、個人活動として語彙リスト作 成・日記を実施したが、日記の中に異 文化に関する振り返りはなかった |
| 奥西・田 中 (2010) | 中国人 ホスト学生 (15人) 中国人ホスト ファミリー (6人) | 日本人留学生との交流経 験を持つ中国人を対象と した異文化接触における 認知と対処方法に関する 調査・分析 | インタビュー AUCGS学習 モデルによる 分類 | 中国人ホスト学生・中国人ホストフ ァミリーのどちらも異文化への気づ き・理解があったが、落ち込みに対 する対処の仕方は、中国人の自己視 点を中心にしたものであった |

している。その一方で、体験の振り返りとして行った日記を書く活動では、異文化に対する気づきの記述が全くなく、単に「何々をした」という記述に留まっていたことから、振り返りの活動の検討を課題として挙げている。

奥西・田中(2010)は、中国に留学している日本人留学生に対する中国人ホスト学生と中国人ホストファミリーとの交流をめぐる認知と対処の仕方について調査し、AUC-GS学習モデルによる分析をしている。そして、日本人留学生は中国人ホストに合わせようとする双方向的な調整タイプであるのに対し、中国人ホストは中国人の自己視点を中心に日本人にはあまり合わせない主体的タイプであったという分析結果を示している。また、奥西・田中は落ち込んだことに関する調査も行っているため、本研究では、この奥西・田中(2010)の分析手法を参考にして分析を行うこととする。

次の表 2 が、本研究の分析で用いる AUC-GS 学習モデルである。AUC-GS 学習モデルは、文化を「文化一般」(Culture General)と「文化特定」(Culture Specific)に分けている。「文化一般」はどこの国へ行っても同じように生じるもので、「文化特定」はそれぞれの国によって異なるものである。本研究では、「日本」という特定の文化におけるタイ人高校生の異文化認知を調査目的とするため、「文化特定」レベルを参照し分析する。

表 2 AUC-GS 学習モデルによる学習内容の理解 (田中・中島 2006:93, 田中 2008:125)

| | | レベル | |
|----|---------------------|-----------------------------|--------------------------------------|
| | | Culture General 文化一般 | Culture Specific 文化特定 |
| 段階 | Awareness 気づき | AG 異文化存在への気づき | AS 自文化を含む特定文化の存在や影響への 気づき |
| | Understanding 理解 | UG 異文化接触一般の現象の知識と理解 | US 特定文化における適応・不適応現象や 特定文化自体の理解 |
| | Coping 対処 | CG 異文化接触一般に求められる対応の仕方の原則 | CS 特定文化の文化的特徴に関わる対応の仕 方 |

3. 研究方法

3.1 調査概要

本研究では、調査対象者の属性に近い小池 (2001)、吉川・菊池・山田 (2011) を参考に、アンケート調査を計画した。質問項目は、表 2 に示した AUC-GS 学習モデルの中の Culture Specific (文化特定)、すなわち下記表 3 に示す AUC-S の 3 段階のレベルに基づき作成した。

質問項目は 4 つで、表 3 の AS (気づきの段階) を調べるための質問が 1、US (理解の段階) の質問が 2、CS (対処の段階) の質問が 3 と 4 である。アンケートで使用した言語はタイ語であるが、まず下記の A のような形で日本語で作成し、それをタイ語に訳した B のような形で実施した。なお、誤訳を

避けるため、日本語とタイ語が両方できる複数人による訳のチェックを行った。アンケートは、自由記述式である。

表3 AUC-S 学習モデル (田中・中島 2006:93, 田中 2008:125 より一部抜粋)

| | | レベル |
|----|---------------------|----------------------------------|
| 段階 | Awareness 気づき | AS 自文化を含む特定文化の存在や影響への気づき |
| | Understanding 理解 | US 特定文化における適応・不適応現象や特定文化自体の理解 |
| | Coping 対処 | CS 特定文化の文化的特徴に関わる対応の仕方 |

A. アンケート (日本語)

2013年度の日本短期交流プログラムの調査

名前 _____

1. 日本とタイの文化では違いがあると思いませんか。

2. その違いの理由は何だと思いませんか。

3. 日本滞在中、落ち込んだことはありましたか

4. あった人は、そのときどうしましたか。

調査対象者は、2013年度の日本短期交流プログラムの参加者であるタイ人高校生15名(男子生徒8名、女子生徒7名)で、日本語レベルは初級である。調査は、タイに帰国した1か月後の2013年7月に行った。アンケートの回答は、収集後に日本語に訳し検討した。日本語への翻訳作業は信頼性を高めるため、タイ語が分かる日本人と日本語が分かるタイ人による2重チェックをした。

B. アンケート（調査実施用）

แบบสอบถามโครงการพัฒนาศักยภาพทางภาษาและวัฒนธรรมญี่ปุ่นปีการศึกษา๒๕๕๖

ชื่อ-นามสกุล _____

1.นักศึกษาคิดว่าวัฒนธรรมไทยและวัฒนธรรมญี่ปุ่นมีความต่างกันหรือไม่

2.นักศึกษาคิดว่าความต่างดังกล่าวมีสาเหตุมาจากอะไร

3.ระหว่างที่นักศึกษานั่งอยู่ที่ประเทศญี่ปุ่นนักศึกษามีประสบการณ์หรือไม่ ถ้ามีมีอะไรบ้าง

4.สำหรับนักศึกษที่มีประสบการณ์นักศึกษได้แก้ปัญหาดังกล่าวอย่างไร

3.2 分析方法

アンケートは、前出の表 3 に示した AUC-S（特定文化）の各段階ごとに、図 1 のような手順で分析する。

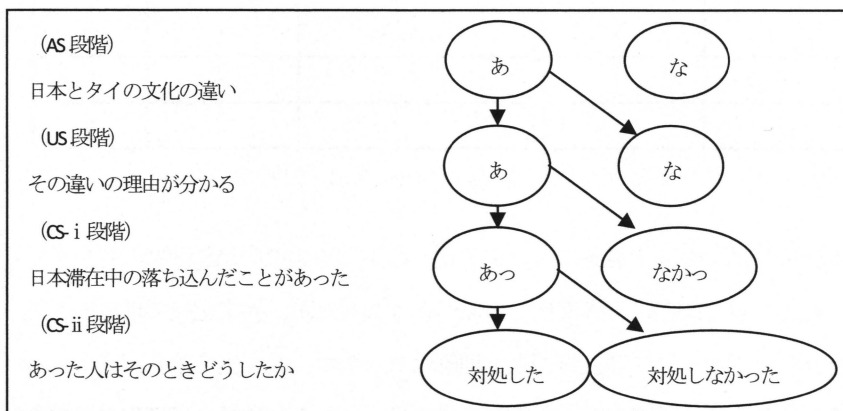


図 1 AUC-S の段階による分析

まず、AS 段階（異文化に対する気づき）の質問として「日本とタイの文化に違い」を尋ねた。この質問に「ない」と回答した場合、気づきがないものと判断し、US 段階へは進まない。一方、「ある」と回答した場合、US 段階の異文化理解の段階にはあると判断し、そして、続く US 段階の回答を検討する。

US 段階（異文化理解）の質問は、「その違いの理由」を尋ねた。「ない」と回答した場合、CS 段階へは進まない。一方、「ある」と回答した場合、CS 段階の異文化に対する問題対処の可能性を考え、続く CS 段階の回答を検討する。

CS 段階の質問は 2 つで、CS-i は「日本滞在中に落ち込んだこと」、CS-ii は CS-i で「落ち込んだことがあったと答えた人にはその時の対処」を尋ねた。以上の手順で調査対象者のアンケートの回答を検討した結果が表 4 である。

表 4 AUC-S 学習モデルにおける本調査対象者異文化認知の段階

| AS 段階 (気づき) | US 段階 (理解) | CS-i 段階 (落ち込んだこと) | CS-ii 段階 (対処) | タイプ |
|----------------|---------------|----------------------|------------------|-----|
| × | × | × | × | I |
| ○ | × | × | × | II |
| ○ | ○ | ×/△ | × | III |
| ○ | ○ | ○ | × | IV |
| ○ | ○ | ○ | ○ | V |

○：あり ×：なし △：異文化以外のことに対する落ち込み

本研究では、表 4 の結果から、異文化への気づきのない AS 段階の者をタイプ I 呼ぶ。以下同様に、異文化への気づきはあったが、異文化への理解と対処がなかった者をタイプ II、気づきと理解はあったが、異文化で落ち込まなかった者と、何も落ち込まなかった者をタイプ III、気づきも理解も異文化での落ち

込みもあったが、対処がなかった者をタイプⅣ、気づき・理解・対処全てがあった者をタイプⅤと呼び、考察する。

原沢 (2013) は、異文化受容には 5 つのステージがあるとし、その 5 つのステージを次のように説明している^①。

1 段階は、「自文化中心段階」で、見えない文化に気づかず、無意識に自文化の価値観で他文化の見える文化を判断する段階である。2 段階は、「違い (見えない文化) に気づく段階」で、自文化は他文化と異なると認めているが、他文化の価値観まではまだ理解できない段階である。3 段階は、「文化を相対的に見る段階」で、他文化の価値観までを理解しており、受け入れることができ、他文化から学ぼうという姿勢がある段階である。4 段階は、「新しい文化を取り入れる段階」で、他文化の価値観を理解し、それを受け入れ、自分のものにしようとしている段階である。5 段階は、「新しいアイデンティティーが確立される段階」で、他文化の価値観を自分のものにし、その価値観を適用することができる段階である。

原沢 (2013) は、このように異文化受容には 5 つの段階があるとし説明している。表 4 に示した本調査対象者のタイプを、この原沢 (2013) の説明にあてはめてみると、タイプⅠは「自文化中心段階」、タイプⅡは「違い (見えない文化) に気づく段階」、タイプⅢは「文化を相対的に見る段階」、タイプⅣは「新しい文化を取り入れる段階」、タイプⅤは「新しいアイデンティティーが確立される段階」に該当すると考えられる。次節でさらに詳しくみていく。

4. 結果と考察

^① 「異文化受容の 5 つのステージ」については、原沢 (2013 : 144-147) による。

本節では、本調査対象であるタイ人高校生 15 名の日本短期交流プログラム参加後の異文化認知と異文化受容に関する分析結果と考察を示す。

4.1 AUC-S 学習モデルに基づく異文化認知

[1] 異文化への気づきは何か(AS 段階)

異文化への気づきに関する回答をまとめた結果が図 2 である。最も多かったのは、「規則を守ること」で 93%、次が「マナーを守ること」、「話し方」、「本気にやること」で 13%、3 番目が「物価の高さ」、「清潔さ」で 7%であった。この結果は、本調査対象者の多くが規則を守ることへの気づきがあったことを示している。

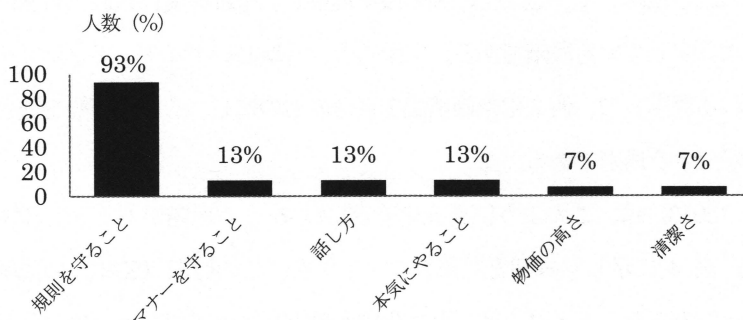


図 2 異文化への気づき

以下が回答例である。

- | | |
|-----|--|
| S7 | ถนนไม่มีรถแต่ไฟข้ามถนนยังไม่สีเขียวยังไม่ข้าม 車が通っていないくても、信号が赤だと渡らずに青になるまで待つ。 |
| S13 | โรงเรียนเงียบกว่าห้องสมุดที่ไทย 日本の学校はタイの図書館より静かだった。 |

[2] 異文化に対しどう理解したか(US 段階)

異文化に対する理解についてまとめたものが図3である。最も多かった回答は、「社会の違い」で60%、続いて「子育て・教育」が53%、「地域の違い」、「料理の違い」がそれぞれ7%であった。この結果から、本調査対象者がタイと日本の違いは社会背景が原因だと理解していることが示唆される。

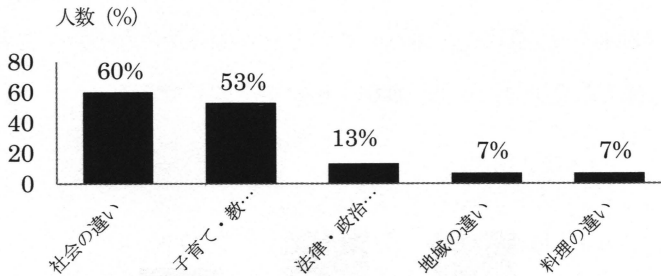


図3 異文化の原因に対する理解

以下が回答例である。S11、S12の回答から、日本滞在中にタイ文化と日本文化の違いの気づき、その違いの原因について自分なりの理解をしていることが窺える。

S11 ทราบว่ากฎหมายไม่แรงพ่อแม่ไม่มีเวลาดูแลลูก

タイでは法律遵守の意識が薄い。両親は子供の面倒をみる時間がないから。

S12 ทราบว่าลักษณะภูมิประเทศญี่ปุ่นเป็นเกาะจำนวนประชากรเยอะและมีภัยธรรมชาติเยอะ

สังคมจึงต้องมีระเบียบมีความสามัคคีและมุ่งมั่นตั้งใจ

日本は島国で人口が多く自然災害も多いということから、日本人はコミュニティー全員で団結して、きちんと規則を守らなければならない。

[3] 異文化の問題に対処したか、またどう対処したか(CS 段階)

CS 段階は、異文化に対する対処の段階である。CS・i では日本滞在中に落ち込んだこと、CS・ii では落ち込んだことがあった人の対処の仕方について尋ねた。図4は「落ち込んだこと」の結果である。調査の結果は、一緒に行った「タイ人の友達」の問題や「言語」の問題が41.5%と高いことがわかった。この結果から、高校生の場合には、異文化に対する落ち込みよりも、友人関係や日本語力の問題の方が落ち込む原因になることが明らかになった。この結果は、先行研究の節で取り上げた小池(2001)の結果と同じである。

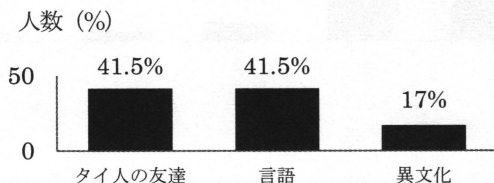


図4 落ち込んだことの原因

CS・i で、異文化に対する落ち込みについて回答した2名の生徒の回答を以下に紹介する。

- | | |
|-----|--|
| S1 | บางครั้งก็ไม่มีเงินกับสังคมที่มีระเบียบ 日本社会はきちんとしているから慣れないことがある。 |
| S10 | บางครั้งก็รู้สึกกลัวจะทำผิดมารยาท マナー違反をしてしまうかもしれないのが怖かった。 |

S1 と S10 については、アンケートの回答についてフォローアップ・インタビューを行った。その結果、両者とも日本での規則とマナーに慣れず、不安だったと答えた。

S10 แก้ปัญหาโดยดูว่าเป็นยังไงคุยกันแบบไหนเธอก็ตัวรับหาคำแต่อาจจะไม่ต้องตีมตัว
 ก็มีตัวคนเราอยู่ถามคนที่รู้ว่าต้องทำอะไรยังมีมรยทขังไป
 แต่จะมทำมรยทขังบอเสียดังโหวกเหวอนแบบที่ไทยไม่ได้
 問題の解決方法は、日本人の友人たちがどのように振る舞っているか、ど
 のように話したりしているかを見て、私たちのすべてを変える必要はない
 けれど、彼らに合わせるようにした。日本の文化・習慣のことなどをよく
 知っている人に、行儀よくするとはどのようなことなのかを聞いた。とに
 かくタイでしているような大きな声を出して騒いだりしてはいけない。

また S10 は、CS-ii の異文化に対する落ち込みにどう対処したかについても回答している。この質問に対する回答は S10 だけであったので紹介する。

以上の結果を踏まえ、本調査対象者 15 名のタイ人高校生の異文化受容のステージについて次に考察する。

4.2 異文化受容の 5 つのステージ

15 名の異文化受容の段階は、図 5 のような結果となった。

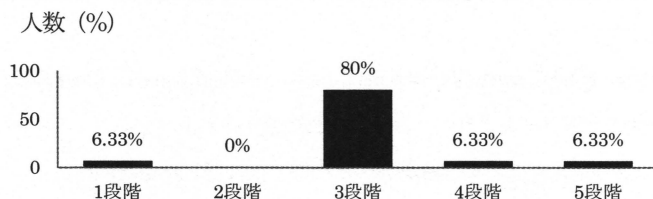


図 5 15 名のタイ人高校生の異文化受容のステージ

最も多かったのは、5 つのステージの中の 3 段階の「文化を相対的に見る段階」で、全体の約 80% であった。その他は、1 段階の「自文化中心段階」、4

段階の「新しい文化を取り入れる段階」、5段階の「新しいアイデンティティが確立される段階」であった。今回の調査では、2段階の「違い（見えない文化）に気づく段階」にいる生徒はいなかった。

本校の生徒の場合には、日本短期交流後に、3段階の「文化を相対的に見る段階」にいる生徒が多いという傾向が明らかになった。

■1段階：「自文化中心段階」

「自文化中心段階」にいる生徒 S3 の回答を事例として紹介する。この生徒は目に見える文化に対する気づき（日本人の外見に対する気づき）はあったが、目に見えない文化に対する気づき（日本人の気配りに対する気づき）はなく、自己中心的な行動を取り、日本側の担当者やプログラムに参加した生徒たち全員に迷惑をかけた。この S3 の場合、日本の見えない文化については全く気づかぬまま、短期交流を終えてしまった。今後、このようなトラブルが起これないようにするためにも、これまでに起きたトラブルや問題をケース・スタディとして取り上げ、どう行動すべきかや、どう解決すべきかなどを考えさせる準備活動が必要であることが示唆される。

S3回答のまとめ

ผู้หญิงญี่ปุ่นน่ารักกว่าผู้หญิงไทยเพราะขี้นตังต่างกัน(กลุ่มใจ)เรื่องของซิดี(เก็บบุญขังใจ)ไม่ยอมทูลถึง

日本人の女性の方がタイ人よりかわいい。それは遺伝子が違うから。

CDのことで落ち込んだ。でも（解決方法については）話したくない。

■2段階：「違い（見えない文化）に気づく段階」

今回の調査では該当者がいなかった。

■3段階：「文化を相対的に見る段階」

本校の生徒達の多くがこの段階にいる。生徒 S5 の回答例を紹介する。

S5回答のまとめ

ค่าแรงการรักษากฎระเบียบคนดีระเบียบการขึ้นลงบันไดเลื่อนอาจจะเป็นเพราะปัจจัยการ

สังคม(การเลี้ยงดูของผู้ใหญ่)รู้สึกขี้เกียจการอยู่กับเพื่อน(คนไทย)แต่ก็เชื่อมั่นว่ามันจะผ่านไปได้

エスカレーターに立つ場所がきまっていることなど道徳・習慣・法律を守ることへの意識が違う。これはきっと子育てが違うからだと思う。落ち込んだことはタイ人の友達と一緒に生活することだったが、この問題は超えられると信じていた。

S5 は、エスカレーターに立つ場所に決まりがあることに気づき、その理由が子育ての違いにあると考えた。しかし、S5 が落ち込んだことは、異文化ではなく、タイ人の友達との問題であった。

高校生の場合、異文化に対する問題よりも友達との問題の方が落ち込む原因となる傾向があることから、今回は準備段階から、参加者間の相互理解を深めるような活動が必要であることが示された。活動例としては、吉川・菊池・山田 (2011) が提案している異文化に対する「準備→体験→振り返り」といった一連の活動を、日本滞在中に行ってみることが一案として挙げられる。しかし、本調査対象者のような高校生の場合には、大学生と同じように「異文化への振り返り」だけではなく、「個人的な問題の振り返り」も同時に行うことが必要であるように思われる。

■4段階：「新しい文化を取り入れる段階」

この段階にいたのは、いつも学校に遅刻してくる生徒 S1 であった。S1 の回答を紹介する。

S1 回答のまとめ

ญี่ปุ่นとタイは文化の違いが大きいから、ルールを守ることが難しい。でも、タイではルールを守ることが当たり前で、日本人はルールを守ることが当たり前ではないから、日本人はルールを守ることが難しい。

日本とタイの違いは、きちんとしていることと、規則を守ることだと思う。それは社会が違うから。きちんとしている社会に慣れないこともあったけれど、何も適応はしなかった。

S1 は、日本滞在中に、規則を守る日本社会はタイ社会と異なると分かり、そのことになかなか慣れず、落ち込みもしたようだが、結局、日本滞在中にその問題に対処することはなかった。しかし、帰国後、S1 の態度には変化があり、日本語の授業に遅刻しなくなった。S1 は、高校卒業後、日本に留学しようと思っていると言っている。

S1 の変化は、日本での異文化体験がプラスに働いた例である。S1 の場合、異文化体験での気づきが滞在中すぐに受容されることはなかったが、帰国後の態度の変化は、たとえ短期であっても、こうした交流プログラムが与える影響力の大きさと有用性を改めて示しているといえる。

■5 段階：「新しいアイデンティティーが確立される段階」

この段階は異文化受容の最終ステージで、S10 だけであった。実は S10 は、日本短期交流プログラムへの参加が 2 回目で、1 回目の参加の時には友達との問題と言語の問題があった。しかし、今回の参加は 2 回目ということもあり、心の準備ができていた。そのため、前回の参加の時に起きた友達や言語の問題をクリアし、今回の参加では異文化の問題に気づき、理解し、対処することができたものと考えられる。S10 に回答について説明を求めると、「日本人に悪いマナーをしてしまうのが怖くて、日本人を観察して、それに合わせる解決方

法を採った」と説明してくれた。S10 は、日本滞在中、日本人に合わせようと頑張った。これは、奥西・田中（2010）の「双方向的な調整タイプ」に該当する。S10 は、1 回目・2 回目の日本短期交流体験を通じて異文化認知が発達し、それが 2 回目の異文化受容につながった例といえる。以下は S10 の回答である。

S10回答のまとめ

คนญี่ปุ่นมีมารยาทมากตรงต่อเวลาเพราะการปลูกฝังมาตั้งแต่เด็กและสังคมรอบข้างต่างกันบางครั้งก็รู้สึก
กลัวจะทำผิดมารยาทแล้วแก้ปัญหาโดยคิดว่าถ้าเป็นยังไม่คุยกันเลยไหนธาก็ปรับตัวให้เข้ากับคนที่รู้ว่า
ต้องทำยังไงไม่มีมารยาทยังไม่แต่จะมารยาทบ้างน้อยเสียงดังโหวกเหวกคนไทยไม่ได้

日本人はとてもマナーを守って時間も守る。それは子供のときから教えられて、社会が違うから。マナー違反をしてしまうかもしれないのが怖かった。問題の解決方法は、日本人の友人たちがどのように振る舞っているか、どのように話したりしているかを見て、私たちのすべてを変える必要はないけれど、彼らに合わせるようにした。それらのこと（日本の文化、習慣のことなど）をよく知っている人に、どのように振る舞わなければいけないか、行儀よくするにはどのようなことなのかを聞いた。とにかくタイでしているような大きな声を出して騒いだりしてはいけない。

5. 終わりに

本稿では、初級レベルの 15 名のタイ人高校生の異文化認知と異文化受容について考察した。日本短期交流に参加した本校の生徒たちが落ち込んだ最大の原因は、日本という異文化に対する問題ではなく、一緒に行った友達の問題や言語の問題であった。タイ人高校生にとって、異文化に対する落ち込みは、日本人との挨拶の仕方の違いから、日本人の友達ができなかったことに始まった。ほとんどの生徒が日本社会のルールやマナーの違いに気づいた。この違いに対する理解は、社会・子育て・教育に起因すると考える傾向がみられた。本調査

対象者 15 名の 80%が、異文化受容の 3 段階目の「文化を相対的に見る段階」にいた。この段階は、他文化の価値観までを理解し、受け入れることはできるが、異文化において生じる問題に対処するところまではいっていない段階である。しかし、高校生の場合には、異文化以外の問題に落ち込むケースが少なくないという結果が得られた。

高校生の短期交流プログラムでは、参加する生徒の心の準備のための話し合いや、参加生徒間の相互理解を深める活動を事前に行う必要がある。次回のプログラムでは、日本滞在中に「異文化に気づいたこと」のテーマで日記を書かせ、振り返るといった活動を試みたいと思う。

今後の課題としては、タイ人高校生向けにどんな活動が異文化認知に効果が出るか、また、帰国後の生徒の変化についても追跡調査を行いたい。さらに、受け入れ側の日本人高校生を対象としたタイ人高校生に対する異文化認知調査も行い、双方向からの見地に基づくタイ人高校生のための異文化教育へと発展させていきたい。

<参考文献>

- ・奥西有理・田中共子「中国人ホストにおける日本人留学生との異文化接触—AUC-GS—学習モデルに基づく異文化への認知と対応の整理—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』30、2010、pp.65-79
- ・小池浩子「短期国際交流における高校生の異文化認知」『信州大学教育部紀要』103、2001、pp.105-111
- ・高田利武「第 3 章 文化と異なる人々の心の世界—自己と他者の関係から—」海保博之・柏崎秀子編『日本語教育のための心理学』新曜社、2002、pp.29-41

- ・ 田中共子・中島美奈子「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の
試み」『異文化教育』24、2006、pp.92-102
- ・ 田中共子「AUC-GS 学習モデルに基づく異文化間教育の試み」『文化共生
学研究』6、2008、pp.125-135
- ・ 原沢伊都夫『異文化理解入門』研究社、2013
- ・ 吉川裕子・菊池富美子・山田明子「体験型短期研修における日本語の授業一
マヒドン大生短期研修を事例として一」『九州大学留学生センター紀要』
19、2011、pp.45-56
- ・ Hofstede,G. *Cultures and organizations: software of the mind*. New York:
McGraw-Hill、1997

武田泰淳の十三妹小説

Taijun Takeda's story of Shisanmei

陳 怡寧

大阪大学大学院 言語文化研究科 言語社会専攻 M2

要旨

武田泰淳は「十三妹」という人物が登場する小説を二つ書いた。それは、長編の『十三妹』と短編の「女賊の哲学」である。書かれたのは「女賊の哲学」の方が先であるが、物語の順番として、「女賊の哲学」は『十三妹』の後日談である。泰淳は『十三妹』を「女賊の哲学」につながるように計画したので、この二つの小説の主人公である十三妹は同一人物だと考えられる。本研究は、泰淳の十三妹小説と明確にされた三つの粉本を比較し、主人公の十三妹の特徴を抽出する。また、それらの特徴を新しい材源にある女侠の特徴と再び比較し、泰淳の十三妹の真のオリジナリティーを見いだす。

キーワード：十三妹、予知能力、非人間性、不幸

Abstract

Taijun Takeda wrote a novel and a short story about Shisanmei, *Shisanmei* and *Jyozoku No Tetsugaku*. Though the creating and publication of *Jyozoku No Tetsugaku* is 17 years earlier than *Shisanmei*, it turns to be the ending of Taijun's Shisanmei story. Taijun borrowed the episodes from three Chinese classic novels while creating the novel *Shisanmei*. Since there is no preceding research doing the basic work of comparison between *Shisanmei* and those three urtexts, I compare those borrowed episodes connected to Shisanmei first and extract the symbolic characteristics of Taijun's Shisanmei. It turns out that Taijun's Shisanmei holds three conspicuous characteristics different from the original, which are her second sight,

impersonality and misery. And the fact is that former two characters are related to Chinese fantasy stories of Tang Dynasty, especially the book *Extensive Records of the Taiping Era* that Taijun had already read before creating his own work of Shisanmei. So, after comparing the two, it becomes clear that the real originality of Taijun's Shisanmei is that she not only has second sight, but takes an active part in making the future happen due to the inability to defy destiny, which, on the other hand, makes her life a misery.

Keyword: Shisanmei, Second sight, Impersonality, Misery

1. はじめに

1.1 『十三妹』と「女賊の哲学」の紹介

武田泰淳は「十三妹」という人物が登場する小説を二つ書いた。『十三妹』と「女賊の哲学」である。書かれたのは「女賊の哲学」の方が先であるが、この二編を紹介するにあたっては、便宜上『十三妹』を先に紹介する。それは、「女賊の哲学」は『十三妹』の後日談であるからである。

『十三妹』（原題：『中国忍者伝』）は1965年7月から12月にかけて「朝日新聞」の夕刊に連載された長編小説である。泰淳自身が「連載の予告」と単行本の「あとがき」で述べたように、この小説は、中国の清末期において書かれた武俠小説の『兒女英雄伝』、『三俠五義』及び風刺小説の『儒林外史』から「古典のエキス」を抽出し、混ぜ合わせた「合成酒」⁽¹⁾である。小説のあらすじは以下の通りである。

中国の貴族である安家の若主人・安公子（安驥）が、第二夫人・何玉鳳（十三妹）を迎えたばかりの頃である。ある夜、第一夫人と第二夫人が話している最中、三人の泥棒が安家に押し入る。そこで、十三妹は家族を起こすことなく泥棒を始末する。彼女は二人を捉え、一人の首を切る。この騒ぎに紛れて錦毛

(1) 郭偉「武田泰淳と胡適—「十三妹」を中心に—」『立命館言語文化研究』16(3)、2005、pp.238-239

鼠こと白玉堂という侠客が忍び込んで金を盗んでいく。このことをきっかけに、第二夫人の十三妹と安老爺（安公子の父）は首について話を語る。

後日、安老爺は河川工事に関する地方官に任命され、任地に赴く。だが、彼は上司の機嫌をうまくとれないため、程なく無実の罪で獄に入れられてしまう。獄を出るためには大金が要するため、息子の安公子は保釈金を持って父を救う旅に出る。途中、安公子は白玉堂が変装した金儒人と出会い、兄弟の盟を誓う。白玉堂と別れ、安公子は陸路から水路へと移る。その後、様々なことに遭遇し、結局召使いの金満少年と離ればなれになってしまう。

一方、十三妹は、包公（満州政権の中心となった漢民族の大臣）が五鼠（白玉堂を含む五人の俠士）のために主催した「腕比べ大会」に行き、包公と会い、白玉堂と戦う。そのころ、窮地に陥っていた安公子は、劇団の俳優になるという誘いを断り、「文海楼」に馬老人という老儒生の代わりに科挙の参考書を編集しにいくのだが、「文海楼」は襄王（満州政権を倒そうとする満州族の謀反人）の「情報館」であるため、包公によって調査されてしまう。安公子は仕方なく幼馴染の柳家に避難する。彼はそこで殺人罪を擦りつけられるが、十三妹の裏調査によって釈放になり、家に帰る。

その後、十三妹は安公子の科挙試験に忍者の術を使い、安公子を第三位の「探花」で合格させる。その後の安公子の祝宴で、十三妹と潜入してきた白玉堂は、馬老人は襄王のスパイであることを知り、二人は胸中を打ち明け合う。そして、白玉堂は襄王を倒しに行くが、十三妹は安家の若い夫人のままている。その夜、安公子は、十三妹が自分の首を切る夢を見る。

この小説の物語は後述する粉本の『儿女英雄伝』の後半部分、即ち十三妹が安家の第二夫人となった結婚後の時点から始まる設定になっている。

「女賊の哲学」は、泰淳初期の1948年に発表され、形としては、『十三妹』の後のエピソードを描いた短編小説である。

この小説の中では、十三妹は母になり、夫の安公子が駐在している辺境の町に移住している。この間に「白蓮教の乱」に巻き込まれ、夫の首を斬って教徒たちに差し出し、町の住民たちの命を救う。その後、彼女は白蓮教主の女とし

て囚われ、この間に自分の赤子を殺し、教主の信頼を得る。そして、ある日の夜、教主（実は教主の影武者なのだが）の首を斬ったのち、行方不明になる。その騒ぎの中で、夫のことで十三妹を憎んでいた第一夫人は十三妹によって救われ、小さな村に逃亡する。二年後の秋、二人の女性は再会し、第一夫人は十三妹の話から、十三妹の予知能力及びその能力がもたらした不幸について知ることになる。

『十三妹』の「あとがき」によると、泰淳は、『兒女英雄伝』の結末にすこぶる不満であった。それゆえ、『兒女英雄伝』の後日談とも言える「女賊の哲学」を書いた。17年後、泰淳は再び十三妹を取り上げて『十三妹』という物語を作った。それは「女賊の哲学」とは別の形で、その「不満」に対する回答を与えるものであった。泰淳はさらに「続編」を構想していたが、それは実現しなかった。

1.2 粉本の紹介

十三妹はもとより『兒女英雄伝』の中心人物であり、泰淳自身も『十三妹』の「あとがき」で、『十三妹』には『兒女英雄伝』、『三俠五義』及び『儒林外史』という三つの粉本があると自ら述べている。

『兒女英雄伝』は清朝の満人の文康によって書かれた小説である。この小説では、「十三妹」と名乗った女侠・何玉鳳は、安公子（安驥）と出会い、彼を悪僧から救ったことが縁で、結局女侠から安家の良妻になる。小説の後半は科挙のことがメインになっている。この小説は『十三妹』の主人公「十三妹」及び「安公子」、「安老爺」等の中心人物、また他の脇役の人物の出典となっており、『十三妹』の最も直接的な粉本と言えよう。

『三俠五義』は清朝の満人の石玉昆（1810～1871 頃）によって書かれた勧善懲悪的な小説である。内容としては、公正無私な裁判をすることで名裁判官として知られた包公を初め、彼を慕って集まってきた展昭、歐陽春等といった侠客たち、及び白玉堂（錦毛鼠）等「五鼠」といった義士たちが、様々な事件で強きを挫き弱きを助ける。物語の舞台は宋朝の 11 世紀初期に設定されてい

る。この小説は『十三妹』の中心人物「白玉堂」、「包公」、「襄王」の出典となっており、また、多くのエピソードが借用されている。

『儒林外史』は元の末期から明の初期にかけての物語であるが、清朝の漢人である呉敬梓(1701~1754)によって書かれた風刺小説である。この小説は写実的な手法で、科挙・官僚制度の枠の中にある人生模様を鋭く生き生きと描き出すことにより、その制度の悪弊を非難する。エピソードの借用のほか、『十三妹』の比較的重要な人物である馬老人の出典となっている。

なお、「女賊の哲学」には、特定の粉本は存在しないようである。

1.3 先行研究及び本研究の目的

新聞連載小説が求める特徴である通俗性、そして、当時平凡社の『中国古典文学全集』を小説の「あとがき」において読者に推薦するといったような「中国長編の雄大と豊富を世に伝える努力」がため、『十三妹』は単なる大衆的な娯楽性を重んじた作品と見なされがちである。ゆえに、同時代においては娯楽性に着目した紹介文の数が圧倒的に多かった。

現代の研究者に目を向けると、郭偉と小嶋知善がそれぞれ、胡適からの影響、小説技法等の新しい角度からテキストを分析している。

郭偉の「武田泰淳と胡適—「十三妹」を中心に—」では、中国古典文学を一般読者に紹介しようとする泰淳はが、「胡適の著作を通して、『十三妹』の原典となる三つの白話小説を、相互に関連を持つものとして、しかも、中国の現代文学と密接な関係を持つものとして認識」し、その点に触発され、『十三妹』を書いたとされる。また、胡適の原典についての考証、論文から、語りの技法、人物像の形成等の方面においてヒント及び刺激を得た、と述べる。

小嶋知善は「武田泰淳『十三妹』論—企図と背景—」の中で、まず、作品が発表された当時の『十三妹』に対する批評界の賛否両論の現状を紹介し、『十三妹』が批判を受けた原因を分析している。そして、作品における話術の特徴を挙げつつ、小説のエンターテインメント性を解釈する。それから、泰淳が初期に書いた短編の「女賊の哲学」とのつながりを物語の構成の面において説明し、

十三妹に付与された特徴から泰淳の「冷徹な人間洞察家の一面」、そして、「善と悪、狂気と正気の境が不分明であること」を見せたと主張する。

泰淳の十三妹小説に関する先行研究はきわめて少ない。目ぼしいものは、上に紹介した二つであるが、いずれも泰淳の十三妹小説のオリジナリティーを解明していない。そのため、本研究は泰淳の『十三妹』及び「女賊の哲学」にある十三妹の人物像を考察し、十三妹が粉本とどのように違う人物として描かれているのか、そして、それがどのような弁別の特徴を持つのかを記述する。また、そういった特徴と唐代伝奇小説中の女侠のイメージとの関連性を考察する。そのことによって、泰淳のオリジナリティーを明らかにしたい。特にその特徴の内在する関連性について解明していきたい。

2. 二人の十三妹

この章では、粉本、即ち『兒女英雄伝』の十三妹と泰淳の十三妹との比較を行う。『十三妹』と「女賊の哲学」は完成時期が異なるものの、主人公の十三妹は連続性の強い同一人物だと考えられる。

ゆえに、この章では、『十三妹』と「女賊の哲学」を一つの物語の前後部分ととらえ、その一つの物語の主人公である十三妹と『兒女英雄伝』の十三妹の特徴を比べることにする。

『兒女英雄伝』の十三妹は、安公子との結婚を一つの分かれ目として、女侠から良妻へ、全く違う性格を持った人になる。魯迅はこれについて、

緣慾使英雄兒女之概，備於一身，遂致性格失常，言動絕異，矯揉之態，觸目皆是矣^②。

(英雄と兒女の気概を一身に備えようとするため、(彼女の)性格がおかしくなり、言動が甚だしく普通の人と異なる。目に触れるのはこのような弄くり回して不自然な姿ばかりだ。)

^② 魯迅『中国小説史略』北新書局、1927、p315

と批評している。この争いの焦点となる部分において、泰淳は魯迅が代表している伝統的な批評から強い影響を受けているといえる。『兒女英雄伝』の十三妹の特徴については、上述したことを合わせ、結婚前後に分けて説明する。

結婚前：父の仇を倒そうと忍者の生活を送りながら、強きを挫き弱きを助ける、武芸に秀でて一女侠客であり、性格が明るく、熱心な人である。

結婚後：第一夫人の張金鳳に説得され、安家の第二夫人になってからは小説の中心からはなれ、夫、義父母に従い、三綱と五常を守る良妻賢母になる。第一夫人と親しみ合い、家をおさめ、夫が功名を得るように彼を励まし、弁が立つ人に見える。

胡曉真も「小説の後の三分の二の部分の重点は動作ではなく、まさに話すことだ（小説後三分之二の重點不再是動作，而是『說話』）」^③、「この礼教を厳しく重んじる小説の中で、婦女たちは話すことにおいて優位に立っている。彼女たちは口達者であり、道德家気どりでまじめくさった顔つきをしている男性たちに対し、女性のロジックで奇襲で勝ちを制する（在這部禮教森嚴的小說中，婦女在言語上史佔了上風的，她們口舌便給，而且往往出奇制勝，用女性的邏輯讓道貌岸然的男性甘拜下風）」^④と同意見である。

以下では『兒女英雄伝』の十三妹との共通点と相違点を分析しつつ、泰淳の十三妹小説の主人公の特徴を挙げる。

まず、泰淳の十三妹は『兒女』にある十三妹と同じく絶世の美人である。ただし、『兒女』の十三妹の外見については詳しく幾度も描写されているが、泰淳の十三妹は「絶世の美人」等のような粗略的かつ大まかな側面描写が多い。

そして、『兒女』の人物関係が単層的であり、中心人物が一人に設定されていないのに対し、泰淳の十三妹小説の世界では、誰もが十三妹を欲している。換

③ 胡曉真「蘋蘩日用與道統倫理——論《兒女英雄傳》」（上）、『新文学』（第二輯）、大象出版社、2003、p246

④ 胡曉真「蘋蘩日用與道統倫理——論《兒女英雄傳》」（下）、『新文学』（第三輯）、大象出版社、2003、p254

言すれば、『児女』の十三妹、とりわけ『児女』での結婚後の十三妹と比べると、より行動的である泰淳の十三妹は、「運送業界の自衛組織」のリーダーであり、結婚してからも忍者として広い世界で活躍している。このような彼女は強力者、権力者の人生の中で肝心な位置を占めている。例えば、「あの女をほしがっているのは、襄王ばかりじゃなかろうよ。包公のリストにも、錦毛鼠とかいう男の名と並んで、彼女の名前も筆頭に書きこまれているそうだからな」(p71) という白玉堂のセリフも明白に示している。しかし、このような十三妹は誰からも所有されず、自由に彼らの周辺で行動しているように見える。また、施の女房の話や船の売春婦のエピソードから分かるのは、「十三妹は不幸・不運の女の守り神のような存在」ということである。それは次の文にも表れている。

「このあたりの住民のあいだでは、まるで魔女か仙人、鬼か精霊、願いごとをかなえてくれる象徴的、神秘的存在として語りつたえられている…」(p75)

彼女は守り神として崇拜されている一方、「象徴的、神秘的存在」として、一般世間との隔たりも暗示されている。

そういった誰にも所有されず、自由に行動していること、及び、それに伴った隔たりは、泰淳の十三妹にあるもう一つ重要な設定、即ち予知能力と関係がある。第一夫人の張金鳳が「おねえさまは、あの方の胸のうちはもとより、これから先の運命だって知りつくしているらしいわよ」(p143) と言っているように、彼女は常に周りの人より、より広い世界に生きている。また、人々とは違い、未来を含めたより広い時間幅で世界の出来事を察知している。十三妹が安家の第二夫人になった後も、「…ひとりだけ家内のにぎやかさからはなれ、食卓に向ったまま、別の世界に沈みこんだようにして、他人にはわからぬ思案にふけていることがある…」(p43) と記されているように、十三妹は「他人にはわからない」人として描かれている。また、上の引用の次の場面で、安老爺から自分の息子のために少し身だしなみに注意してほしいと言われても、「第二夫人はまだぼんやりした顔つきで、千里もはなれた針のおちる音に耳をすま

し、雲や霞、山や河でへだてられたどこか彼方を見つめているようであった。」
(p43)と書かれており、そのためか、周りの人との距離感を感じさせる、口数の少ない、冷静な人に見える。まさに「彼女が興奮したり取り乱したりしたのを、家族の者は一回も見たことがなかった」(p5)のである。

こういった予知能力に伴い、彼女の行動にも、何も考えないような虚無感が漂っている。泰淳の十三妹、とりわけ『十三妹』の主人公である十三妹は、『児女』の十三妹と同じく夫の出世に助力している。しかし、『児女』の十三妹は、彼を愛している良妻として自覚しているのに対し、『十三妹』の十三妹による夫への支えは、まさに包公が以下で分析しているように、夫への保護、愛情からの行動だとは言えないのである。

「...わしはあんたが、あんたの義父と夫に忠誠をささげた女性とは思わないよ。いやいや、あなたは決してそのような単純な烈婦、貞女であるはずがないのじゃ。そのような平凡な『女』や『妻』や『母』であり得るには、あんたは何かしら異常な余力にめぐまれすぎているんじゃ。...」(p107)

『児女』の結婚前の十三妹と比べてみると、二人とも同じく平気で人を殺したりするように見えるが、『児女』の十三妹は弱きを助けるため、悪人を殺すという正気の動きである。それに対し、『十三妹』での十三妹の行動は、まさしく彼女が小説の冒頭部分で本能寺の殺人事件(もとより『児女』にある十三妹の結婚前の話。泰淳の十三妹小説の前提として取り扱われている)について第一夫人に打ち明けている通り、やらざるを得ない仕事である。十三妹は、このように打ち明ける。

あなた方を救いたいから、救いました。そのために多くの男たちを殺しました。それはその通りだけれど、あれは実にちっぽけな、つまらない仕事なのよ。
(p6)

「人の首を切らざるを得ない」ということは、泰淳の十三妹にとって、「人切り
気ちがい」(p139)ではなく、定められている宿命だということが推測できる。

さらに、「人の首を切らざるをえない」ということから、双方の十三妹の殺害
方法の設定に着目すると、どちらも同じく残忍、痛快かつ躊躇のないやり方
はあるが、一つ大きな相違点が目立つ。『児女』の結婚前の女侠である十三妹は、
悪人を殺すという目的を達成するためには手段問わず、彼らの体のあらゆる部
分、とりわけ致命的なところを狙っている。それに対し、泰淳の十三妹は何故
か悪人の首だけを切るという設定となっており、この設定は、安公子が旅でた
またまであった漕ぎ手まで「男の首を切るなあ、十三妹さんの方だあな」(p79)
と知っているような彼女の特徴だとも言える。

その上、もう一つ指摘すべき著しい相違点は、泰淳の十三妹は「女賊の哲学」
の中の最後で、夫の首を切り、赤子を殺害し、そもそも幸福なままで続いてい
けたはずの家庭を自分の手で壊していくことである。それは、『児女』の、女侠
が良妻賢母になることで終わる円満な終わり方とは正反対である。

頼秀真が「文康『児女英雄伝』新探」という論文で『児女』にある十三妹が
女侠から人妻になる過程においての変化について「法律で禁じられることを武
力で犯す人から、「礼」と「法」に従う人へ、また、禁欲かつ無情な人から情の
深い人へとようになっていく」とまとめている。そして、十三妹の侠女としての武芸
について、神秘的な幻術よりも家に引き継がれてきた技術を用いていると指摘
している⁵⁾。また、『児女』にある十三妹の女侠としての無情さについて、頼秀
真は安老爺の

切莫把他平日的那番侠烈，認作他的得意。他那條腸子是涼透了，那片心是橫絕
了，也只為他父母這兩樁大事未完，弄成這等一個遊戲三昧的樣子。(p253)

(平日に現れている女侠ならではの非道さを、彼女が自慢していると思っ

⁵⁾ 頼秀真「文康『児女英雄伝』新探」(修士論文、台湾国立嘉義大学、中国文学研究所、
1996)

ならない。彼女の心が冷めており、残忍になったのは両親に関する二つの大事
(稿者注：父が自分の結婚問題で権勢のある悪人に冤罪で陥れられ、獄で死ぬ
ことと、母が父のことでやむをえず隠居することになり、間もなく死ぬこと。)
がまだ済まされていないからであり、この遊戯三昧のように見えるのである。)

という説明を引用しながら、『兒女』の十三妹の残忍さは、理由のある、一時
的且つ表面的なものであり、彼女は実は情の深い人だと分析している⁶⁾。おお
むね賛同できる主張だ。

つまるところ、『兒女』は無情且つ残忍な女侠のイメージを持っている十三妹
を女性化、賢妻化、そして人間化しているのに比べ、泰淳の十三妹には非人間
性という特徴がきわめて目立つのである。前述したことを考え合わせると、泰
淳は、意識的に彼の十三妹に「予知能力」を付与した。その「予知能力」が、
十三妹に、世間ひいては最も親しい家族に対しての隔たり、あるいは「距離感」、
「冷静さ」といったことをもたらしている。そのことと、十三妹の心理に入り
込まない外側からの描写が、十三妹を神秘的な人物にし、彼女の非人間性を強
く感じさせるのである。彼女のそのような特徴に対して、

あのような方を愛することは、誰だってできはしないのだ。あのような方を幸
福にしてあげることが、誰にもできはしないのだ。わたしまでが、このわたし
までが、お姉さまを信じ、お姉さまを愛しつづけることができなかつたのだから。
〔「女賊の哲学」 p149〕

と第一夫人の張金鳳までがこのように嘆くほど、人間味のない人物像が描き
出されている。

予知能力によって非人間性を周りひいては世間の人々に感じさせる一方、予
知能力と非人間性との両方の働きで、十三妹の行動には迷いはない。しかし、

⁶⁾ 頼秀真、前掲論文、p98

彼女は、喜んで自分の宿命を受け入れているわけでもない。例えば、彼女が夫の運命について語る時は、

「...あの方は探花にならなければならないんですから」...十三妹は憂うつそうに口をつぐんでいる。(p155)

喜ぶべきことを語っているものの、暗い先が見えてしまう彼女は喜びも悲しみも感じる事ができず、しばしば憂うつになり、

「私は、平凡な女です」「そうなりたがっているだけさ。...」「...私を特別の女、女以外の女と考えないでちょうだい」(p169)

と願う。第一夫人の張金鳳も最終的に、

いつもと全く異った心できく想いであった。「もしかしたら、あのひとは不幸なかもしれない。わたしたち弱いもの、無智なものより、倍も十倍も不幸なかもしれない」と...ひそかに想いつづけた。「お姉さまは、もしかしたら、あのようなことをするより仕方なかったのかもしれない。何故とって、お姉さまには、あまりにも先のことが、何から何までわかりすぎてしまうのだから。
（「女賊の哲学」 p149）

と誰よりも強く、恵まれているように見える彼女の不幸を悟る。

そのように、泰淳は自分の十三妹に他の人の持たない、優れた予知能力を付与し、その予知能力を通して彼女と世間との隔たりを築き、非人間性を感じさせる。また、予知能力を持っており、先が見えてしまうからこそ、彼女は楽しむこと・悲しむことが出来ず、何も感じることのできない虚無感が漂っている不幸な人物となる。さらに、非人間性の特徴を持っているため、十三妹は「人間」から愛情、理解等を得られず、より不幸な人物となってしまう。

以上のように、『児女』と比較することによって、泰淳が作った十三妹という人物像には「先のことが見えてしまうという一般人の持てない予知能力」、「残忍さ、世間離れ及び冷静さがもたらした非人間性」、「他人から理解されない、愛されないという不幸」といった、『児女』の十三妹と著しく異なった三つの特徴が付与されていることが明確になるのである。

3. 特徴の由来

3.1 唐代伝奇小説・『太平広記』との関連性

泰淳の十三妹の人物像を考える上で、唐代伝奇小説に注目する必要がある。十三妹の特徴のいくつかは、唐代伝奇小説に登場する女侠たちの人物像に由来する可能性がある。泰淳は昭和29年2月に三省堂発行の教科書『高等漢文(二)』のために「唐代伝奇小説の技術」というエッセイを書き下ろした。そういったエッセイを書いた泰淳は、唐代伝奇小説を既に読んでいたことが推測できる。しかし、唐代伝奇小説を収録した書物には様々なものがあり、たとえば、汪辟疆の『唐代小説』、李昉^{りほう}の『太平広記』等がある。その中で、泰淳と最も関係するのは『太平広記』であり、それは、『太平広記』を分析し、称賛している魯迅の『中国小説史略』からの影響だと考えられる。

「唐代伝奇小説の技術」の冒頭部分は、『中国小説史略』と類似している。

かれら（稿者注：伝記作家たち）のおおくは、したたかな官吏生活の経験を持ち、スタンダードが外交官生活で発見した、人間の醜悪と愚劣も、よく承知していた⁽⁷⁾。

これは、魯迅が『中国小説史略』で幾度も繰り返して伝えている、「小説は稗官が民間から集めてきた雑談を素材とし、それに基づいて作られたものだ」⁽⁸⁾という説明と一致している。また、泰淳はその後、唐代伝奇小説の特徴につい

(7) 武田泰淳「唐代伝奇小説の技術」『武田泰淳全集』（第12巻）、1979、p325

(8) 魯迅『中国小説史略』北新書局、1927、p3とp9

て次のように述べている。

唐代にあつては、爛熟した詩から新鮮な散文へと、微妙な移行が起こりつつあった。伝奇の文体は、古代の散文とは異なり、いちおう詩の洗礼を受け、その柔軟多彩な象徴性を身につけながら、韻文のわくから脱出しようとするなまめかしい身もだえをしている⁹⁾。

この引用も、魯迅の同書にある「唐之伝奇文」という章の「小説も詩の如し」、「六朝の粗い描写と比べ、より文辞華艶」¹⁰⁾等といった冒頭部分とほぼ同じ内容である。その上、「唐代伝奇小説の技術」に紹介されている「南柯夢」、「邯鄲夢」は「唐之伝奇文」の中でも重点として挙げられ、紹介されている。

1928年、16才の時から魯迅を読みあさってきた泰淳は魯迅の最も重要な著作の『中国小説史略』を読み落とすわけがなく、むしろ、大きな影響を受けており、その本の最も肝心な資料である、宋までの伝奇小説を集大成した『太平広記』を読んだに違いない。また、『中国小説史略』の中で、魯迅は女侠の鼻祖である聶隱娘に言及しているところで、明時代に書かれた『剣侠伝』にも触れている。『剣侠伝』は『太平広記』の「豪侠」に基づいて書かれており、その中には、夫を殺した解洵の妻の物語が入っている。この『剣侠伝』も泰淳にヒントを与えた可能性がある。

井波律子は『破壊の女神——中国史の女たち』の中で泰淳の十三妹及び『兒女』の十三妹との違いについて次のように述べている。

武田泰淳えがくところの『十三妹』は、この初発の十三妹のイメージ（純化された報復精神、攻撃精神の結晶である侠女のイメージ）をみごとに生かし、結婚後も彼女は鮮烈な侠女であり続けたとする。唐代伝奇の聶隱娘^{じょういんじょう}や明代話本小説の十一娘^{シーイーニャン}など、古典短編小説のなかであれほど先鋭だった侠女のイメー

⁹⁾ 武田泰淳「唐代伝奇小説の技術」『武田泰淳全集』（第12巻）、1979、p325

¹⁰⁾ 魯迅、前掲書、p69

ジを、清代の古典長編小説は中途半端にしかあつかえなかった。武田泰淳の『十三妹』は、こうした事態に対する痛恨の思いから書かれたようにも思われる。しかしながら、ひるがえって考えてみれば、『三国志演義』にせよ『水滸伝』にせよ『金瓶梅』にせよ『紅樓夢』にせよ、中国の古典長編小説は、大勢の登場人物相互の関係性を描くことに、主眼を置くのがつねだ。だから、俗世界の関係性を切断した単独行動者たる侠女は、もともと長編小説のテーマとなりにくい素材だったともいえよう。このためもあって、長編小説『兒女英雄伝』の作者は、十三妹をわざわざ陳腐な人間関係のなかに連れもどし、せつかくの侠女のシャープなイメージを台なしにしてしまった。ちなみに、武田泰淳の『十三妹』は、聶隱娘と戦った精精児や空空児を彷彿とさせる、ライバル白玉堂を配して十三妹と葛藤させることにより、物語をダイナミックに展開させている⁽¹¹⁾。

泰淳が物語をダイナミックに展開させるためにライバルである白玉堂を配して葛藤させたかどうかは議論の余地があるが、ここで井波は、泰淳の十三妹像と、唐代伝奇の聶隱娘をはじめとする中国古典小説の侠女のイメージとの間に関連性があることを明らかに指摘している。では、泰淳の十三妹はどのように『太平広記』と関連しているのか。

『太平広記』⁽¹²⁾は、唐代伝奇小説を最も多く収録している書である。『太平広記』では「豪侠」というカテゴリーの下に、性別を問わず、聶隱娘を含めた侠客について 25 個の物語が語られている。その中の女侠は、物語順に従って、車中女子、崔慎思の妾、聶隱娘、紅線、潘將軍にある王超の義理姪、賈人妻、

(11) 井波律子『破壊の女神——中国史の女たち』新書館、1996、pp.146-147

(12) 『太平広記』は中国、漢から宋（そう）初までの小説類を集めた書である。北宋の李昉ら 12 人が撰集したものである。規模は広大で目録が 10 巻もある。漢代より宋初にいたる筆記小説、稗史など 475 種を引用しており、宋以前の小説の発展過程をうかがうことのできるごくまれな資料であり、魯迅は「われわれのために古小説を保存してくれた林藪である」と述べている。（『世界文学大事典 2』集英社、1997、p826 を参照した。）

荆十三娘の七人である。彼女たちはそれぞれ人妻、芸者、召使い等のような表の身分に隠れて、裏世界で秘密裏に行動しているのである。また、彼女たちは当時の社会規範と異なった行動基準に従い、予知能力を含め、普通の人であればそれを持って余すような能力の持ち主である。

井波は報復・攻撃精神、単独行動の面についての関連性に着目している。だがしかし、井波の指摘した報復・攻撃精神、単独行動という側面は、十三妹がどのような理由でそれらを得た人物であるか、という点に着目していない、という点で表面的である。確かに、第二章で分析したような、泰淳の十三妹が備えている、残酷さ、距離感等は、井波の示した報復・攻撃、単独行動という特徴と類似しており、それら表面的特徴は、唐代伝奇小説の女侠のイメージに共通するものである。しかし、それを生み出すのは、「予知能力」や「非人間性」という十三妹の特徴であるのだから、むしろ、泰淳が唐代伝奇小説、すなわち『太平広記』からヒントを得たものは、これら報復・攻撃精神や単独行動という表面的特徴の原因となる「非人間性」「予知能力」という特徴ではないかといえるのである。以下、その事を詳しく論じる。

まずは、「非人間性」に帰着する泰淳の十三妹の残忍さと無情のイメージにおいての関連性について分析する。『太平広記』の中で、崔慎思の妾と賈人妻は自分の赤子を殺してしまう。これは、当時の社会規範では許されない行動だろう。また、聶隱娘は対象人物を暗殺する途中、その人が子供を可愛がっているのを見て迷いが生じ、計画よりかなり時間がかかってしまう。そのことで、彼女は師匠に叱られ、これから優柔不断にさせる妨げもの（子供等）を先に始末するように言われる。

そういった、目標を達成するために邪魔するものを見境なく取り除いていくという行動基準は、明らかに泰淳の十三妹に引き継がれている。彼女は「女賊の哲学」の中で夫の首を断ち切り、町の住民を救う。また、自らの赤子を殺し、暗殺対象であった白蓮教主の信頼を得ているのである。泰淳は「女賊の哲学」と同時期に発表したエッセイの「淫女と豪傑」にも、殺すということについて「凡人にはおよびがたい徹底した、ほかから動かさせない絶対性をおびている性

格行動」⁽¹³⁾と述べている。

龔鵬程は著書（原題：『俠之精神文化史論』）の中で、「首を断ち切る（断人首級）」を一つの大きな唐代侠客の行動上の特徴として挙げており、それはまさに秦淳の十三妹の代表的な残忍な殺し方として用いられている。

また、龔鵬程は、世間離れ、単独行動等「非人間性」の神秘的な一面が、唐代の侠客とそれまでの侠との著しい相違点として、次のように分析している。

豪俠驚聲華，立虛譽，修行砥名，聲施天下。劍俠則身份隱晦，不為人知，平時則有多種身份作隱匿，如商人婦的荊十三娘，紅線等。他們只在某一時機出現，并迅即隱沒在歷史的背後，光影寂滅，不知所向。因此，他們每每給人帶來神秘詭異的感覺。殺人喋血，來去無蹤...讓人惴惴不安。另外，劍俠也多半獨來獨往，不以交友結納見長⁽¹⁴⁾。

（豪俠（稿者注：龔鵬程が作った、唐以前の侠客のイメージの総称）は自分の名を世に馳せるため修業し、名誉を求めているが、劍俠は名を隠し、人に知られないように常に多重の身分を持ち、正体を隠す。たとえば、商人の妻の荊十三娘、紅線等、彼らはあるときに人々の前に現れ、間もなく歴史の裏側に隠れていき、光も影も消えてゆき、行方不明になる。ゆえに、彼らは往々にして神秘的且つあやしい感じをもたらしている。人を殺し、血まみれになり、形跡なく来て去り、人をびくびく不安にさせる。また、ほとんどの劍俠は独りで往来し、人と交わることが苦手なのである。）

そして、頼秀真も、唐代の女侠はとても凡人ではないように描かれていることを指摘しており、女侠についての容貌、気質、心理描写はそれなりに、大雑把で簡略的なスケッチのようなものと述べている⁽¹⁵⁾。

そういったような唐代女侠に付与されている特徴は、まさに秦淳の十三妹像

(13) 武田泰淳「淫女と豪傑」、『武田泰淳全集』第12巻、筑摩書房、1979、p29

(14) 龔鵬程『俠之精神文化史論』山東画報出版社、2008、p108

(15) 頼秀真、前掲論文、p72

にある神秘的、世間離れ、無情、残忍等の非人間性に帰着するイメージと類似しており、十三妹が行方不明になるという「女賊の哲学」の結末も、唐代女侠伝説の典型的なパターンだと言えよう。

また、泰淳の十三妹は、「予知能力」という点において、女侠の鼻祖である聶隱娘とつながっている。聶隱娘の物語において、主人公の聶隱娘は敵の精精児と空空児の襲来を予測しており、結末の部分に、元上司の息子に対して忠告と予言を伝える。そのことから、聶隱娘が、予知能力を持っていることは明らかである。泰淳が十三妹に予知能力を加えていることも聶隱娘からヒントを受けたと考えられよう。

4. 泰淳のオリジナリティー

以上で、泰淳の十三妹が持っている非人間性と予知能力という特徴は中国の唐代女侠のイメージと関連していることを示した。それでは両者の相違点、即ち泰淳の十三妹のオリジナリティーは何であろうか。最も顕著な違いは予知能力の性質と不幸という点である。

唐代伝奇小説の女侠たちの中で予知能力を持っているのは、女侠の鼻祖である聶隱娘だけである。彼女はその能力の関わる分野において、物事の成り行きに参与せず、予言だけをしている。しかし、泰淳の十三妹はさして予言しておらず、自分の予知したことを成し遂げるため積極的に助力を惜しまない。たとえば、夫がこれから政治の争いで肝要な人物になることを予知し、自分の忍術で彼の試験官を操り、彼を合格させる。換言すれば、泰淳の十三妹は予知することができるだけでなく、これから自分のせざるを得ないこと、これから自分の果たさざるを得ない役割、あるいは自分の運命を了然として知り尽くしている。

また、聶隱娘から『兒女英雄伝』の十三妹までの女侠の全体的なイメージと比べると、もう一つの著しい違いは、泰淳の十三妹が不幸な女性として描かれている、ということだ。それは、予知能力と非人間性という二つの特徴とつながり、泰淳にとっては重要なポイントだと言えよう。以下ではこの不幸につい

て、そしてこの特徴と予知能力、非人間性との関連性について分析する。

ドイツ人作家のパトリック・ジュースキントが『香水 ある人殺しの物語』の中で「予知できる人は不幸と死をもたらしている」と述べているように、「予知能力」と「不幸」は密接な連関がある。第二章での二人の十三妹の比較において、外側から見た泰淳の十三妹の不幸について述べたが、ここでは、泰淳の十三妹自身のわずかなセリフや描写を拾い、彼女の感じていることを捉える。

『十三妹』の「その後の話」で、十三妹は好敵手の白玉堂と心を互いに打ち明ける。その中で、白玉堂の先を予知している十三妹は、死地の「八卦銅網陣」へ赴こうとする彼に、「八卦銅網陣へは、行かない方がいいと思います」、「わたしが、あなたのかわりに参りますよ」と言い、その声には「女性の心のみだれがまじってきこえる」(p168)と語り手は語る。そして、白玉堂は安公子の話を取り上げ、十三妹は安公子を守らざるを得ないことを指摘する。その際、彼女は「いくらかつらそうな固い声で」「あのひとの話をするのは、やめにしましょう」と断り、その後、「あなたは、いいひとね。いいひとが私は好きよ」と告白し、「私は、平凡な女です」と言い、「私を特別の女、女以外の女と考えないでちょうだい」と求める (p169)。以上のことから見ると、十三妹は夫の安公子に強い愛情を持っておらず、避けられない重荷だと感じ、逆に白玉堂に好感を持っていることが明白に分かる。「女賊の哲学」に、彼女が安公子の首を切る時、「第二夫人は謎のような微笑みをもらしたが、それには悲しみとも喜びともつかぬ、うつけたような、酔いしれたような、底深い緊張がふくまれていた」(p143)と語り手は示していることから、そのことが読みとれる。その後、永久に十三妹を信じ、愛すると告げていた張金鳳が夫殺し等のことで十三妹を憎み始める。十三妹はそれに対し、「わたしは、あなたが今のような言葉を私に向かって吐きかけることを、私が安家に嫁入りする日から知っていたのですよ。いやもっと前から、知っていたのかしれない……」と嘆き、「憂愁の雲が、あけがたの谷間から起ち昇った形で、うす白く女賊のひたいをとざした。」(p145)と感傷的に描かれている。

十三妹は、愛する白玉堂が死地に赴くという運命を知っており、自分がどれ

だけ強くてもそれが運命であるゆえに、その事態を防ぐ術がない。頼られている人、愛されている人、守ってあげたい人に対して、いつか裏切るようなことをせざるを得ないし、彼らから誤解されざるを得ないが、それが運命であるゆえに、従わざるを得ない。つまり、非人間性を見せざるを得ない。彼女はそうしたことに、憂愁をつのらせ、不幸を感じているのである。

しかし、白玉堂と打ち明け合い、離別したあと、彼女は、「熱っぽい、不敵の目」で、「幸福にみちた明るい安一家の外にある、くらいくらい広大なる世界を見つめ、見抜こうとしている」(p170)。また、「女賊の哲学」では、張金鳳に憎まれたものの、彼女を安全な場所へ送り、自ら去っていく時、『出発！すべての、あらかじめ定められたものをきわめつくすために』(p145)と傍点と二重鉤括弧で彼女の決意を強調している。

以上のような彼女のイメージは、泰淳が昭和 27 年に発表したエッセイ「新しき知的士族について—あやまれるインテリ論を駁す—」のインテリについての説明に最もよく当てはまる。

(彼らは) 先覚者であると共に先行者である。…奇を好んだり、あわてて駈け出す必要はないが、とにかく新しき事態を造り出す力の一部となろうとする。たとえ絶望するにしても、なおその絶望を純粋明確に形象化することによって、原動力とならねばならぬ⁽¹⁶⁾。

即ち、予知能力を持っている泰淳の十三妹は、知り尽くし、定められた運命に追われ、不幸に陥っている人である一方、運命の成り行きの強力な助力者だとも言えよう。

5. 結論

これまで論じたことをまとめると、次のようになる。

⁽¹⁶⁾ 武田泰淳「新しき知的士族について—あやまれるインテリ論を駁す—」『武田泰淳全集』12、筑摩書房、1979、p214

まず、泰淳の十三妹像の特徴の記述を行った。その中で、粉本の『兒女英雄伝』にある十三妹の原型と比較し、残忍さ、冷静さ、对人的距離感等の類似点ならびに相違点を挙げた。その中の最も大きな違いとして、「予知能力」、「非人間性」及び「不幸」の三つの特徴を抽出した。これらは、『兒女英雄伝』の十三妹に対して、泰淳が自ら加えた特徴であり、「泰淳の十三妹」を弁別する「証し」となっている。

そして、十三妹の「予知能力」と「非人間性」という二つの特徴について、中国唐代伝奇小説の女侠のイメージと比較しつつ、関連性を分析した。そこからは、泰淳のオリジナリティーが見いだされた。そのオリジナリティーとは、泰淳の十三妹は運命の予知者であると同時に、運命の成り行きに強力な助力者でもあるということと、「予知能力」「非人間性」および「不幸」の三つの特徴が連鎖的に発生していくという「繋がり」である。

泰淳の十三妹の持つ運命への予知能力がもたらした非人間性という事象によって、他人から理解されない、愛されない、という結果を招いていることがまずは現れる。そして、どれほど人として、女侠として強くなっても、常に予知される運命に対する無力感と虚無感を感じているため、不幸を感じる。一方、彼女は不幸を感じつつ、自分の果たすべき役割を知り尽くし、運命に従い、その成り行きを進展させる。

要するに、十三妹は泰淳の運命論という思想の結晶から生まれた人間像とも言えよう。それゆえ、泰淳は17年間の月日を経てもなお「わが愛する」十三妹が再び登場することになったのだろう。

最後に、今後の課題を挙げておこう。本稿では積極的に触れることは出来なかったが、泰淳が中国を背景として描いた作品は、主に女性が主人公となっており、不幸、運命と結びついているのである。たとえば、十三妹の登場する「女賊の哲学」と同時期に書かれている「才子佳人」、『十三妹』と同時期に書かれた『秋風秋雨人を愁殺す』等である。この「中国-女性-運命」という泰淳の作品の特徴は、今後研究されるべき課題であろうと思う。

<参考文献>

- ・井波律子『破壊の女神——中国史の女たち』新書館、1996
- ・尾崎秀樹「武田泰淳と竹内好」、『国文学：解釈と鑑賞』37-8、1972、pp.82-86
- ・郭偉「武田泰淳と胡適——「十三妹」を中心に」、『立命館言語文化研究』16-3、2005、pp.237-249
- ・郭偉「武田泰淳における「翻訳」—中国東北関連作品の翻訳にふれつつ—」、『野草』76、2005、pp.141-143
- ・龔鵬程『侠之精神文化史論』山東画報出版社、2008
- ・胡曉真「蕪繁日用與道統倫理—論《兒女英雄傳》」(上)『新文学』(第二輯)、大象出版社、2003、pp.182-198
- ・胡曉真「蕪繁日用與道統倫理—論《兒女英雄傳》」(下)『新文学』(第三輯)、大象出版社、2003、pp.241-253
- ・小嶋知善「武田泰淳『十三妹』論—企図と背景—」、『目白大学短期大学部研究紀要』39、2002、pp.1-11
- ・小竹文夫「上海にいた作家たち」、『群像』11-6、1956、pp.190-193
- ・三島由紀夫他「才子佳人」、『国文学：解釈と鑑賞』37-8、1972、pp.132-144
- ・白川正芳「武田泰淳における戦中と戦後」、『国文学：解釈と鑑賞』37-8、1972、pp.77-81
- ・高崎俊夫「編集者あとがき」、『淫女と豪傑—武田泰淳中国小説集』2013、pp.249-255
- ・田中美代子「"愛"のかたち」、『国文学：解釈と鑑賞』37-8、1972、pp.103-106
- ・布野栄一「武田泰淳における中国体験」、『国文学：解釈と鑑賞』37-8、1972、pp.72-77
- ・布村弘「武田泰淳の「才子佳人」—原拠『西青散記』との距離—」(その1)『高岡法科大学紀要』2、1991、pp.302-267
- ・布村弘「武田泰淳の「才子佳人」—原拠『西青散記』との距離—」(その2)『高岡法科大学紀要』3、1992、pp.194-160
- ・布村弘「武田泰淳の「才子佳人」—原拠『西青散記』との距離—」(その3)

- 『高岡法科大学紀要』4、1993、pp.150-117
- ・布村弘「武田泰淳の「才子佳人」—原拠『西青散記』との距離—」（その4）
『高岡法科大学紀要』5、1994、pp.238-206
 - ・古林尚〔編〕「武田泰淳略年譜」『海』8-12、1996、pp.214-227
 - ・紅野敏郎「武田泰淳と第一次戦後派」『国文学：解釈と鑑賞』37-8、1972、
pp.92-96
 - ・堀田善衛「彼岸西風—武田泰淳と中国—」『世界』379、1977、pp.318-325
 - ・宮内豊「武田泰淳における性と愛について」『国文学：解釈と鑑賞』37-8、
1972、pp.34-38
 - ・村松暎「波瀾万丈、変幻自在—中国の清朝小説をもとに」『図書新聞』868、
1966、p4
 - ・頼秀真「文康『兒女英雄伝』新探」（修士論文）台湾国立嘉義大学中国文学研
究所、1996
 - ・魯迅『中国小説史略』北新書局、1927

武田泰淳の著作

- ・「淫女と豪傑」（1947）『武田泰淳全集』12、筑摩書房、1979所収
- ・「中国文学と人間学」（1948）『武田泰淳全集』12、筑摩書房、1979所収
- ・「女賊の哲学」（1948）『武田泰淳全集』2、筑摩書房、1978所収
- ・「新しき知的士族について—あやまれるインテリ論を駁す—」（1952）『武田泰
淳全集』12、筑摩書房、1979所収
- ・「唐代伝奇小説の技術」（1954）『武田泰淳全集』12、筑摩書房、1979所収
- ・「十三妹」（1965）『武田泰淳全集』9、筑摩書房、1978所収

中国の古典作品

- ・文康『兒女英雄伝』1878、本文は西湖書社、1981年出版のものを使用した。
- ・石玉崑『三侠五義』1879、本文は海南出版社、1992年出版のものを使用した。

- ・呉敬梓『儒林外史』出版年不詳、本文は人民文学出版社、1980年出版（初版1958年）のものを使用した。

タイ人学習者は日本語就職用自己PR文で“何をPRしているのか”

— PRの対象に関する日本人との比較 —

Topics written in Japanese letters of introduction for job application: A contrastive analysis between Thai learners and Japanese students

香山 恆毅

チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科 外国語としての日本語修士課程 M2

要旨

本稿は、タイ人大学生日本語学習者が日本語の就職用自己PR文で“何をPRしているのか”を、日本人大学生との違いから明らかにする。タイ人データは実際の就職面接会の応募書類21人分を、日本人データは実際の就職応募書類19人分を用いた。データを分析した結果、次の傾向が明らかになった。1. タイ人が高い割合でPRしている対象は「行動」「主観的能力」「考え方」であった。2. 日本人が高い割合でPRしている対象は「考え方」「行動」であった。3. タイ人が日本人より高い割合でPRした対象は「主観的能力」であった。タイ人と日本人の傾向が異なる要因は、それぞれの社会で肯定的に捉える物事が異なるからであると考えられる。

キーワード：日本語自己PR文、PRの対象、就職、タイ日対照分析

Abstract

This paper illustrates what topics Thai students often write about in Japanese self-introduction letters for job hunting. Using self-introduction letters of 21 Thais and 19 Japanese, an analysis revealed the following findings: 1. Thais mainly write about their performance, abilities or ways of thinking. 2. Japanese mainly write about their ways of thinking or performance. 3. Thais write about their ability more than the Japanese. These differences between

Thais and Japanese may be related to those things positively valued by each society.

Keywords: Japanese self-introduction letter, topics for self-introduction, job hunting, contrastive analysis between Thais and Japanese

1 はじめに

1.1 研究背景

日本の企業は、アジア諸国の現地の大学に通う新卒大学生（以下、アジアの大学生）を、日本の本社の正社員として採用し始めている⁽¹⁾。アジアの大学生は、同採用への応募で、日本の大学に通う学生と同じ応募書類を要求される場合がある。例えば、いわゆるエントリーシート、日本語の履歴書、日本語の自己PR文、志望動機書などである。

チューラーロンコン大学では、2013年7月、日本語主専攻最終学年の学生に日本企業の日本本社への就職応募機会があった。上の要求に対し、タイ人学生からは、「自己PRで日本人が重視する観点は何ですか?」「書かない方がいい内容がありますか?」という質問があった。ここで、この応募に用いられた自己PR文の一部を下に例示する。

私は（中略）ボランティアキャンプに参加しました。（中略）キャンプの日常生活では、前もってその次の日の予定を必ず計画し、物事を準備しなければなりません。私は毎晩寝る前に次の日の担当させていただいた科目の内容と視覚教材全部準備しておきました。ですから、授業中の勉強を順順に教えられました。（中略）その経験から、事前準備をしっかりと、物事の順序や時間きちんと扱えるようになりました。（下線は筆者による） [タイ人15]

(1) 本稿の「企業」という言葉は、「経済活動を営む組織」という意味で用いる。関連法規が規定する意味ではない。

応募に用いられた自己 PR 文は、日本人協力者 2 人に採用側の視点で読んでもらった。2 人とも日本国内の企業に 3 年以上勤め、現在はバンコクの日系企業に 2 年以上勤めている。そして、上の例の下線部に対して次のコメントを書いた。「ギリギリ?」「もう少し前もって?」。つまり、タイ人が前もって準備していることを PR したにもかかわらず、日本人は準備が遅すぎると感じていた。これは、タイ人学生が肯定的に捉えて書いたことが、日本人社会人からは否定的に捉えられた例であると考えられる。野元 (2004) は、日本で学ぶ留学生へのビジネス日本語教育の課題として、エントリーシートや履歴書の書き方を挙げている。上の例のような、タイ人と日本人の物事の捉え方の違いを見ると、アジアの大学生に対しても、野元 (2004) が指摘した課題に取り組む必要があると考えられる。しかし、就職用文書に関する研究は、日本語教育の分野において、筆者が調べた限り見付からない。

そこで本研究は、就職用文書のうち、実際の応募に用いられた自己 PR 文 (以下、就職用自己 PR 文) を分析する。データとして用いるのは、タイ人大学生日本語学習者 (以下、タイ人) 21 人分、および日本人大学生 (以下、日本人) 19 人分、合計 40 人分の就職用自己 PR 文である。詳細は 3 節で示す。

1.2 研究目的

本稿は、下の 2 つの課題を明らかにする。

〈課題 1〉タイ人が就職用自己 PR 文で“何を PR しているのか (以下、PR の対象)”を、日本人との違いという観点から明らかにする。

〈課題 2〉タイ人と日本人とで出現割合の差が大きい自己 PR の対象について、現れる語句を明らかにする。

本稿の構成は次の通りである。2 節では、「自己 PR」を自分をほめる行為と捉え、「ほめ」に関する先行研究を参考に「就職用自己 PR 文」を定義する。そして“何をほめるのか”に関する先行研究を見る。3 節では、データの概要と分析方法を提示する。4 節では、データの自己 PR が“何を PR しているのか”を示す。そして、タイ人と日本人のデータを比較して傾向を述べる。5 節では、分析結果の傾向が意味するところを考察する。6 節では、結果および考察の内容をまとめる。そして本研

究の日本語教育への応用について述べる。

2 先行研究

就職用文書に関する研究は、心理学や経営学の分野から報告されている。小島 (2006) は、大学 3 年生 38 人が書いた模擬エントリーシートを分析し、長所・短所の記述は、就職準備活動数が相対的に多いほど、より具体的かつ説明的になる可能性を示している。柳田他 (2012) は、大学 3 年生から大学院 2 年生までの合計 24 人が模擬エントリーシートとして書いた「航空会社 x 社の経営改善」に関する小論文を、企業側など 10 人が評価する実験研究を行い、用いられた言葉の分析などから、企業が採用したい学生は「①独創的なアイデアを客観的に表現できる能力、②専門分野を理解し自分の言葉で表現できる能力を有する」(p1) と述べている。鷲坂 (2000) は、実際の会社説明会で「大学時代に力を入れたこと」というテーマで課された作文 100 編を、採用選考担当者など合計 12 人 (1 編あたり 6 人) が評定する実験を行い、評定者間の一致度から、作文評定の安定性は「評定者によって個人差が大きい (中略) ことが実証的に確認され」(p88) と述べている。

上記のように、就職用文書に関する研究が心理学や経営学の分野から報告されている。しかし、日本語教育の分野における研究は、筆者が調べた限り見付からない。本研究は、「自己 PR」を自分をほめる行為と捉え、日本語教育分野の「ほめ」に関する研究を参考に、就職用自己 PR 文を分析する。

2.1 「ほめ」と「就職用自己 PR 文」の定義

「ほめ」の定義は、小玉 (1996) が次のように定義している^②。「ほめるという言語行為は、話し手が聞き手或いは聞き手の家族やそれに類する者に関して“よい”と認める様々なもの或いはことに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的に或いは暗示的に、肯定的な評価を与える行為である」(小玉 1996:61)。

^② 「ほめ」の定義は、小玉 (1996) の他に、Holmes (1986, 1988) ならびに古川 (2003) がある。自己 PR 文に応用できるという観点で、本稿では小玉 (1996) の定義を参考にした。

また、就職用自己PR文の目的について、キャリアデザインプロジェクト編 (2012) は、自分が企業で活躍できることを伝えられていることが重要であると述べている。本研究は、小玉 (1996) を参考に「就職用自己PR文」を下のように定義する。

「就職用自己 PR 文」は、企業で書き手が活躍できることを伝えるために、自分に関して書き手が“よい”と認める様々な物事を、明示的または暗示的に示す文章である。

22 ほめの対象 — 何をほめるのか

ほめは、ある社会がどのような対象物に対して肯定的な価値観を置いているかを反映する (熊取谷 1989、Herbert 1989)。

Holmes (1988) は、ニュージーランドのほめについて、ヨーロッパ系中流階級ニュージーランド人英語母語話者の実際会話のほめを報告している。そして「ほめの対象 (Topics)」は、限られた対象が大部分であると述べている。すなわち、「外見 (Appearance)」および「能力・遂行 (Ability/Performance)」の 2 つを合わせた割合が全体の約 8 割であったことを示している^③。

金 (2005) は、韓国と日本のほめについて、韓・日大学生の親しい同性友人同士の会話のほめを報告している。そして、高い頻度で現れる「ほめの対象」が、韓国と日本の大学生社会とでは異なることを述べている。すなわち、韓国語母語話者は、頻度が高い順に「外見の変化」「外見」「遂行」が現れる。一方、日本語母語話者は、頻度が高い順に「遂行」「行動」が現れることを示している。金 (2005) の「ほめの対象」の種類とその出現割合を図 1 に示す。

日本の書き言葉データのほめについて、古川 (2003) は「『ほめ』の対象」と、「社会的力関係 (上下関係)」ならびに「社会的距離 (親疎関係)」との関連を報告している。データは書き言葉データであり、新聞、時事関係記事を主に扱う雑誌および小説から、「～とほめた」「～とほめてくれた」等の表記があるものを用いている。そして、上から下へのほめでは、「行動・態度」を対象にしたほめが多い

^③ 日本語訳は、() 内の英語の筆者が訳した。

こと、また、疎の関係のほめでは、「作品」を対象にしたほめが多いことを示している。

以上、2.2 では「ほめの対象」に関する 3 つの研究を見た。「ほめの対象」は、社会や相手との関係によって特徴があることを、3 つの研究すべてが示していた。そして日本社会でほめる割合が高い対象は、行動や遂行や態度と考えられる対象であった。「ほめの対象」の種類は研究により異なっていた。「ほめの対象」の定義は金 (2005) が定義していた。本研究は、金 (2005) の「ほめの対象」の種類ならびに定義を参考に、「自己 PR の対象」の種類を定義する。詳しくは 3.2 で述べる。

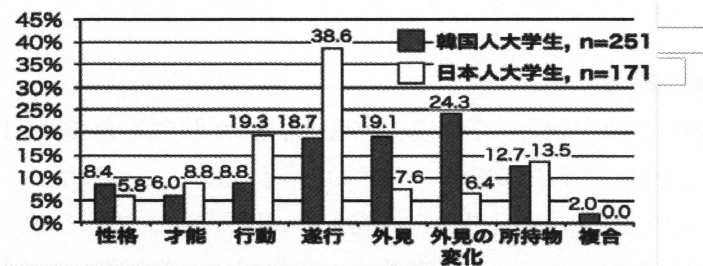


図1 韓・日大学生の会話における「ほめの対象」の出現割合⁽⁴⁾

3. 研究方法

3.1 データの収集方法と概要

3.1.1 タイ人データ

タイ人データは、チューラーロンコーン大学日本語講座日本語主専攻最終学年の 21 人 (以下、研究協力者) が書いたものである。実際の就職面接会 (以下、面接会) への応募書類である。記入条件は「自己 PR (400 字以内)」である。応募はインターネット経由である。

データを集める方法は、研究協力者が、自身の面接会応募用データを本研究用データ入力書式に転記することによった。本研究用データ入力書式は、筆者がインタ

⁽⁴⁾ 図1は、金 (2005) の「表3」 (p18) をもとに筆者が作成した。

ーネット上に用意した。収集期間は、2013年6月29日から同年7月11日までである。6月24日に、データの記入条件と収集方法を口頭および文書で研究協力予定者に伝えた。7月11日は、就職面接会応募締切り日と同じ日である。以上の方法により、タイ人データ19人分を得た。平均文字数は383字である。

ここで、面接会の概要を述べる。この面接会は、日本の企業がアジアの学生を日本本社の正社員として採用する目的で開かれるものである。参加企業数は18社である⁽⁵⁾。書類審査を通過した応募者は、東京で開かれる面接会に呼ばれ、複数社と面接する。タイ・日間の渡航費、日本での宿泊費などは面接会主催者が全額負担する。

3.12 日本人データ

日本人データは、日本の大学生が実際の就職応募のために書いたものの19人分である。これは、書籍『内定勝者 私たちはこう言った! こう書いた! 合格実例集&セオリー2014 エントリーシート編』キャリアデザインプロジェクト(編)(2012)PHP出版(以下、『内定勝者』)に掲載されている事例から集めた。

日本人データに書籍を選んだ理由は、タイ人データと条件に近いデータを集めるためである。タイ人データと同様に、模擬的に書かれたものではなく、実際の就職に使用されたデータを得るために書籍の実例から集めた。

書籍の選択基準は、事例データの収集方法が本文中に書かれていることである。『内定勝者』を選んだ根拠は、同書の次の記述である。「掲載してあるのは基本的に内定及び内々定者(ともに自己申告)たちが作成したものである。また内定及び内々定者たちが選考時に提出した課題文や履歴書、及び、CDP⁽⁶⁾の人事メンバーがよく書けていると判断したものも一部掲載してある」(キャリアデザインプロジェクト(編)2012:125)。また『内定勝者』には、事例データを提供した学生の、性別、学部生・大学院生の別、文系・理系の別、そして内定企業名も書かれている。

(5) 主催者の意向により、参加企業と主催者が特定できる情報の提示を控える。

(6) 「キャリアデザインプロジェクト」の略語である。

実例の選択基準は次の3つである。1. 自己PR文であること⁽⁷⁾。2. 文字数が400字以内であること。3. 文系の学生が書いたもの。これらの基準を設けた理由は、タインデータと条件に近いデータを集めるためである。以上の基準により、『内定勝者』から19人分のデータを選んだ。平均文字数は341字である。

3.2 分析方法

3.2.1 「自己PRの対象」の設定

2節で述べた「ほめ」の研究、すなわち、Holmes (1989)、金 (2005)、古川 (2003) は、会話または書き言葉データの中から「ほめ」と判断できる部分を抜き出して研究対象にしていた。本研究は、データのすべての内容が「自己PR」であると考えられる。

自己PRの対象の種類は6種類を定める。①性格、②主観的能力、③客観的能力、④考え方、⑤行動、⑥困難な状況、である。この「自己PRの対象」は、金 (2005) の「ほめの対象」を調整して定めた。調整では、金 (2005) を参考に本研究のデータを分類しながら、就職用自己PR文に適するように「ほめの対象」を変えた。「自己PRの対象」の種類とその定義を表1に示す。

表1 「自己PRの対象」の種類と定義

| 自己PRの対象 | 定義 |
|---------|------------------------------------|
| ①性格 | 書き手に固有の感情の傾向。 |
| ②主観的能力 | 書き手が認める書き手の一定の素質、または訓練によって得られた能力。 |
| ③客観的能力 | 書き手が他者から認められた能力。または普遍妥当性をもつ書き手の能力。 |
| ④考え方 | 書き手が頭の中で考えたこと。 |
| ⑤行動 | 書き手の性格や能力や考え方から現れるような実際の行い。 |
| ⑥困難な状況 | 書き手にとって物事をするのが難しい状況。 |

3.2.2 分類作業1— 定義による分類

分類作業は2段階で行う。1段階目では、定義による分類を行う。データを表1の「定義」に合わせて切り分け（以下、分割）、該当する「自己PRの対象」に仕

⁽⁷⁾ 『内定勝者』の実例には、「自己PR」と「志望動機」の2種類がある。

分ける（以下、分類）。分類作業は、筆者の判断で行う。この作業は、“何を PR するのか”という書き手の視点ではなく、読み手の視点で“何を PR しているのか”を判断する。つまり、就職の応募学生の視点ではなく、企業の採用担当者の視点で行う。下に分割および分類の例を示す。

【例1】「定義」に合わせて分割

私は几帳面で、整理整頓が得意な方だと思います。 [タイ人5]

例1は、2つの「自己PR」に分割する。1つ目は「私は几帳面で」という部分である。この部分は、表1の「①性格：書き手に固有の感情の傾向」を表していると考え「①性格」に分類する。2つ目は「整理整頓が得意な方だと思います」という部分である。この部分は、表1の「②主観的能力：書き手が認める書き手の一定の素質、または訓練によって得られた能力」を表していると考え「②主観的能力」に分類する。例1のように分割および分類した「自己PR」の例を、「自己PRの対象」ごとに1例ずつ表2に示す。

表2 定義により分類された自己PR文の例

| | 自己PRの対象 | 自己PR文の例 |
|------|---------|---|
| 【例2】 | ①性格 | 私はもともとコンピューター科学の分野に興味を持っていたのですが、 [このアルバイトではワード、エクセル、フォトショップなどの基本的な技術を活用できることが楽しいです。] [タイ人17] |
| 【例3】 | ②主観的能力 | 今、日常会話なら困らず日本語で話すことができます。 [タイ人3] |
| 【例4】 | ③客観的能力 | [留学先では、一生懸命日本語を勉強し、最初、全く日本語が分かりませんでした。] 日本語能力試験の2級に合格するまで日本語が上達しました。 [タイ人20] |
| 【例5】 | ④考え方 | 職場では様々な人がいるので、協調性が大切だと思います。 [タイ人12] |
| 【例6】 | ⑤行動 | 私の担当した仕事は全体のプロジェクトの管理者とプロジェクトのスケジュールを作成することでした。 [タイ人10] |
| 【例7】 | ⑥困難な状況 | それにいくら疲れても、仕事がまだ終わらないと休むことができませんでした。 [タイ人18] |

凡例1: 下線部は、該当する「自己PRの対象」に仕分けた根拠の部分である。

凡例2: []内は、該当する「自己PRの対象」に含まれない内容である。別の「自己PRの対象」に含ま

れる前後の文脈を、例示用に要約して補足した。

3.2.3 分類作業2— 語による分類

分類作業の2段階目では、語による分類を行う。同じ語を持つ自己PRが、同じ「自己PRの対象」に分類されるように、「分類基準の語」を定める。「分類基準の語」と「自己PRの対象」の対応を表3に示す。「分類基準の語」は、データを定義に合わせて分類する際に、複数回現れる語に着目して定めた。

表3 「自己PRの対象」の分類基準の語

| 自己PRの対象 | 分類基準の語 |
|---------|---|
| ①性格 | 「我慢強い」「好き」「興味」「根気」 |
| ②主観的能力 | 「可能形の動詞」「分かる・理解する」「上達する」「役に立つ」「向上する」「慣れる」「自信」「得意」「リーダーシップ」 |
| ③客観的能力 | 「(肯定的な内容を)言われる」「任される」「勝つ」「優勝」「褒め」「合格」 |
| ④考え方 | 「考える」「思う」「感じる・実感する」「決める・決意する」「目指す・目標」「提案」「Vたい」「Vようと(意志)」「Vように(目的)」「…ため(目的)」「大切・大事・必要・重要」「責任(感)」「勉強になる・勉強する・学ぶ」「積極的」「あきらめない」 |
| ⑤行動 | 書き手の実際の行いを表す語。上の①②③④に含まれる語を除く。 |
| ⑥困難な状況 | 定めない。 |

以上の方法で分類した自己PRを、タイ人・日本人別、「自己PRの対象」別に集計する。そして、タイ人ならびに日本人が就職用自己PR文で“何をPRしているのか”を明らかにする。

4. 結果

4.1 データ全体の「自己PR」の例数

データを表1の「定義」に合わせて分割した結果、タイ人21人分のデータは、314例の「自己PR」に分割された。日本人19人分のデータは239例に分割された。「自己PR」の例数などを表4にまとめる。「自己PR」1つあたりの文字数は、タイ人データと日本人データとでほとんど変わらなかった。

表4 データ全体の「自己PR」の例数

| | タイ人データ | 日本人データ |
|--------------------|--------|--------|
| データの文字数合計(字) | 7,955 | 6,487 |
| 「自己PR」の数(例) | 314 | 239 |
| 「自己PR」1つあたりの文字数(字) | 25.3 | 27.1 |

4.2 タイ人・日本人の「自己PRの対象」— 何をPRしているのか

データを表1の「定義」に合わせて分割後、6種類の「自己PRの対象」に分類した。まず、データに現れた「自己PRの対象」の例数を表5に示す。そして、全体に占める出現割合を図2に示す。

表5 「自己PRの対象」の出現状況

| 自己PRの対象 | タイ人データ | | 日本人データ | |
|---------|--------------|-------------------|--------------|-------------------|
| | 自己PR数 (例) | 全体に占める 出現割合(%) | 自己PR数 (例) | 全体に占める 出現割合(%) |
| ①性格 | 13 | 4.1 | 6 | 2.5 |
| ②主観的能力 | 60 | 19.1 | 12 | 5.0 |
| ③客観的能力 | 19 | 6.1 | 20 | 8.4 |
| ④考え方 | 57 | 18.2 | 92 | 38.5 |
| ⑤行動 | 123 | 39.2 | 76 | 31.8 |
| ⑥困難な状況 | 30 | 9.6 | 24 | 10.0 |
| その他 | 12 | 3.8 | 9 | 3.8 |
| 合計 | 314 | 100.0 | 239 | 100.0 |

図2から、タイ人と日本人の自己PRの傾向について、次の4つの傾向が見られる。〈傾向1〉は、タイ人が高い割合でPRしている対象である。出現割合が高い順に、⑤行動が39.2%、②主観的能力が19.1%、④考え方が18.2%であった。この3つを合わせるとタイ人データ全体の約76%を占めた。〈傾向2〉は、日本人が高い割合でPRしている対象である。出現割合が高い順に、④考え方が38.5%、⑤行動が31.8%であった。この2つを合わせると日本人データ全体の約70%を占めた。

《傾向 3》は、タイ人の方が日本人より高い割合で PR している対象である。これは、②主観的能力が 3.8 倍であり、差が大きい。《傾向 4》は、日本人の方がタイ人より高い割合で PR している対象である。これは、④考え方が 2.1 倍であり、差が大きい。

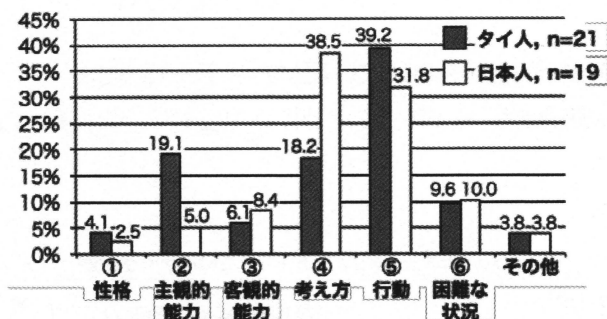


図2 タイ人・日本人の「自己PRの対象」の出現割合

以上 4 つの傾向が明らかになった。タイ人と日本人とで出現割合の差が大きかった自己 PR の対象は、②主観的能力および④考え方であった。本稿では「主観的能力」の自己 PR で現れた語句をタイ人・日本人別に明らかにする。

4.3 「主観的能力」を PR している語句

この項では、タイ人ならびに日本人が「主観的能力」を“どのように PR しているのが”、用いた語句の傾向を見る。このため「自己 PR の対象」が「主観的能力」のデータをすべて提示する。データの提示は、表 2 の「分類基準の語」別にまとめる。「分類基準の語」は、データを「定義」に合わせて分類する際に、複数回現れた語である。

4.3.1 タイ人の「主観的能力」を PR している語句 — データ全例より

タイ人が「主観的能力」を PR していた数は、60 例であった。その全例を表 6 に示す。ここで、表の見方を、表 6 を例に述べる。まず、タイトル行の下の枠には、

左の列に「可能形の動詞『できる』」とある。右の列には「日本語」とある。この例は「日本語ができる」という自己PR文があったことを表している。

次に、その下の枠には、左の列に「可能形の動詞『できる』以外」とある。「できる」以外の可能形の動詞は複数ある。このため、右の列には、可能形の動詞と、その目的語を含む「自己PR」を示した。また、簡略のため、一部を除き丁寧体は普通体で表した。

4.32 日本人の「主観的能力」をPRしている語句 — データ全例より

日本人が「主観的能力」をPRしていた数は、12例であった。その全例を表7に示す。

表6 タイ人の「主観的能力」をPRしているデータ全例

| 「主観的能力」の「分類基準の語」 | 例数 | 「分類基準の語」の目的語など |
|------------------|----|--|
| 可能形の動詞「できる」 | 13 | 「日本語」「日本語で話すこと」「自分の時間を上手に管理」「自制」「平静を保つこと」「時間や人をマネジメントすること」「人に対応すること」「誰でも仲良く」「ワード、エクセル、フォトショップなどの基本的な技術を活用」「日本語の能力を発揮」「[ドラマの字幕入れが]間に合うようにできました ⁽⁸⁾ 」「問題を解決する方法を考える訓練もできた ⁽⁸⁾ 」「[新しいことを]征服できた ⁽⁸⁾ 」 |
| 可能形の動詞「できる」以外 | 8 | 「日本語の新しい言葉をどんどん覚えられる」「日本語の日常会話が上手に話せる」「勉強を順調に教えられる」「物事の順序や時間きちんと扱える」「 <u>落ち着ける</u> 」「コラボレーションでも効果的に働ける」「[ギターが]上手く弾けた」「責任感が <u>取れる</u> ことに自信を持っている ⁽⁹⁾ 」 |
| 「分かる」 | 6 | 「タイの文化」「日本語」「先生の気持ち」「自分は何か」「自然なタイ語に訳すのが大切だということ」「しっかり計画を立てれば大丈夫だということ」 |
| 「理解する」 | 2 | 「日本文化」「日本語も母語のタイ語も」 |
| 「上達する」 | 4 | 「日本語」「英語」「説明力」「コミュニケーションスキル」 |
| 「向上する」 | 3 | 「話す力と聞く力」「論理思考」「創造思考能力」 |
| 「慣れる」 | 2 | 「日本人の生活や習慣」「ソフトの使い方」 |
| 「得意」 | 3 | 「整理整頓」「人をまとめるの」「人々に接すること」 |
| 「自信」 | 3 | 「日本語で話す」「日本語をタイ語に訳すこと」「人々に接すること」 |
| 「役に立つ」 | 3 | 「このことは日経企業で働くときに必ず」「この経験は実際に」「このアルバイトは、将来の仕事に」 |
| 「リーダーシップ」 | 3 | — |
| 「協調性」 | 2 | — |

| 「主観的能力」の「分類基準の語」 | 例数 | 「分類基準の語」の目的語など |
|------------------|----|--|
| その他 | 8 | 「「忍耐力」「解決力」「国際コミュニケーション能力」「日本語能力の伸長」「社交性」「自分の見方も広がるようになってきた」「『【インターネットサイト名】』というサイトで日本のエンターテイメント（歌、映画、ドラマ、歌手や俳優が出演する広告など）についてのニュースを選択し、日本語からタイ語に翻訳する」「よく計画を立てる」 |
| 合計(例) | 60 | (例数は、タイ人データの合計7,955字中に現れた数である。) |

凡例1: 下線部は、該当する「分類基準の語」に仕分けた根拠の部分である。

凡例2: [] 内は、該当する「自己 PR の対象」に含まれない内容である。別の「自己 PR の対象」に含まれる前後の文脈を、例示用に要約して補足した。

4.3.3 「主観的能力」を PR している「分類基準の語」の出現状況

表 6 と表 7 では、タイ人ならびに日本人の「主観的能力」を表す自己 PR を「分類基準の語」別にまとめた。この「分類基準の語」の出現回数を、タイ人と日本人

表 7 日本人の「主観的能力」を PR しているデータ全例

| 「主観的能力」の「分類基準の語」 | 例数 | 「分類基準の語」の目的語など |
|------------------|----|--|
| 可能形の動詞「できる」 | 7 | 「お客様と楽しんで会話」「成長していくこと ⁽⁸⁾ 」「物事を理論的に考え、解決することを学ぶこと ⁽⁸⁾ 」「とてもよい人間関係を築くこと ⁽⁸⁾ 」「柔軟な考え方・今までにない感動・友人・今後につながる達成感ととても多くのものを得ること ⁽⁸⁾ 」「企業側に架空のクライアントを用意して頂き、ヒアリング・要件定義からニーズに合わせた web サイトの制作までを体験すること ⁽⁸⁾ 」「どんな困難でも克服できる自信がある ⁽⁸⁾ 」 |
| 「上達する」 | 1 | 「[空手を] やればやるほど」 |
| その他 | 4 | 「行動力こそが、私の誇れる力だと気づきました」「自店の問題点を発見し、」「私が最も力を入れたのは、商法ゼミにおいて、 <u>会社法に関する論点</u> （買収防衛策や独立役員など企業経営の根幹に関わる事項）について [ディベートしたこと]」「いかなるポジションであっても確実に役割をこなした」 |
| 合計(例) | 12 | (例数は、日本人データの合計6,487字中に現れた数である。) |

凡例1: 下線部は、該当する「分類基準の語」に仕分けた根拠の部分である。

凡例2: [] 内は、該当する「自己 PR の対象」に含まれない内容である。別の「自己 PR の対象」に含まれる前後の文脈を、例示用に要約して補足した。

⁽⁸⁾ 1つの自己 PR に複数の「分類基準の語」含むが、3.2.2 で示した「定義による分類」の方法で、該当する項目に分類した。

とで比較する。ここで、タイ人データと日本人データとは合計文字数が異なる。このため両データを4,000字に換算して比較する。これは、400字の自己PR文、10人分に相当する。「主観的能力」のPRで現れた「分類基準の語」の出現回数(4,000字換算)を、タイ人・日本人別に図3に示す。

図3から「主観的能力」のPRで現れた語句について次の2つが明らかになった。1つ目は、4,000字換算で5回以上現れた「分類基準の語」である。タイ人データでは、可能形の動詞を用いた自己PRが10.5回現れ(=6.5+4.0)、「主観的能力」の自己PRの35%を占めた。1人の自己PR文が400字と考えると、1人につき約1回現れたことになる。日本人データでは、5回以上現れた「分類基準の語」はなかった。

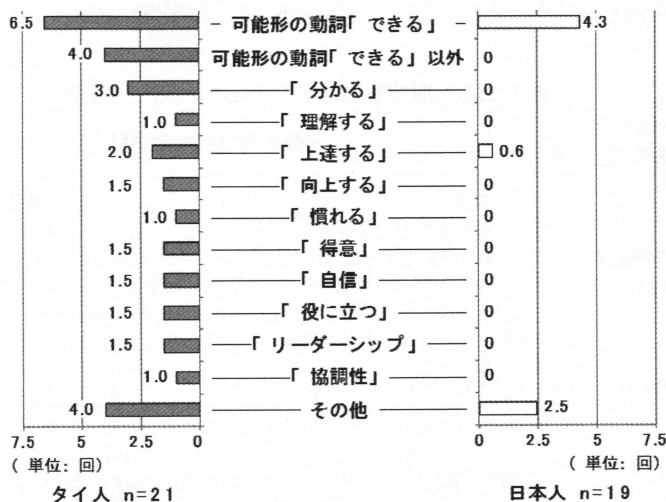


図3 「主観的能力」PRの「分類基準の語」出現回数(4,000字換算)

2つ目は、タイ人データだけで現れた語である。すなわち、「『できる』以外の

(9) 森田(1996)の「完了」(p20, p329)という意味であると考えられる。完了した結果、行為の主体にその能力が備わっていると考え、「主観的能力」をPRしていると判断した。

可能形の動詞「分かる」「理解する」「向上する」「慣れる」「得意」「役に立つ」「リーダーシップ」「協調性」、以上の語は、タイ人の自己 PR だけで現れた。

以上、4 節では、タイ人ならびに日本人の自己 PR の傾向を述べた。〈傾向 1〉〈傾向 2〉では、タイ人ならびに日本人が高い割合で PR している対象を述べた。〈傾向 3〉〈傾向 4〉では、タイ人と日本人とで出現割合の差が大きい自己 PR の対象を述べた。そして、4.3 では、出現割合の差が大きい自己 PR の対象について、現れる語句を明らかにした。これらは、1.2 で示した本稿の〈課題 1〉〈課題 2〉に対する答えである。

5. 考察 — タイ人と日本人とが“何を PR しているのか”の違いの要因

この節では、なぜ、4 節の〈傾向 1〉から〈傾向 4〉で示したように、タイ人と日本人とで「PR の対象」が異なるのかを考える。2 節で見た「ほめの対象」に関する 4 つの先行研究は、「ほめの対象」が社会によって異なることを示していた。ほめは、ある社会がどのような対象物に対して肯定的な価値観を置いているかを反映する(熊取谷 1989, Herbert 1989)。自己 PR は自分をほめる行為であると考えれば、自己 PR もまた、ある社会が肯定的に捉える対象を反映すると言えるであろう。したがって、タイ人と日本人とで「PR の対象」が異なる要因は、タイ社会と日本社会とで“何を肯定的に捉えるか”が異なるからであると考えられる。具体的には、タイ社会が肯定的に捉える対象は、4 節の〈傾向 1〉で述べた「行動」「主観的能力」「考え方」であると考えられる。一方、日本社会が肯定的に捉える対象は、4 節の〈傾向 2〉で述べた「考え方」「行動」であると考えられる。

6. まとめと今後の課題

6.1 まとめ

4 節および 5 節で得た結果と考察を下にまとめる。

〈傾向 1〉タイ人が高い割合で PR している対象は、「行動」が 39.2%、「主観的能力」が 19.1%、「考え方」が 18.2%であった。この 3 つを合わせると全体の約 76%を占めた。

〈傾向 2〉日本人が高い割合で PR している対象は、「考え方」が 38.5%、「行動」が 31.8%であった。この2つを合わせると全体の約 70%を占めた。

〈傾向 3〉タイ人の方が日本人より高い割合で PR している対象は「主観的能力」であり、日本人の 3.8 倍であった。さらに「主観的能力」を PR している語句について、次の2つを示した。

1. データ 4,000 字換算で 5 回以上現れた「分類基準の語」は、タイ人データでは可能形の動詞 (10.5 回) であった。日本人データでは、無かった。
2. 「分類基準の語」のうち次の語は、タイ人の自己 PR だけで現れた。「『できる』以外の可能形の動詞」「分かる」「理解する」「向上する」「慣れる」「得意」「役に立つ」「リーダーシップ」「協調性」。

〈傾向 4〉日本人の方がタイ人より高い割合で PR している対象は「考え方」であり、タイ人の 2.1 倍であった。

〈考察〉タイ人と日本人が“何を PR しているのか”の違いの要因は、タイ社会と日本社会とで、肯定的に捉える物事が異なるからである。具体的には、タイ社会が肯定的に捉える対象は、「行動」「主観的能力」「考え方」である。一方、日本社会が肯定的に捉える対象：「考え方」「行動」である。

6.2 本研究の日本語教育への応用

本研究開始時に、研究協力者のタイ人学生から「自己 PR で日本人が重視する観点は何か?」「書かない方がいい内容がありますか?」という質問があったことを 1 節で述べた。そして〈考察〉では、タイ社会と日本社会とで、肯定的に捉える物事が異なると述べた。従って、上の質問に対しては、「自己 PR は、自分に関して読み手の社会が“よい”と認めるであろう物事を書けばよい」と答えたい。

この考察は、2 節で示した金 (2005) の考察と通ずる。金 (2005) は、韓・日大学生の親しい同性友人同士の会話のほめに関して報告している。そして、韓日間のミス・コミュニケーションの原因を次のように考察している。「『外見』を頻繁にほめたりすると、かえって日本語母語話者を戸惑わせたり、不快にさせてしまうかもしれない」(p20)。読み手を意識しないで書いた自己 PR も、読み手に違和感

を覚えさせてしまうであろう。

上の自己 PR の概念が理解できても、実際の文章でどのような語句を選べばよいか分からない学生がいるであろう。これに対し、タイ人ならびに日本人が用いた語句の傾向を 4.3 で示した。これらの語句は、読み手に応じて文章を変える練習に使えると考える。例えば、日本人向けの自己 PR 文の練習では、動詞の可能形を意識的に少なくする練習などが考えられる。

6.3 今後の課題

本研究の今後の課題を 2 つ挙げる。1 つ目は、分類作業（コーディング）の信頼性である。データを「自己 PR の対象」に分類する作業は、筆者一人の判断で行った。コーディングの信頼性を高めるために、第二認定者とコーディングの一致度を確認したい。2 つ目は、「考え方」および「行動」を PR している文の分析である。「考え方」は、日本人データで出現割合が高く、タイ人の 2.1 倍であった。「行動」は、タイ人および日本人データの両方で出現割合が高く、30%を超えていた。本稿で「主観的能力」の PR に現れる語句を明らかにしたように、「考え方」および「行動」についても、現れる語句をタイ人・日本人別に明らかにしたい。

<参考文献>

- ・金庚芬「会話に見られる『ほめ』の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124、2005、pp.13-22
- ・熊取谷哲夫「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究（二）』1989、pp.97-108
- ・小島弥生「自己呈示としての就職活動に関する探索的研究 — 準備活動，日常生活での自己呈示スタイルおよび評価欲求の影響について」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』6、2006、pp.59-70
- ・小玉安恵「対談インタビューにおけるほめの機能（1）— 会話者の役割とほめの談話における位置という観点から —」『日本語学』5、1996、pp.59-67
- ・鷺坂由紀子「経営行動科学を活かす（4） 作文評定の技術と信頼性 — エントリ

- ーシートによる採用選考の有効性実験からー」『人事マネジメント』7、2000、pp.84-89
- ・野元千寿子「留学生に対するビジネス日本語教育ー APU における教育実践とアンケート実施よりー」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』15、2004、pp.31-43
 - ・古川由里子「書き言葉データにおける<対者ほめ>の特徴ー対人関係から見た『ほめ』の分析ー」『日本語教育』117、2003、pp.33-42
 - ・森田良行『意味分析の方法ー理論と実践ー』ひつじ書房、1996
 - ・柳田明子・村上英樹・西村剛「大学生採用における能力識別に関する実験的考察：航空会社の一例」ディスカッション・ペーパー、2012-30、神戸大学大学院経営学研究科、2012、<http://www.b.kobe-u.ac.jp/paper/2012_30.pdf> (2013年11月21日閲覧)
 - ・Herbert, R. K. The ethnography of English compliments and compliment responses: A contrastive sketch. In W. Oleksy (ed.), *Contrastive pragmatics*, Amsterdam: John Benjamins, 1989、pp.3-35
 - ・Holmes, J. Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy, *Journal of Pragmatics*, 12 (4), 1988、pp.445-465

使用資料

- ・キャリアデザインプロジェクト(編)、松永夏幸(監修)『内定勝者 私たちはこう言った! こう書いた! 合格事例集&セオリー2014 エントリーシート編』PHP 研究所、2012

参照資料

- ・日経 HR 編集部(編)『学生のためのリアル就活本 就職活動ナビゲーション 2014 年度版』日経HR、2012
- ・成美堂出版編集部(編)『最新最強のエントリーシート・自己 PR・志望動機 15

年版』成美堂出版、2013

付記

This research is supported by the Ratchadaphiseksomphot
Endowment Fund of Chulalongkorn University (RES560530179-HS)

日本語慣用句の研究

—「目」が句頭に位置する慣用句を中心に—

The Corpus Based Study of Japanese Idioms;

In case of Idiom starting with “Me”

イティボン・ブアヨイ

タマサート大学大学院 日本学研究科 M3

要旨

語学学習の中でも、慣用句の習得は学習者にとって難しい課題の一つである。

日本語の非母語話者が慣用句を学習する際、字面をそのまま受けとめることはできても、即座に意味を理解するのは困難である。また、学習者は、どの慣用句から学習を始めればよいか分からない。それは、学習をガイドする適当な教材がないことによる。この立場から、本研究では、(1) 辞書に収録された慣用句を抽出し、(2) 新聞データベースを使って、これら慣用句の使用状況（使用頻度および形態）を調査し、(3) 辞書に載っている慣用句と新聞での使用状況を比較し、(4) 慣用句のコロケーションを調査・分析した。本研究の成果が、日本語慣用句の学習において、教師と学習者の参考になればと思う。

キーワード: 慣用句、コーパス、慣用句のコロケーション

Abstract

For learners of second language the task for learning the proper usage of idiom is difficult. It is also know that foreign language learners cannot directly comprehend the meaning of idiom. They do not know how to start learning idiom and which

idiom is frequently used. In addition, there is rarely found any textbook that describe the idiom conditions of use. Base on the present study, it aimed at (1) extracting idioms from dictionary; (2) investigating how these idioms were applied in newspaper; (3) comparing between idioms found in dictionary with that of found in newspaper; (4) studying of idiom colocation. The result of this study would provide guideline for the study of Japanese idioms for language teachers as well as learners.

Keywords: Idiom, corpus, idiom colocation

1. はじめに

語学学習の中でも、慣用句の習得は学習者にとって難しい課題の一つである。「慣用句」とは複数の語が結合したものであって、その結びつきが比較的固く、全体で固定した意味を持つ成句である。また、慣用句の多くは比較的是っきりした比喩的意味を持っていることから、日本人の生活・発想を探る格好の材料となる。

外国人にとって日本語慣用句の習得が難しい原因は、慣用句を構成する語それぞれの意味が分かって、それを足し合わせたものが慣用句の意味にならないことにある。つまり慣用句が文中に入ると、文全体の意味が把握しにくくなる。また、外国人日本語学習者は、どの慣用句から習得を始めればよいか分からない。学習をガイドする適当な教材がないことによる。

本研究では以上のことを踏まえ、辞書に収録された慣用句をまず抽出し、新聞データベースを使って、これら慣用句の使用状況を調査した。本研究が、日本語慣用句の学習において、教師と学習者の参考になればと思う。

2. 慣用句に関する先行研究

『国語学大辞典』（1993 八版：207）では「日本で慣用句というのは、いつでも二つ以上の単語が一続きに、又は、相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表わすものをさす（1）その構成要素の意味からだけでは、その句全体の意味が理解できないような表現、すなわち、もとの意味が拡張または転用され、あるいは、比喩的に用いられて固定した表現（例「人をあごで使う」）、（2）その構成要素になる語が、その語結合としてしか用いられないような表現（例「間髪を入れず」）、（3）普通の文法や理論的な意味からは説明できないような表現（例「くそくり」）などを慣用句ということもある。」と述べられている。

ミンダニー・佐野（2001）は「日本語を非母語(Non-Native)とする日本語学習者にとって、何故、慣用句は難しいのか。慣用句の学習に供される参考書には、どのような教材特徴があるか。また、分野毎に利用頻度等の統計情報を利用して作成された慣用句リストは存在するのか」という観点から3つのコーパスとテキスト処理プログラムを使用し、新聞や小説で常用された127個のNPV形慣用句^①について、頻度をもとにした慣用句リストを作成した。このリストは従来の慣用句の参考書とは違う資料になっている。

また、TSAI Yu-lin・SENBA Mitsuaki・WANG Ming-tung (2010)は「外国人が日本語の慣用句を勉強する際には、字面をそのまま受けとめることはできても即座に意味などを理解するのは困難である。しかし、慣用句を初・中・上級に分けたり、又は常用か否かなどの情報を示した辞書や教材はめったにない。したがって、何らかの基準で慣用句の難易度、使用頻度、使用上の注意点などを提示した教材があれば、外国人が日本語の慣用句を勉強する上で大いに参考

^①名詞(Noun)+助詞(Particle)+動詞(Verb)パターンの慣用句。

になると思われる」。この立場から、(1)多くの辞書に収録された慣用句を抽出し、(2) 慣用句の構成を分析し、(3) 慣用句が教材に取り入れられている様子を検討し、(4) 慣用句の新聞での実際の使用状況を調べた。

上述した研究は慣用句の調査を通して学習者の理解・記憶を助け、慣用句の運用力向上に役立つものと思われる。

3. 調査の概要

今回の調査では、『日本語慣用句辞書』（米川明彦・大谷伊都子、2011年4版発行）と『読売新聞』（2011年11月29日～2012年11月29日「全国版」；「ヨミダス歴史館」を使用）を資料として用いた。本研究では「目」が句頭に位置する慣用句を中心に調査した。

3.1 本資料は、『日本語慣用句辞典』から身体に関する語 39 語（440 慣用句）を抜き出し、身体別の慣用句数を調査した。結果は以下の表 1 のようになっている。

（表 1）日本語慣用句辞典における身体別慣用句数

| 順位 | 身体語 | 慣用句数 | 順位 | 身体語 | 慣用句数 |
|----|-------|------|----|----------|------|
| 1 | め(目) | 88 | 21 | した(舌) | 3 |
| 2 | て(手) | 65 | 22 | せ(背) | 3 |
| 3 | み(身) | 29 | 23 | つめ(爪) | 3 |
| 4 | むね(胸) | 28 | 24 | はだ(肌) | 3 |
| 5 | くち(口) | 21 | 25 | ひざ(膝) | 3 |
| 6 | はら(腹) | 20 | 26 | へそ(臍) | 3 |
| 7 | あし(足) | 18 | 27 | きびす(踵) | 2 |
| 8 | はな(鼻) | 18 | 28 | しんぞう(心臓) | 2 |
| 9 | みみ(耳) | 18 | 29 | ちよう(腸) | 2 |
| 10 | かお(顔) | 14 | 30 | がく(額) | 2 |

| | | | | | |
|----|---------|----|----|----------|-----|
| 11 | しり (尻) | 13 | 31 | まゆ (眉) | 2 |
| 12 | かた (肩) | 11 | 32 | ゆび (指) | 2 |
| 13 | こし (腰) | 11 | 33 | け (毛) | 1 |
| 14 | ほね (骨) | 9 | 34 | すね (脛) | 1 |
| 15 | きも (肝) | 8 | 35 | てのひら (掌) | 1 |
| 16 | は (歯) | 8 | 36 | のど (喉) | 1 |
| 17 | うで (腕) | 7 | 37 | ふ (腑) | 1 |
| 18 | くび (首) | 7 | 38 | また (股) | 1 |
| 19 | あたま (頭) | 6 | 39 | まなじり (眦) | 1 |
| 20 | あご (顎) | 4 | 合計 | | 440 |

3.2 これらの身体に関する慣用句 440 件の使用状況を調べるために、新聞での使用頻度を調査した。調査は2011年11月29日～2012年11月29日の『読売新聞』を対象に行なった。出現回数は表2に示した。

(表2) 身体に関する表現が新聞に用いられた回数及び順位 (上位100位)

| 順位 | 慣用句 | 新聞に用いられた回数 | 順位 | 慣用句 | 新聞に用いられた回数 |
|----|--------|------------|----|---------|------------|
| 1 | 手にする | 2853 | 51 | 肝に銘じる | 133 |
| 2 | 足を運ぶ | 1967 | 52 | 目を覚ます | 129 |
| 3 | 口にする | 1665 | 53 | 目を見張る | 127 |
| 4 | 耳を傾ける | 1460 | 54 | 手を上げる | 126 |
| 5 | 胸を張る | 1282 | 55 | 肩を並べる | 121 |
| 6 | 骨を折る | 1108 | 56 | 目がない | 120 |
| 7 | 目にする | 947 | 57 | 足を延ばす | 118 |
| 8 | 手に入る | 893 | 58 | 手が回らない | 118 |
| 9 | 手を合わせる | 816 | 59 | 目が離せない | 118 |
| 10 | 目を細める | 755 | 60 | 手が入る | 116 |
| 11 | 目を向ける | 671 | 61 | 歯を食いしばる | 116 |
| 12 | 肩を落とす | 603 | 62 | 身が引き締まる | 115 |
| 13 | 目を引く | 551 | 63 | 耳を澄ます | 114 |
| 14 | 手に入れる | 524 | 64 | 腕を振るう | 110 |

| | | | | | |
|----|---------|-----|----|--------|-----|
| 15 | 顔を出す | 500 | 65 | 胸が熱くなる | 107 |
| 16 | 身を寄せる | 384 | 66 | 身をもって | 106 |
| 17 | 耳にする | 374 | 67 | 胸が痛む | 106 |
| 18 | 目に入る | 357 | 68 | 目を疑らす | 106 |
| 19 | 頭を抱える | 320 | 69 | 目に触れる | 102 |
| 20 | 腹を立てる | 315 | 70 | 目を開く | 102 |
| 21 | 足を止める | 314 | 71 | 腰を据える | 100 |
| 22 | 手を出す | 302 | 72 | 手を広げる | 98 |
| 23 | 目を通す | 294 | 73 | 背を向ける | 93 |
| 24 | 手を引く | 289 | 74 | 頭が下がる | 89 |
| 25 | 手を伸ばす | 270 | 75 | 目を丸くする | 89 |
| 26 | 腕を磨く | 269 | 76 | 手がない | 87 |
| 27 | 手を打つ | 253 | 77 | 口を出す | 86 |
| 28 | 手を取る | 230 | 78 | 舌を巻く | 81 |
| 29 | 腹が立つ | 223 | 79 | 目を配る | 81 |
| 30 | 目に留まる | 210 | 80 | 手に渡る | 78 |
| 31 | 胸を打つ | 202 | 81 | 首を切る | 75 |
| 32 | 目が覚める | 202 | 82 | 手を借りる | 72 |
| 33 | 手が届く | 181 | 83 | 手を離す | 72 |
| 34 | 手を入れる | 176 | 84 | 身を引く | 68 |
| 35 | 手を抜く | 174 | 85 | 耳に入る | 67 |
| 36 | 目に付く | 172 | 86 | 胸を借りる | 66 |
| 37 | 首が回らない | 171 | 87 | 身が入る | 64 |
| 38 | 目を付ける | 169 | 88 | 身を削る | 63 |
| 39 | 目を光らす | 168 | 89 | 目が高い | 62 |
| 40 | 頭角を現す | 166 | 90 | 足が速い | 61 |
| 41 | 舌鼓を打つ | 162 | 91 | 顔が広い | 61 |
| 42 | 身になる | 160 | 92 | 手が上がる | 61 |
| 43 | 手を差し伸べる | 158 | 93 | 手を染める | 58 |
| 44 | 足を引っ張る | 155 | 94 | 手を切る | 56 |
| 45 | 目に浮かぶ | 147 | 95 | 身に付く | 56 |
| 46 | 身に覚えがない | 145 | 96 | 身に染みる | 55 |
| 47 | 胸に刻む | 139 | 97 | 目が届く | 55 |

| | | | | | |
|----|--------|-----|-----|-------|----|
| 48 | 手を握る | 138 | 98 | 目をそらす | 55 |
| 49 | 目を奪われる | 137 | 99 | 手を焼く | 52 |
| 50 | 目を離す | 137 | 100 | 目に見えて | 49 |

3.3 表 2 に示すように、身体に関する慣用句が新聞に用いられた上位 100 位の中で、「目」が句頭に位置する慣用句が 27 項目あり、最も多いことが分かる。また、米川明彦（2005）においても、人の体に関する慣用句の中では「目」に関する慣用句が一番多いと指摘されている。そのため、本研究では「目」が句頭に位置する慣用句について、さらに詳しく調べることにした。

なお、本研究では「目」が句頭に位置するもの（「目を通す」「目に見えて」など）を対象としており、「目」が句の途中で位置するもの（「抜け目がない」「長い目で見ると」「大目に見る」「二目とは見られない」など）については対象としていない。

また、「目」が句頭に位置する慣用句には、「目」の単純語及び「目頭」「目端」「目鼻」「目糞鼻糞」などの複合語の両者を含めた。慣用句は、『日本語慣用句辞書』（米川明彦・大谷伊都子、2011年4版発行）にのっているものの中で「目」が句頭に位置する慣用句は 88 件あった。本研究では表 3 に示す 88 の慣用句について分析する。

(表 3) 「目」が句頭に位置する表現の出現回数及び順位

| 順位 | 慣用句 | 新聞に用いられた回数 | 順位 | 慣用句 | 新聞に用いられた回数 |
|----|-------|------------|----|---------|------------|
| 1 | 目にする | 947 | 45 | 目にも留まらぬ | 7 |
| 2 | 目を細める | 755 | 46 | 目に会う | 6 |
| 3 | 目を向ける | 671 | 47 | 目を白黒させる | 6 |
| 4 | 目を引く | 551 | 48 | 目じゃない | 5 |

| | | | | | |
|----|---------|-----|----|--------------|---|
| 5 | 目に入る | 357 | 49 | 目の敵にする | 5 |
| 6 | 目を通す | 294 | 50 | 目を回す | 5 |
| 7 | 目に留まる | 210 | 51 | 目が覚めるように | 4 |
| 8 | 目が覚める | 202 | 52 | 目に留める | 4 |
| 9 | 目に付く | 172 | 53 | 目も当てられない | 4 |
| 10 | 目を付ける | 169 | 54 | 目もくれない | 4 |
| 11 | 目を光らす | 168 | 55 | 目を皿のようにする | 4 |
| 12 | 目に浮かぶ | 147 | 56 | 目を剥く | 4 |
| 13 | 目を奪われる | 137 | 57 | 目が高い | 3 |
| 14 | 目を離す | 137 | 58 | 目が眩む | 3 |
| 15 | 目を覚ます | 129 | 59 | 目と鼻 | 3 |
| 16 | 目を見張る | 127 | 60 | 目くじらを立てる | 3 |
| 17 | 目がない | 120 | 61 | 目に入れても痛くない | 3 |
| 18 | 目が離せない | 118 | 62 | 目を注ぐ | 3 |
| 19 | 目を凝らす | 106 | 63 | 目が利く | 2 |
| 20 | 目に触れる | 102 | 64 | 目が飛び出る | 2 |
| 21 | 目を開く | 102 | 65 | 目鼻を付ける | 2 |
| 22 | 目を丸くする | 89 | 66 | 目が据わる | 1 |
| 23 | 目を配る | 81 | 67 | 目が点になる | 1 |
| 24 | 目が届く | 55 | 68 | 目から鼻に抜ける | 1 |
| 25 | 目をそらす | 55 | 69 | 目を掛ける | 1 |
| 26 | 目に見えて | 49 | 70 | 目を三角にする | 1 |
| 27 | 目を覆う | 31 | 71 | 目を遣る | 1 |
| 28 | 目を落とす | 30 | 72 | 目から鱗が落ちる | 0 |
| 29 | 目頭が熱くなる | 29 | 73 | 目から火が出る | 0 |
| 30 | 目に余る | 29 | 74 | 目糞鼻糞を笑う | 0 |
| 31 | 目と鼻の先 | 27 | 75 | 目玉の黒い内 | 0 |
| 32 | 目を疑う | 27 | 76 | 目に角を立てる | 0 |
| 33 | 目が留まる | 24 | 77 | 目に物見せる | 0 |
| 34 | 目が回る | 22 | 78 | 目の上の瘤 | 0 |
| 35 | 目の色が変わる | 22 | 79 | 目の黒い内 | 0 |
| 36 | 目を瞑る | 20 | 80 | 目の玉の黒い内 | 0 |
| 37 | 目の色を変える | 19 | 81 | 目の毒 | 0 |
| 38 | 目に見えている | 17 | 82 | 目の中へ入れても痛くない | 0 |

| | | | | | |
|----|---------|----|----|--------|---|
| 39 | 目を留める | 17 | 83 | 目端が利く | 0 |
| 40 | 目を盗む | 16 | 84 | 目鼻が付く | 0 |
| 41 | 目が肥える | 11 | 85 | 目も綾 | 0 |
| 42 | 目が光る | 10 | 86 | 目を掠める | 0 |
| 43 | 目に見えるよう | 8 | 87 | 目を晦ます | 0 |
| 44 | 目頭を熱くする | 7 | 88 | 目を細くする | 0 |

新聞データベース「全国版」；「ヨミダス歴史館」には、著作権の関係で検索できない記事がある。本研究ではアクセスできる記事に含まれる慣用語のみを対象とした。(表 4)

4. 調査の結果と分析

4.1 「目」が句頭に位置する慣用語が新聞に用いられている回数及び順位

これら「目」が句頭に位置する慣用語の使用頻度を新聞データベース「全国版」；「ヨミダス歴史館」を用いて調査した。調査は 2011 年 11 月 29 日～2012 年 11 月 29 日の『読売新聞』を対照にした。使用頻度は以下の表 4 のようになっている。

(表 4) 「目」が句頭に位置する慣用語が新聞に用いられた回数及び順位

| ランク | 慣用語 (回数) |
|--------------------|--|
| 201回以上 (5項目) | 目を細める (726)、目にする (713)、目を向ける (618)、目を引く (466)、目を通す (238) |
| 101～200回 (12項目) | 目に留まる (195)、目に入る (193)、目が覚める (179)、目を光らす (153)、目を付ける (140)、目に付く (131)、目に浮かぶ (129)、目を離す (127)、目を覚ます (115)、目を見張る (107)、目を奪われる (106)、目が離せない (104) |
| 50～100回 (5項目) | 目を凝らす (84)、目を丸くする (81)、目に触れる (76)、目を配る (75)、目が届く (51) |

| | |
|------------------|---|
| 10～49回 (18項目) | 目に見えて (49)、目をそらす (47)、目を開く (46)、目に余る (29)、目を落とす (28)、目を疑う (27)、目頭が熱くなる (26)、目を覆う (23)、目が留まる (23)、目の色が変わる (21)、目と鼻の先 (19)、目の色を変える (18)、目が無い(16)、目を盗む(16)、目に見えている (15)、目を留める (12)、目が回る (11)、目が肥える (10) |
| 1～9回 (28項目) | 目にも留まらぬ (6)、目が光る (5)、目に見えるよう (5)、目頭を熱くする (5)、目を皿のようにする (4)、目が高い (3)、目に会う (3)、目を白黒させる (3)、目の敵にする (3)、目が覚めるような (3)、目に留める (3)、目も当てられない (2)、目もくれない (3)、目に入れても痛くない (3)、目が眩む (2)、目くじらを立てる (2)、目鼻を付ける (2)、目を隠る (1)、目を回す (1)、目を剥く (1)、目を注ぐ (1)、目が利く (1)、目が飛び出る (1)、目が据わる (1)、目が点になる (1)、目から鼻に抜ける (1)、目を掛ける (1)、目を遣る (1) |
| 0回 (20項目) | 目から鱗が落ちる、目から火が出る、目糞鼻糞を笑う、目玉の黒い内、目に角を立てる、目に物見せる、目の上の瘤、目の黒い内、目の玉の黒い内、目の毒、目の中へ入れても痛くない、目端が利く、目鼻が付く、目と鼻、目も綾、目を掠める、目を晦ます、目を細くする、目じやない、目を三角にする |

表 4 を見ると、新聞での出現回数が多い慣用句は「目を細める」が一位で、次いで「目にする」、「目を向ける」、「目を引く」、「目を通す」の順になることが分かる。ミンダニー・佐野 (2001) では、「記憶の負担量に視点を置くと、日本語学習者が慣用句を効率的且つ効果的に学習する方法は、頻繁に使われる慣用句を優先して学習すること」と指摘している。この観点から、学習者は使用回数が多い慣用句を優先的に学ぶべきであろう。

また、これらの慣用句は果たして常に慣用句の「原形」^②で用いられているだろうか。もし全体にそうだと言いきれなかったら、どのような形が常用され

^② 「原形」の各表の「慣用句」の欄で提示されている形を指す。また、もともと「～ない」という形の慣用句 (本稿における「目が離せない」「目もくれない」「目に入れても痛くない」「目も当てられない」) の「～ない」または「～なかった」の欄はそれぞれ「～なくない」「～なくなかった」の形となる。

ているか、というような情報を教材に入れたら学習上の大きな参考になると思われる。それを究明するため、以下、慣用句が「原形または原形以外の形」^㉞で新聞に使われている回数をまとめた。その結果を表5に示す。

4.2 「目」が句頭に位置する慣用句が新聞に用いられている様子

表5 「目」が句頭に位置する慣用句が新聞に用いられている様子

| No | 慣用句 | 原形 | 原形以外の形 | 合計 |
|----|-------|-----|--------|-----|
| 1 | 目を細める | 234 | 492 | 726 |
| 2 | 目にする | 295 | 418 | 713 |
| 3 | 目を向ける | 234 | 382 | 616 |
| 4 | 目を引く | 309 | 157 | 466 |
| 5 | 目を通す | 77 | 161 | 238 |
| 6 | 目に留まる | 32 | 163 | 195 |
| 7 | 目に入る | 64 | 129 | 193 |
| 8 | 目が覚める | 46 | 133 | 179 |
| 9 | 目を光らす | 2 | 151 | 153 |
| 10 | 目を付ける | 3 | 137 | 140 |
| 11 | 目に付く | 63 | 68 | 131 |
| 12 | 目に浮かぶ | 95 | 34 | 129 |

㉞ TSAI Yu-lin・SENBA Mitsuaki・WANG Ming-tung (2010) は「気」が句頭に位置する慣用句の使用形態を調べた。概要を TSAI Yu-lin ほかから引用し、表6に挙げる。TAI Yu-lin ほか『新日本語の基礎』、『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）など多くの外国人向けの日本語教材で初級の段階で導入されている「（～ます／～たい）連用形」「た形」「ない形」「～なかった形」「辞書形」のみについて検討した。本稿では『基礎日本語文法』一改訂版(1992年)に基づき、「～ます形」「～ない形」「～なかった形」「～た形」「～て形」「可能形」「使役形」「受身形」「使役受身」「命令形」「意志形」「（～ば～たら）条件形」について検討する。

| | | | | |
|----|-----------|----|-----|-----|
| 13 | 目を離す | 12 | 115 | 127 |
| 14 | 目を覚ます | 31 | 84 | 115 |
| 15 | 目を見張る | 56 | 51 | 107 |
| 16 | 目を奪われる | 30 | 76 | 106 |
| 17 | 目が離せない | 98 | 6 | 104 |
| 18 | 目を凝らす | 29 | 55 | 84 |
| 19 | 目を丸くする | 10 | 71 | 81 |
| 20 | 目に触れる | 51 | 25 | 76 |
| 21 | 目を配る | 28 | 47 | 75 |
| 22 | 目が届く | 14 | 37 | 51 |
| 23 | 目に見えて | 49 | 0 | 49 |
| 24 | 目をそらす | 7 | 40 | 47 |
| 25 | 目を開く | 9 | 37 | 46 |
| 26 | 目に余る | 26 | 3 | 29 |
| 27 | 目を落とす | 3 | 25 | 28 |
| 28 | 目を疑う | 6 | 21 | 27 |
| 29 | 目頭が熱くなる | 4 | 22 | 26 |
| 30 | 目を覆う | 7 | 16 | 23 |
| 31 | 目が留まる | 2 | 21 | 23 |
| 32 | 目の色が変わる | 2 | 19 | 21 |
| 33 | 目と鼻の先 | 19 | 0 | 19 |
| 34 | 目の色を変える | 3 | 15 | 18 |
| 35 | 目がない | 10 | 6 | 16 |
| 36 | 目を盗む | 1 | 15 | 16 |
| 37 | 目に見えている | 13 | 2 | 15 |
| 38 | 目を留める | 2 | 10 | 12 |
| 39 | 目が回る | 6 | 5 | 11 |
| 40 | 目が肥える | 0 | 10 | 10 |
| 41 | 目にも留まらぬ | 6 | 0 | 6 |
| 42 | 目が光る | 0 | 5 | 5 |
| 43 | 目に見えるよう | 5 | 0 | 5 |
| 44 | 目頭を熱くする | 0 | 5 | 5 |
| 45 | 目を皿のようになる | 0 | 4 | 4 |
| 46 | 目が高い | 3 | 0 | 3 |

| | | | | |
|----|------------|---|---|---|
| 47 | 目に会う | 0 | 3 | 3 |
| 48 | 目を白黒させる | 2 | 1 | 3 |
| 49 | 目の敵にする | 3 | 0 | 3 |
| 50 | 目が覚めるように | 3 | 0 | 3 |
| 51 | 目に留める | 0 | 3 | 3 |
| 52 | 目もくれない | 1 | 2 | 3 |
| 53 | 目に入れても痛くない | 3 | 0 | 3 |
| 54 | 目も当てられない | 2 | 0 | 2 |
| 55 | 目が眩む | 2 | 0 | 2 |
| 56 | 目くじらを立てる | 1 | 1 | 2 |
| 57 | 目鼻を付ける | 1 | 1 | 2 |
| 58 | 目を瞑る | 0 | 1 | 1 |
| 59 | 目を回す | 1 | 0 | 1 |
| 60 | 目を剥く | 0 | 1 | 1 |
| 61 | 目を注ぐ | 1 | 0 | 1 |
| 62 | 目が利く | 1 | 0 | 1 |
| 63 | 目が飛び出る | 1 | 0 | 1 |
| 64 | 目が据わる | 1 | 0 | 1 |
| 65 | 目が点になる | 0 | 1 | 1 |
| 66 | 目から鼻に抜ける | 1 | 0 | 1 |
| 67 | 目を掛ける | 0 | 1 | 1 |
| 68 | 目を遣る | 1 | 0 | 1 |

表5から、「目に見えて」「目と鼻の先」「目にも留まらぬ」「目に見えるよう」「目が高い」「目の敵にする」「目が覚めるように」「目に入れても痛くない」「目も当てられない」「目が眩む」「目を回す」「目を注ぐ」「目が利く」「目が飛び出る」「目が据わる」「目から鼻に抜ける」「目を遣る」は今回の調査した新聞では慣用句そのままの形でしか用いられていないことが分かる。つまり、これらの慣用句はそのまま形で用いられる率が高い慣用句だと考えられる。このことを学習者へ示すことが、学習を効率的に進める上で有効だと考えられる。

一方、表 5 で原形以外の形で使われている慣用句がかなり多いことも分かった。特に、「目を細める」「目にする」「目を向ける」「目を通す」「目に留まる」「目に入る」「目が覚める」「目を光らす」「目を付ける」「目に付く」「目を離す」「目を覚ます」「目を奪われる」「目を凝らす」「目を覆う」「目を丸くする」「目をそらす」「目を開く」「目を落とす」「目を疑う」「目頭が熱くなる」「目を覆う」「目が留まる」「目の色が変わる」などは「原形よりむしろ原形以外の形で使われることが多い。

また、その変形及び使用回数は表 6 で示す。

表 6 で、よく「た形」で用いられている慣用句に「目を細める」「目に留まる」「目が覚める」「目を付ける」「目を離す」「目を覚ます」「目を奪われる」「目を疑う」「目頭が熱くなる」「目が留まる」「目の色が変わる」「目が肥える」「目頭を熱くする」「目に留める」がある。「て形」が多く用いられているのは「目を向ける」「目を通す」「目を凝らす」「目を丸くする」「目を開く」「目を落とす」「目の色を変える」「目を盗む」「目が光る」「目を皿のようにする」である。中でも特に「目を皿のようにする」は「て形」でしか用いられていないことである。また、「ます形」が多く用いられているのは「目を覆う」で、「使役形」が多く使われているのは「目を覆う」「目を光らす」であることが分かる。

それに対して、「ない形」と「なかった形」の欄で太字「0」で表示しているのは今回の調査範囲内で否定形（「ない形」と「なかった形」）が一度も現れていない慣用句である。そのようなものに、「目を細める」「目を光らす」「目を付ける」「目を見張る」「目を丸くする」「目に見えて」「目を開く」

「目に余る」「目が留まる」「目の色が変わる」「目と鼻の先」などがあげられる。

4.3 辞書に載っている慣用句と新聞での使用状況の比較

今回の調査では、『日本語慣用句辞書』（米川明彦・大谷伊都子、2011年4版発行）と『読売新聞』（2011年11月29日～2012年11月29日「全国版」；「ヨミダス歴史館」を使用）を資料として用いた。

4.3.1 慣用句の変異形/意味同様

辞書に載っている次の慣用句は、それぞれ、構成あるいは構成要素が部分的に異なっているが、意味はほぼ同である。

- 目を細める^④ (729)、目を細くする^⑤ (0)
- 目と鼻の先 (19)、目と鼻 (0)
- 目に入れても痛くない (3)、目の中へ入れても痛くない (0)
- 目の黒い内 (0)、目の玉の黒い内 (0)、目玉の黒い内 (0)

「目を細める」と「目を細くする」、「目と鼻の先」と「目と鼻」、「目に入れても痛くない」と「目の中へ入れても痛くない」は『日本語慣用句辞書』（米川 明彦・大谷 伊都子、2011年4版発行）で同じ意味であると定義されているが、実際新聞で使用されているのは「目を細める」「目と鼻の先」「目

^④ 「目を細める」；**意味**うれしくて、または見るものがかわいらしくて思わず笑みを浮かべる。（日本語慣用句辞典、p494）

^⑤ 「目を細くする」；**意味**「目を細める」に同じ。（日本語慣用句辞典、p494）

| No | 慣用句 | 原形 | 原形以外の形 | | | | | | | | | | 合計 | | | |
|----|--------|-----|--------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|----|-----|-----|-----|
| | | | ます形 | ない形 | なかつた | た形 | て形 | 可能形 | 使役形 | 受身形 | 使役受身 | 命令形 | | 意志形 | 条件形 | |
| 1 | 目を細める | 234 | 9 | 0 | 0 | 272 | 208 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 726 |
| 2 | 目にする | 295 | 5 | 3 | 0 | 272 | 133 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 713 |
| 3 | 目を向ける | 234 | 2 | 14 | 5 | 66 | 247 | 0 | 4 | 17 | 0 | 0 | 13 | 14 | 616 | |
| 4 | 目を引く | 309 | 0 | 1 | 0 | 50 | 101 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 2 | 0 | 466 | |
| 5 | 目を通す | 77 | 11 | 1 | 0 | 29 | 119 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 238 | |
| 6 | 目に留まる | 32 | 0 | 1 | 1 | 95 | 64 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 195 | |
| 7 | 目に入る | 64 | 0 | 12 | 1 | 69 | 42 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 193 | |
| 8 | 目が覚める | 46 | 0 | 3 | 0 | 82 | 46 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 179 | |
| 9 | 目を光らす | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 151 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 153 | |
| 10 | 目を付ける | 3 | 0 | 0 | 0 | 83 | 47 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 140 | |
| 11 | 目に付く | 63 | 14 | 4 | 1 | 41 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 131 | |
| 12 | 目に浮かぶ | 95 | 0 | 1 | 1 | 5 | 26 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 129 | |
| 13 | 目を離す | 12 | 0 | 26 | 1 | 63 | 13 | 12 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 127 | |
| 14 | 目を覚ます | 31 | 0 | 2 | 2 | 41 | 24 | 0 | 6 | 1 | 0 | 3 | 2 | 3 | 115 | |
| 15 | 目を見張る | 56 | 0 | 0 | 0 | 37 | 9 | 1 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 107 | |
| 16 | 目を奪われる | 30 | 7 | 1 | 0 | 35 | 33 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 106 | |
| 17 | 目が離せない | 98 | 0 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 104 | |
| 18 | 目を疑らす | 29 | 2 | 2 | 0 | 14 | 30 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 84 | |
| 19 | 目を丸くする | 10 | 0 | 0 | 0 | 34 | 37 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 81 | |
| 20 | 目に触れる | 51 | 0 | 11 | 1 | 1 | 7 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 1 | 1 | 76 | |
| 21 | 目を配る | 28 | 6 | 6 | 0 | 3 | 28 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 75 | |
| 22 | 目が届く | 14 | 17 | 17 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 51 | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|---------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 目が覚めるよう | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 51 | 目に留める | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 52 | 目もくれない | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 53 | 目に入れても痛 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 54 | 目も当てられな | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 55 | 目が眩む | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 56 | 目くじらを立て | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 57 | 鼻を付ける | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 58 | 目を瞑る | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 59 | 目を回す | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 60 | 目を剥く | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 61 | 目を注ぐ | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 62 | 目が利く | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 63 | 目が飛び出る | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 64 | 目が据わる | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 65 | 目が点になる | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 66 | 目から鼻に抜け | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 67 | 目を掛ける | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 68 | 目を遣る | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |

に入れても痛くない」である。頻繁に使われる慣用句を優先的に学習すべきであることについて検討すると、「目を細める」「目と鼻の先」「目に入れても痛くない」の慣用句を優先的に教えるべきであろう。

なお、「目の黒い内」、「目の玉の黒い内」、「目玉の黒い内」は実際新聞で使用されていないとしても学習者が慣用句を勉強する上で、構成要素が部分的に異なっているが、意味がほぼ同である慣用句があることについての注意点として参考になるとと思われる。

4.3.2 自動詞形/他動詞形が併存する慣用句

辞書に載っている次の慣用句は、自動詞形・他動詞形の間、意味的な対応が認められる。

①「他動詞」で多用されている慣用句

- 目を光らす (153) 、目が光る (6)

②「自動詞」で多用されている慣用句

- 目頭が熱くなる (26) 、目頭を熱くする (5)
- 目が回る (11) 、目を回す (1)

これらの自動詞形/他動詞形が併存する慣用句は辞書で同じ意味であると定義されていたが、実際新聞での使用状況の視点からは、「目を光らす」と「目鼻を付ける」は「他動詞」で用いられる率が高い慣用句であることが分かる。

逆に、「目頭が熱くなる」と「目が回る」は「他動詞」よりむしろ「自動詞」で用いられることが多いことである。

4.4 「目」が句頭に位置する慣用句のコロケーション

コロケーションについては、Sinclair (1991) では「お互いに近くに共起する 2 語あるいはそれ以上の語に対する一般的な語」と定義されている。コロケーションの調査は「共起頻度」「共起位置」「共起の構成」又は「自然的に共起」など、いろいろポイントがあるが、本稿では慣用句の「共起頻度」と「共起位置」のみを中心に調査した。

ここではコロケーションの「共起頻度」と「共起位置」が明確に分かる表現を例として挙げる。

4.4.1 「目を細める」

コロケーション：

「(発話)」と目を細める 672/726(93.00%)

「 」に続く表現として「と+目を細める」が 726 編のうち 93%にあたる 672 件該当した。

例文：

- 同僚の島田栄子さん (44) は「ヘルパーなどの資格はないが、さりげない気配りができ、職場が明るくなった」と目を細めた。
(読売新聞, 2012.12.26)
- 河合さんは「一つずつ謎が解けるたびに喜びがあった。次を目指す」と目を細めた。(読売新聞, 2012.1.26)

4.4.2 「目に見えて」

この表現は変化を表わす言葉とともに散見されるが、中でも特に「増える」又「減る」の連用修飾語として多く用いられていた。

| | |
|----------|---------------|
| 目に見えて増える | 11/49(22.45%) |
|----------|---------------|

| | |
|---------|--------------|
| 目に見えて減る | 9/49(18.37%) |
|---------|--------------|

例文：

- 空き家条例は、「危険な家屋が目に見えて増えた」との市民の指摘をきっかけに制定。(読売新聞、2012.11.11)
- 理事長の鶴岡秀樹さん(54)は「カエルのが目に見えて増える」など、動植物の多様性が保たれ、昔の里山環境に近づいてきた」と話す。(読売新聞、2011.12.2)
- ボランティア活動への問い合わせなどの電話も、夏頃から目に見えて減った。(読売新聞、2012.3.8)
- 気仙沼を訪れるボランティアの数は目に見えて減ってきた。(読売新聞、2012.4.11)

4.4.3 「目を離す」

コロケーション：

| | |
|------------|----------------|
| 「目を離した+隙に」 | 40/128(31.25%) |
|------------|----------------|

| | |
|------------|----------------|
| 「目を離した+間に」 | 13/128(10.16%) |
|------------|----------------|

この表現を用いた連体修飾においては時間の長さを表わす言葉が使われるが、中でも「隙に」がもっとも多く31.25%、次いで「間に」が10.16%であった。

例文：

- 2人にけがはなかった。女兒は親が目を離した隙に、踏切に入ってしまったという。(読売新聞、2011.12.16)

- いずれも利用客が休憩中に、ゲレンデで板を立てかけ、**目を離した隙**に盗まれていたという。(読売新聞、2012.2.7)
- 同日午前 6 時頃、1 階の台所で料理をしていたが、火から**目を離した間に**出火したらしい。(読売新聞、2012.6.7)

5. まとめと今後の課題

本研究によって、以下のことが分かった。

- ❖ 『日本語慣用句辞書』（米川 明彦・大谷 伊都子、2011 年 4 版発行）に載っている「目」が句頭に位置する慣用句は 88 件あった。
- ❖ 上記の慣用句のうち、たとえば『読売新聞』（2011 年 11 月 29 日～2012 年 11 月 29 日）で「目もくれない」は 3 回、「目を細める」は 726 回も用いられている。このような出現回数から見れば、「目もくれない」よりも、「目を細める」を優先的に学ぶべきだと思われる。
- ❖ 慣用句の新聞での使用状況にはかなりの差が見られた。たとえば、「目が高い」などが常にもとの形で用いられているのに対して、「目を細める」が「目を細くする」より、「目を光らす」も「目が光る」より多用されている。
- ❖ 「変異形意味同様構成」又は「自動詞形/他動詞形が併存」これらの慣用句は辞書で同じ意味であると定義されていたが、実際新聞での使用状況の視点からは、頻繁に使われる慣用句を優先的に学習するべきであろう。
- ❖ 今回の調査した「目」が句頭に位置する慣用句のコロケーションでは、慣用句が頻繁に使われる語句との組み合わせを知ることができた。例えば、「目に見えて」は変化を表わす言葉とともに散見されるが、中でも特に「増える」又「減る」の連用修飾語として多く用いられていたこと

がわかった。このことから、学習者へ慣用句とコロケーションの語句・種類・性質などの共起関係をいっしょに示すことが、慣用句の学習を効率的に進める上で有効だと考えられる。

また、今回は「目」が句頭に位置する慣用句を研究するが、今後の課題は、検索対象の慣用句の数と種類、そしてコーパスの種類を増やすことである。

<参考文献>

- ・ 国語学会『国語学大辞典』大修館書店、1993
- ・ 宋誓天 「韓国の日本語教育における慣用句の研究—動詞慣用句に対する使用実態の比較分析を中心に—」 *Studies in Japanese literature*, 40, 2005, pp.1-14
- ・ 益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法』くろしお出版、1992
- ・ 宮地裕『慣用句の意味と用法』明治書院、1994
- ・ ミンダニーほか「日本語学習者のための慣用句データベースの作成—統計処理を用いた—手法の提案—」、*Information Processing Society of Japan*, 2001, pp.55-62
- ・ 米川明彦ほか『日本語慣用句辞書』東京堂出版、2011
- ・ SINDAIR, J. *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford. Oxford University Press, 1991
- ・ TSAI Yu-lin ; SENBA Mitsuaki ; WANG Ming-tung 「Idiom starting with 「Ki(気)」 -Note to composing textbook for idiom-」 *Journal of language and literature* pp.84-90

参考 URL

- ・ 『読売新聞』 「ヨミダス歴史館」
<http://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/> (Last access 3 March, 2013)

編集後記

本論集は、2013年8月27日におこなわれた「第13回大阪大学・チューラーロンコーン大学大学院生研究交流会」で発表をおこなった院生たちが、発表後に再構成した論考が中心となっている。

巻頭に、水野亜紀子先生の論文を収録している。論文では樋口一葉のみならず、代表作『たけくらべ』ではなく『この子』をとりあげることで、一葉の結婚制度への批判、嫌悪感を紹介していただいた。李華勇氏は、感謝場面で謝罪するという言語行動が、相手に負担をかけまいとするポライトネスを意識する文化にもとづいているということをあきらかにした。シギナシ・ミハエラ氏は、西国三十三ヶ所巡礼の宗教的意義以外にも、ツーリズムの様相をあきらかにした。武田素子氏は、動詞テ形と形容詞テ形を比較しつつ、形容詞テ形に理由関係が読み取れる構造をあきらかにした。カウイター・フォーンサターポーン氏は、日本を訪れたタイ人高校生の異文化受容の実態をあきらかにした。陳怡寧氏は、武田泰淳の『十三妹』と『女賊の哲学』を分析し、十三妹像をあきらかにした。香山恆毅氏は、タイ人学生による日本企業への就活における自己アピールの内容をあきらかにした。イティボン・ブアヨイ氏は、慣用句学習について学習者へ慣用句とコロケーションの語句・種類・性質などの共起関係をいっしょにしめすことが、学習を効率的にすすめることをあきらかにした。

院生たちの研究課題は、彼らの言語的・文化的背景をこえて、非常にユニークかつ興味深い。その研究方法に強引さは否めない。だが、その社会的インパクトは小さくはない。今後の発展が楽しみである。

最後に、本号刊行にかかわってくださった編集委員および査読委員の先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。また、論集の刊行だけではなく、日頃の院生たちの研究に対し、厚いご支援を頂戴しているタイ国トヨタ自動車株式会社にも心より感謝の意を表します。

チューラーロンコーン大学文学部

平松 隆円

『日本研究論集』 第九号
Japanese Studies Journal No.9

2014年4月発行

April, 2014

編集代表

Editor in Chief

チョムナード・シティサン (チューラーロンコン大学助教授)
SETISARN, Chomnard (Assistant Professor, Chulalongkom University)

編集長

Issue Editor

平松隆円 (チューラーロンコン大学講師)
HIRAMATSU, Ryuen (Lecturer, Chulalongkom University)

副編集長

Associate Editor

アッタヤ・スワンラダー (チューラーロンコン大学助教授)
SUWANRADA, Attaya (Assistant Professor, Chulalongkom University)

査読委員

International Editorial Board

五之治昌比呂 (大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)

GONJOI, Masahiro (Associate Professor, Osaka University)

萩原孝恵 (チューラーロンコン大学講師)

HAGIWARA, Takae (Lecturer, Chulalongkom University)

堀川智也 (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻教授)

HORIKAWA, Tomoya (Professor, Osaka University)

カノックワン・ラオハブナナキット・片桐 (チューラーロンコン大学准教授)

KATAGIRI, Kanokwan Laohaburanakit (Professor, Osaka University)

加藤均 (大阪大学日本語日本文化教育センター教授)

KATO, Hitoshi (Professor, Osaka University)

岸田泰浩 (大阪大学日本語日本文化教育センター教授)

KISHIDA, Yasuhiro (Professor, Osaka University)

ソムキアット チャウエンギジワニット (タマサート大学)

CHAWENGIJWANICH, Somkiat (Associate Professor, Thammasat University)

田中博之 (パヤオ大学講師)
TANAKA, Hiroyuki (Lecturer, University of Phayao)

編集・発行

Edited and published by:

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座
Japanese Section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
Phyathai Road, Patumwan, Bangkok 10330 Thailand
大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化コース
Studies in Language and Society, Graduate School of Language and Culture, Osaka University
Aomatanihigashi, Minoo, Osaka Prefecture 562-0022 Japan

印刷・製本

Printed at:

Parbpim Limited Partnership
296 Arun-Amarin 30, Bangkeekan, Bangplad Bangkok, THAILAND 10700
Phone: +66 (0) 2433 0026-7
www.parbpim.com

Printed in Thailand

© Japanese Section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
(japsect@yahoo.com)

Studies in Language and Society, Graduate School of Language and Culture, Osaka University

ISSN 1906-8891

